

I 中ノ川流域の発掘調査とその経過

中ノ川は、鈴鹿市南部から亀山市南部にかけて流れる中規模河川である。この地域では、昭和60年度を皮切りに平成2年度までの6ヶ年にわたり、県営圃場整備事業が実施されている。それに伴い、数多くの遺跡が発掘調査されてきた。その他にも、河川改修工事や道路整備事業に伴う発掘調査、あるいは鈴鹿市教育委員会による発掘調査が実施されている。これらの調査遺跡を累積すると、平成17年度までに16遺跡約20,000㎡の発掘調査が実施されてきたこととなる（第I－1表）。

今回ここで報告するのは、県営圃場整備事業にかかる発掘調査のうち、これまでに資料化が不十分であった9遺跡で、発掘調査の件数としては8件分である。ただし、今回の報告は紙幅の都合もあり、必ずしも充分とは言えない。それでも、それぞれの状況を知るのに必要な情報は最低限盛り込んだ。今後は、これらの資料を総合的に用いることにより、考古学から見た中ノ川流域の地域史像を、より明確にするための努力が必要である。

第I－1表 中ノ川中流域調査遺跡の経過 ※「三重県教育委員会」を「県教委」、「三重県埋蔵文化財センター」を「県セ」と略記した。

調査年度	調査遺跡	調査面積 (㎡)	報 告 書		
			発行所	発行年	書 名
1982	三宅西条城跡	300	県教委	1983	『三宅西条城跡発掘調査報告』
1985	寺門遺跡	1400	県セ	2006	『鈴鹿市中ノ川中流域の考古資料』(研究紀要第15-2号)
1986	橋門遺跡(第1次)	3520	県教委	1989	『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』I
1987	桑名垣内遺跡(第1次)	1000	県セ	2006	『鈴鹿市中ノ川中流域の考古資料』(研究紀要第15-2号)
	※1 長法寺西垣内遺跡・長法寺1号墳	4000	県セ	2006	『鈴鹿市中ノ川中流域の考古資料』(研究紀要第15-2号)
	加和良神社遺跡(第1次)	490	県セ	2006	『鈴鹿市中ノ川中流域の考古資料』(研究紀要第15-2号)
1988	桑名垣内遺跡(第2次)	1400	県セ	2006	『鈴鹿市中ノ川中流域の考古資料』(研究紀要第15-2号)
	加和良神社遺跡(第2次)・加和良3号墳	1980	県セ	2006	『鈴鹿市中ノ川中流域の考古資料』(研究紀要第15-2号)
	加和良1・2号墳	600	県セ	2006	『鈴鹿市中ノ川中流域の考古資料』(研究紀要第15-2号)
	※2 徳居門田遺跡	230	県セ	2006	『鈴鹿市中ノ川中流域の考古資料』(研究紀要第15-2号)
1989	敷伝遺跡(第1次)	1900	県セ	1990	『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊
	口北台遺跡	130	県セ	1990	『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊
	西条遺跡	290	県セ	1990	『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊
1990	橋門遺跡(第2次)・長法寺4号墳	1200	県セ	1991	『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊
	別所遺跡	200	県セ	1991	『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊
1995	敷伝遺跡(第2次)	400	県セ	1996	『敷伝遺跡(第2次)発掘調査報告』
1997	長法寺遺跡(第1次)	535	市教委	1998	『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』V
2004	長法寺遺跡(第2次)		市教委	2005	『長法寺遺跡－第2次発掘調査－』(現地説明会資料)

※1 遺跡名称は「西垣内遺跡」であるが、同名の遺跡が県内に存在するため、ここでは「長法寺西垣内遺跡」とする。

※2 遺跡名称は「門田遺跡」であるが、同名の遺跡が県内に存在するため、ここでは「徳居門田遺跡」とする。

Ⅱ 中ノ川中流域の地形と歴史的環境

1 地形的特質

ここで取り扱う中ノ川中流域は、三重県北勢地域の鈴鹿市南部にあたる。中ノ川は鈴鹿山系南端部にあたる錫杖ヶ岳（標高約677m）を主水源とする中規模河川である。中ノ川流域の北には鈴鹿川が、南には安濃川がそれぞれ比較的広い沖積平野を形成している。

中ノ川中流域は、亀山市三寺町から同市下庄町にかけての上部域、鈴鹿市三宅町・長法寺町付近の中中部域、鈴鹿市徳居町から同市越知町にかけての下部域の、3地域に細分することができる。本書で取り扱う遺跡は、主に中流中部域に所在している。

当該地域の地形的特徴は、中ノ川流域に向かって伸びる多くの低丘陵が見られることである。後述する遺跡の多くがこの低丘陵を利用している。河川寄りの一帯には小規模な氾濫平野が形成されている。

2 歴史的特徴

中ノ川流域の考古学的成果には、鈴鹿市教育委員会が作成した『中ノ川流域の考古学』がある⁽¹⁾。当資料は展示会パンフレットとして作成された関係上、大部のものではないが、簡潔に分かり易くまとめられている。ここでは、この成果も大いに参照して当地の状況を概観する。

中ノ川中流域では、旧石器・縄文時代の状況はよくわからない。今回報告する加和良神社遺跡で縄文時代中期の小規模な集落が営まれていたことが推察できるに留まる。

弥生時代では、長法寺遺跡で中期の方形周溝墓群が検出されている⁽²⁾。また、中ノ川よりも南部の丘陵にあたる三宅西条城跡の調査に伴って、中期の竪穴住居が検出されている⁽³⁾。さらに、今回報告する寺門遺跡からも、中期の土器が出土している。これらの状況から、当地の弥生時代中期集落は、丘陵部や平地部に小規模なものが散在する状況であったと考えられる。

弥生時代後期後半から古墳時代前期では、今回報告する寺門遺跡の集落が明確となっている。それ以外の状況は不明であるが、平地部で一定の居住域が形成されはじめる時期として評価できよう。

当該地域に遺跡が増加するのは、古墳時代後期からである。この時期の当該地域を特徴付けるのは、窯跡群と古墳群である。中ノ川中流南岸部を中心に形成されている徳居窯跡群は、散在的ながら現在40基ほどが確認されており、伊勢国内屈指の須恵器生産地となっている。ここでは須恵器とともに埴輪も併焼されたと考えられ、当地近隣の古墳に供給されていると考えられている。

古墳群としては、今回報告する加和良古墳群・長法寺古墳群などがあり、中ノ川に派生する低丘陵上に形成されている。

古墳時代後期から奈良時代にかけての時期には、本書に掲載したように、比較的多くの遺跡が確認できる。この時期は、中ノ川中流上部域が鈴鹿郡、中・下部域が菟芸郡に相当する。『和名類從抄』によれば菟芸郡には菟芸・田井・塩屋・服部・黒田・窪田の計6郷が記載されている⁽⁴⁾。邨岡良弼の『日本地理志料』では、中流中・下部域を黒田郷内と比定している⁽⁵⁾。中流下部域の中ノ川南岸部に位置する郡山遺跡群では、奈良時代前後の規格的に配列された建物群が検出されており、地名の「郡山」から菟芸郡衙の可能性が考えられる⁽⁶⁾。中流中部域は「三宅」の地名があり、古代初期には天皇家直轄領である「屯倉」が存在していた可能性が考えられる。

中世では、中流上部域には中御門家領屋生荘および神宮領（後に建国寺領）屋生御厨が存在していた。中流中部域に想定されている荘園は無いが、今回報告する長法寺西垣内遺跡・加和良神社遺跡・桑名垣内遺跡のほか、敷伝遺跡⁽⁷⁾など中世前期を中心とした数多くの遺跡が存在している。

中流中部域には、中世城館として長法寺城跡と三宅西条城跡がある。長法寺城跡は方形単郭の小規模なもので、在地の小領主層か、あるいは村落単位で

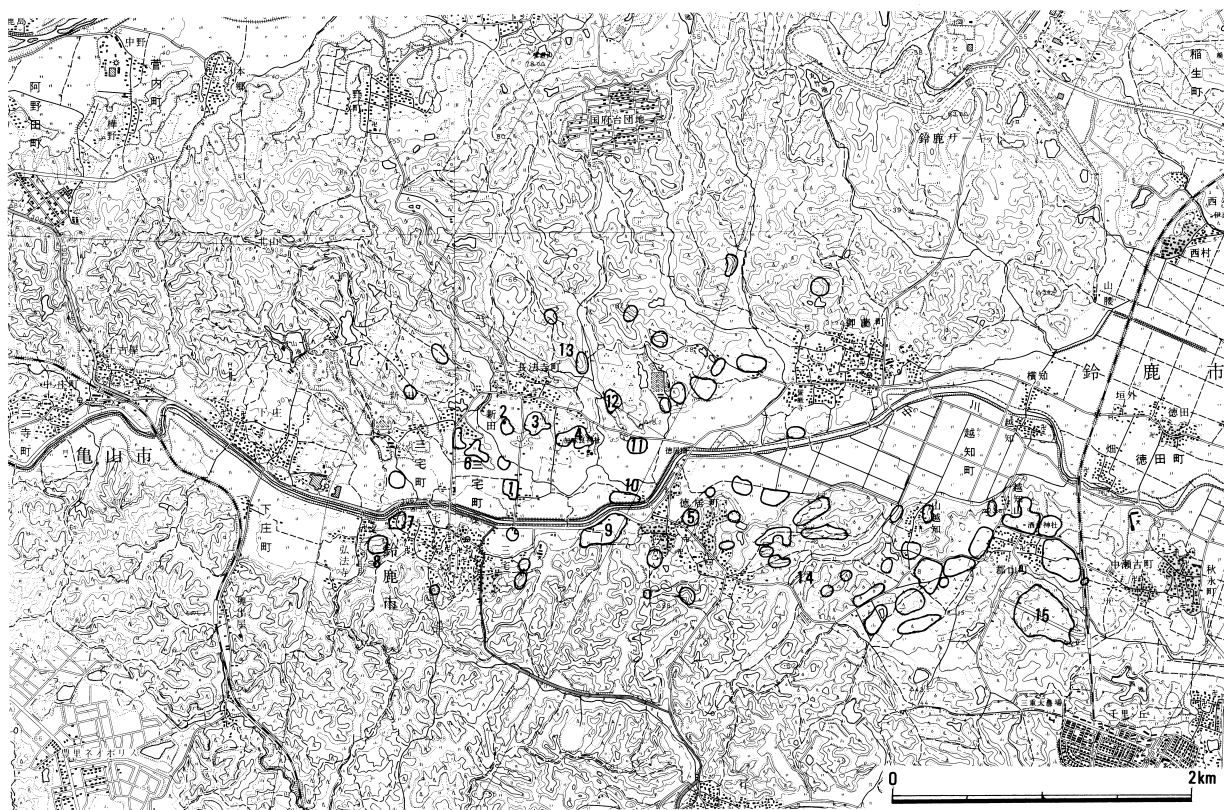
造成された城郭と考えられる。発掘調査が行われた三宅西条城跡からは16世紀後半頃の遺物とともに、石組施設や階段状遺構などが検出されている⁽⁹⁾。

なお、中ノ川下流域にある伊那富神社は、古代以来の伝統を持つ神社であり、当該期の地域形成にとって重要な意味を有していたと考えられる。

以上、中ノ川中流域を中心とした歴史的状況を概観してきた。鈴鹿川・安濃川という大規模河川に挟まれているため、中ノ川流域はあまり目立たない存在となっている。しかし、古代に奄芸郡として独自に変成されたことが示すように、ここの地域展開には独自のものが観察できる。(伊藤)

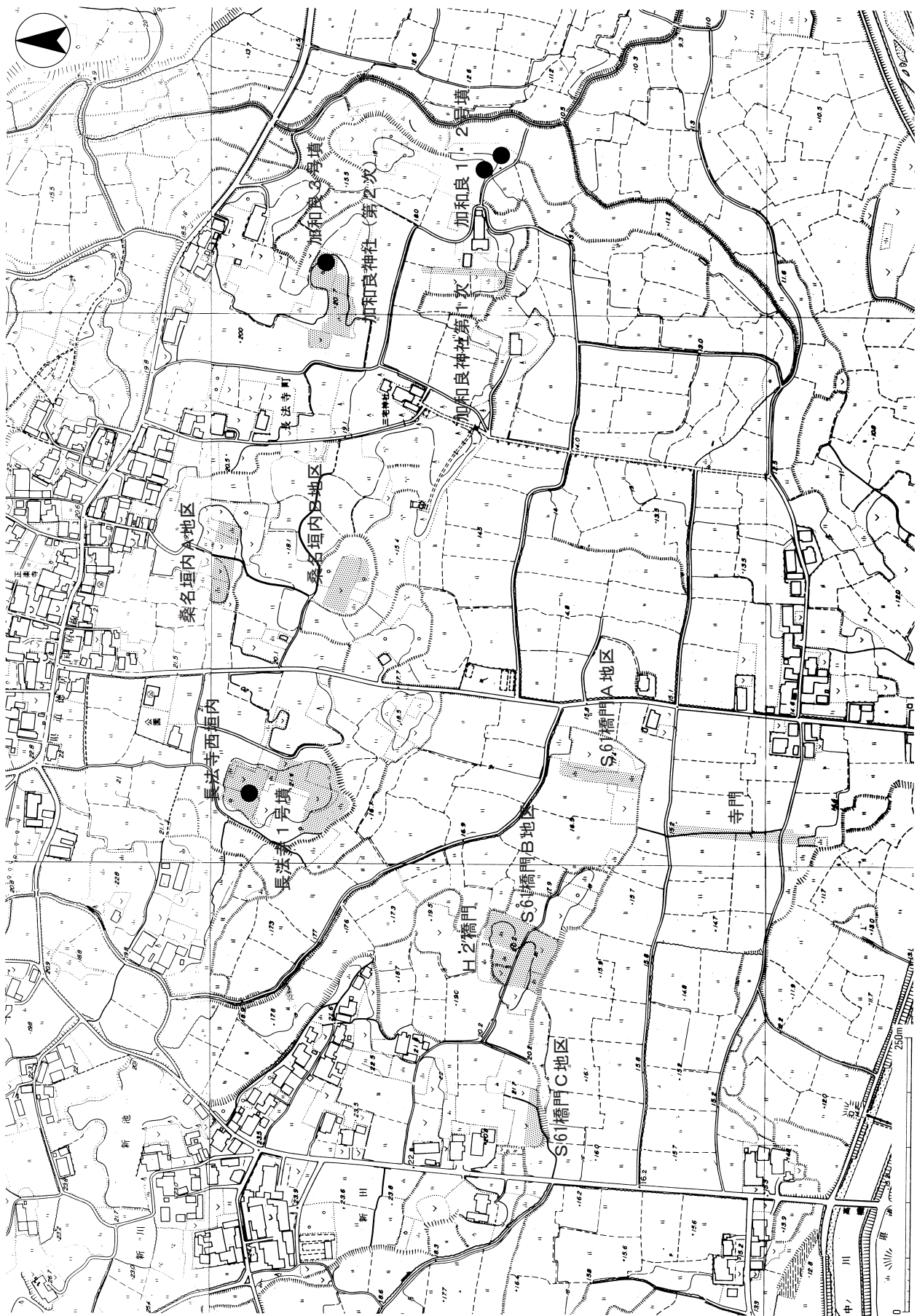
< 註 >

- (1) 鈴鹿市教育委員会『中ノ川流域の考古学』第3回鈴鹿市埋蔵文化財展図録 1993年)
- (2) 平成17年度鈴鹿市考古博物館調査。
- (3) 三重県教育委員会『三宅西条城跡発掘調査報告』(1983年)
- (4) 京都大学文学部国語国文学研究室編『諸本集成和名類従抄』本文編 臨川書店 1968年)
- (5) 郵岡良弼『日本地理志料』(京都大学文学部国語国文学研究室編『諸本集成和名類従抄』外編 臨川書店 1966年)
- (6) 仲見秀雄ほか『鈴鹿市史』第1巻 (1980年)
- (7) 阿部猛・佐藤和彦編『日本荘園大辞典』(東京堂出版 1997年)
- (8) 三重県埋蔵文化財センター『敷伝遺跡(第2次)発掘調査報告』(1996年) ほか
- (9) 前掲註(3)文献



第Ⅱ-1図 中ノ川流域を中心とした遺跡位置図 (1:50,000) (国土地理院発行「鈴鹿」・「亀山」・「白子」・「棕本」より)

- | | | | |
|-----------|--------------------|-----------|-------------------|
| 1, 寺門遺跡 | 2, 長法寺西垣内遺跡・長法寺古墳群 | 3, 桑名垣内遺跡 | 4, 加和良神社遺跡・加和良古墳群 |
| 5, 徳居門田遺跡 | 6, 橋門遺跡 | 7, 西条遺跡 | 8, 三宅西条城跡 |
| 9, 別所遺跡 | 10, 敷伝遺跡 | 11, 口北台遺跡 | 12, 長法寺遺跡 |
| 13, 長法寺城跡 | 14, 徳居窯跡群 | 15, 郡山遺跡 | |



第Ⅱ-2図 調査区位置図および周辺地形図 (1 : 5,000) (鈴鹿市都市計画図 1971年より)

Ⅲ 寺門遺跡 ～川面の古墳時代集落～

1 調査の経過

寺門遺跡は鈴鹿市長法寺町字寺門に所在する遺跡である。昭和60年度県営圃場整備事業（合川・下之庄地区）に伴って発掘調査が実施された。調査は、昭和60年5月27日から開始し、同年7月26日に終了した。最終的な調査面積は1,400㎡であった。

2 調査区の立地と基本層位

寺門遺跡は、中ノ川に向かって南に傾斜する沖積地に立地する。現況は水田である。標高は、調査区北端部で約15.2m、南端部で約14.2mであり、約130mの調査区内で現況1mほどの高低差がある。

つぎに、調査区の基本層位を見る（第Ⅲ－2図）。調査区内では、調査時の地表面から20～30cmほどの間が耕作土・床土で、その下に灰色・暗灰褐色系土が20～30cmほど堆積している。これが遺物包含層に相当する層と考えられるが、その含有量は少ない。調査区中央部から北部にかけての遺構検出面は褐色系砂質土で、調査区中央部では標高約13.6m、地表面から約60cmで検出されている。この層上が、遺構検出面となっており、後述のように、古墳時代・中世前期・近世の遺構が確認されている。

ただし、調査区南端部では、標高約12.2mの地点から古墳時代前期前半の土器がまとまって出土している（S Z 10、第Ⅲ－1・2図）。このことは、古墳時代前期頃の当遺跡では、中ノ川寄りには現況以上に急峻な落ち込み地形を呈していたことを示唆している。そのため、調査区中央付近では上記3時期の遺構面が同一層上で検出されたものの、調査区南部ではそれぞれの遺構面が異なっており、とくに古墳時代前期頃の遺構面は、トレンチ確認で止まったS Z 10程度の深さにまで及んでいた可能性が高い。

3 検出した遺構

発掘調査の結果確認された遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期・中世前期・近世のもので、出土遺

物には弥生時代中期のものも見られる。

a 弥生時代後期～古墳時代の遺構

竪穴住居 S H 1（第Ⅲ－3図） 東西約5.4m、南北約5.2mのほぼ正方形を呈する竪穴住居である。遺構検出面からの深さは約15cmである。遺構埋土上層部から炭化材が検出されており、焼失家屋と考えられる。主柱穴と考えられるピットは1基のみ確認されている。炉や貯蔵穴は見られない。遺構埋土内から古墳時代前期後半頃のまとまった土器類が出土している。

竪穴住居 S H 2 方形の竪穴住居と考えられるが、南・西辺が確認されたに止まり、規模は不明である。遺構検出面からの深さは約20cmである。重複関係から、S H 1 よりも古い遺構である。南辺の中央部に貯蔵穴と考えられるピットがある。埋土内からは、弥生時代後期後半頃の土器が少量出土している。

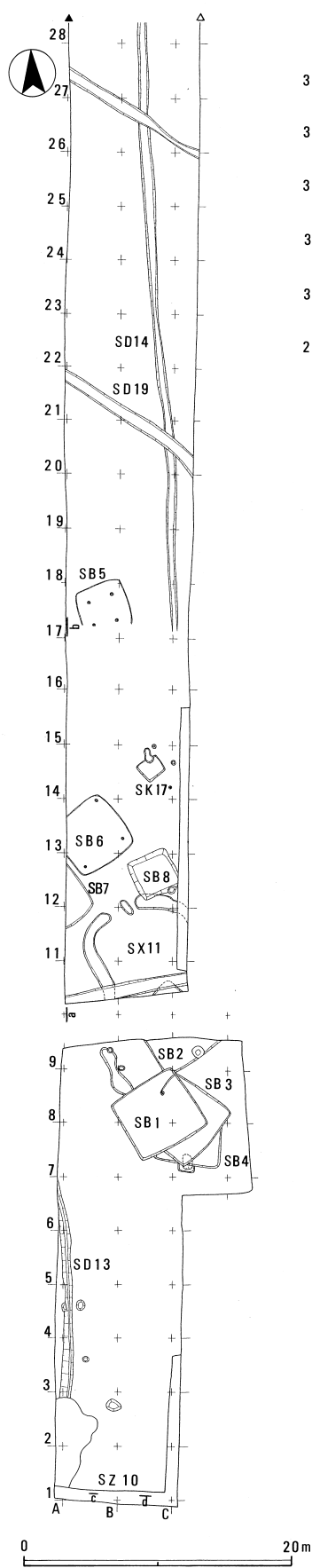
竪穴住居 S H 3 S H 1 と重複して確認された。東西約5.4m、南北約5.2mのほぼ正方形を呈する竪穴住居である。遺構検出面からの深さは約10cmで、主柱穴や炉・貯蔵穴は認識されなかった。遺物は少ないが、S H 1 の直前頃に相当する遺構であろう。

竪穴住居 S H 4 S H 1・3 と重複して確認された。東西約4.9mの方形を呈する竪穴住居である。主柱穴や炉・貯蔵穴は明確に認識されなかった。重複関係からS H 3 よりも古い。大きくは古墳時代前期頃の遺構と見てよいであろう。

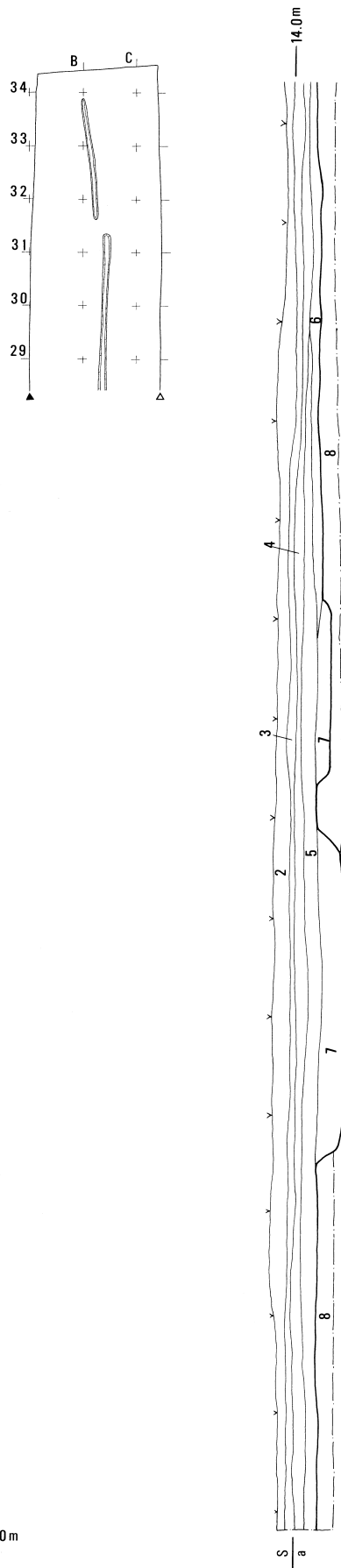
竪穴住居 S H 5（第Ⅲ－4図） 東西軸約3.7m、南北軸約3.8mの規模である。遺構検出面からの深さは約10cmである。方形の竪穴住居で、各辺や隅は丸みを帯びている。主柱穴は4箇所確認された。炉と考えられる焼土が北辺近くで検出されている。

遺構外縁部を中心に土器類が出土している。遺物は、古墳時代前期末から中期にかけてのものである。

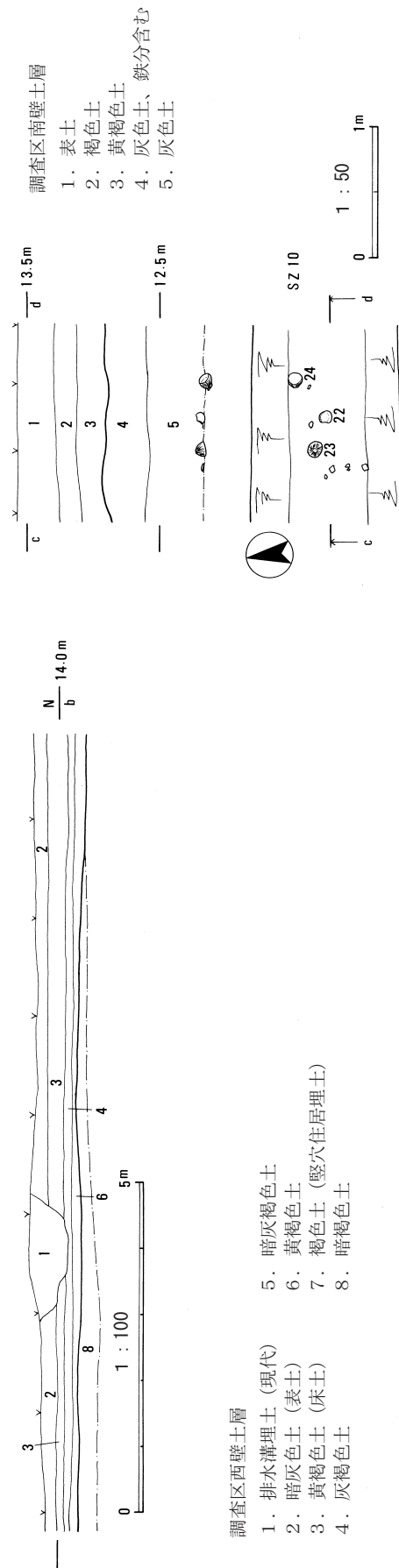
竪穴住居 S H 6（第Ⅲ－5図） 東西約4.7m、南北4.9mのほぼ正方形を呈する竪穴住居である。検出面からの深さは約20cmである。プランは隅丸で、各辺もS H 5 と同様少し膨らむ。主柱穴は隅付近に



第Ⅲ-1図 寺門遺跡調査区 平面図 (1:500)



第Ⅲ-2図 寺門遺跡調査区土層



3箇所確認されており、調査区外に及んでいるものも含め4本で構成されていたと考えられる。

出土遺物は遺構外縁部に見られ、原位置を保っているものがある。遺物は古墳時代前期初頭頃のもので、良好である。

竪穴住居SH7 方形の竪穴住居と考えられるが、北・東辺が確認されたに止まり、規模は不明。検出面からの深さは約15cmである。出土遺物が少なく、正確な所属時期は不明であるが、古墳時代前期の範疇と考えられる。

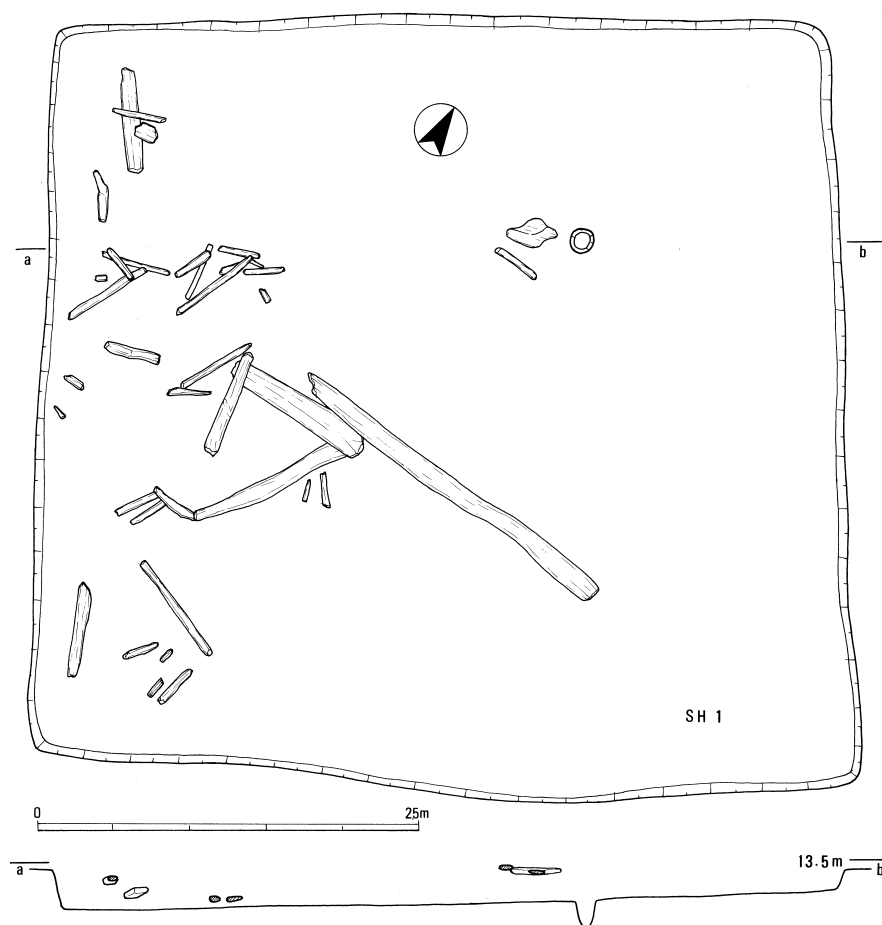
竪穴住居SH8 一辺約3.1mの方形を呈している。明確な施設は無いが、一応竪穴住居として認識する。遺構検出面からの深さは約20cmである。遺構の中央部分の埋土内から、古墳時代前期初頭頃の土器がまとまって出土している。

竪穴住居SH9 北西隅部分のみであるが、竪穴住居と考えられる。検出面からの深さは約15cmである。

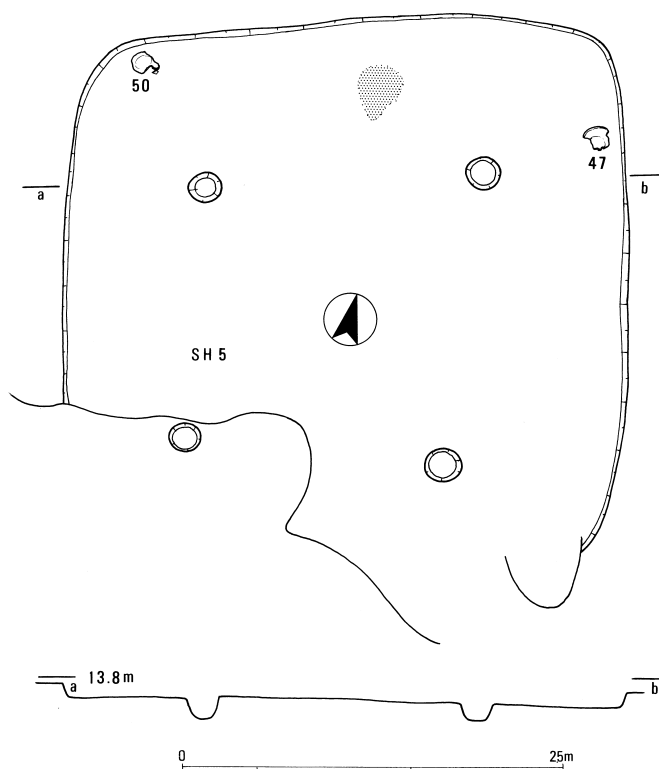
正確な時期を示す出土遺物は無いが、周辺状況から、古墳時代前期の遺構と考えておく。

落ち込みSZ10 (第Ⅲ-2図) 調査区南端部に設定されたトレンチ内から、古墳時代前期初頭頃の土器類がまとまって出土している。出土遺物は土師器鉢類が中心で、なかにはベンガラが付着したのが見られるため、何らかの工房に伴う遺構である可能性もある。

周溝SX11 北側に陸橋部を持つ方形周溝墓と考えられる。遺構の規模は、南北5m以上、東西約7mと考えられる。遺構検出面からの深さは約40cmである。遺構埋土内からは、古



第Ⅲ-3図 寺門遺跡竪穴住居SH1実測図(1:50)



第Ⅲ-4図 寺門遺跡竪穴住居SH5実測図(1:50)

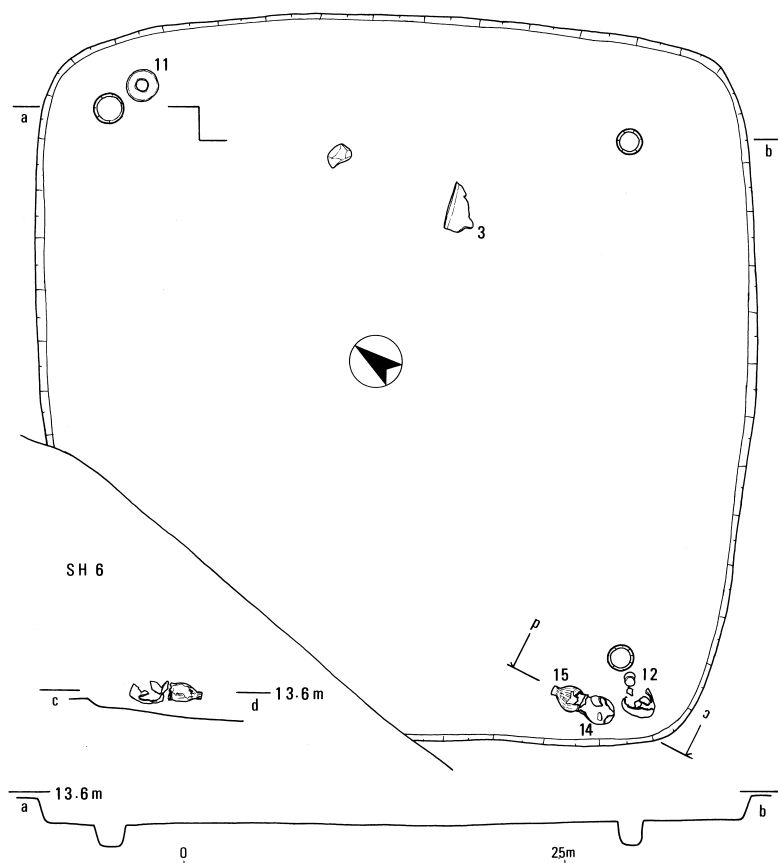
墳時代前期初頭頃の土器が出土している。

溝 S D 12 重複関係から、S H 1 よりも古い時期の遺構である。不整形な溝状遺構であり、検出面からの深さは10cm程度である。前述の S X 11 と同様、方形周溝墓の溝である可能性もある。出土遺物には、古墳時代前期前半のものが見られる。

b 中世以降の遺構

溝 S D 13 幅約50cm、深さ約20cmの溝で、やや弧を描きながら走る遺構である。埋土内からは近世の陶器が出土した。

溝 S D 14 幅40～60cm、遺構検出面からの深さ約10cmの浅い溝である。現況の地割に合致している。埋土内から13世紀前半頃の陶器碗が出土しているが、遺構の時期はそれよりも新しい可能性が高い。



第三—5図 寺門遺跡竪穴住居 S H 6 実測図 (1 : 50)

4 出土した遺物

a 弥生時代中・後期の遺物

1は細頸壺で、頸部には櫛描横線文が施されている。中期中葉頃のものである。2は高杯で、いわゆる「ワイングラス形」であり、後期のもの。3～7は甕。3は S H 6 の床面から出土したものであるが、遺構の時期とはかけ離れるため、ここに収めた。口縁部に刺突文を施すもので、中期前半に相当する。4～6は中期後半頃の甕。4の外面には櫛描横線文が施されている。7は受口状口縁を呈するもので、口縁部の内外には波状文が見られる。

b 弥生時代後期末～古墳時代の遺物

竪穴住居 S H 2 出土土器 (8～10) 8は高杯の脚部。脚部外面に櫛描横線文が2単位施される。9は受口状口縁の甕で、口縁部外面には刺突文が施されている。10は、口縁部を欠損するものの、口縁部が「く」の字形を呈する甕と考えられる。これらは、弥生時代後期末頃のものと考えられる。

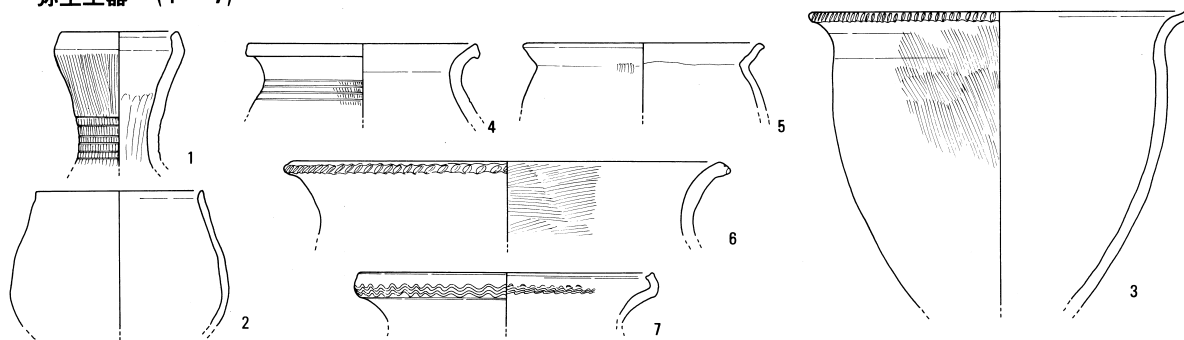
竪穴住居 S H 6 出土土器 (11～15) 11は壺。口縁部外面には、刺突による綾杉文を施した後、棒状浮

文2個を4方向に、その間に円形浮文を4方向に施すという手の込んだ施文を行っている。12～14は受口状口縁を呈する甕で、13のみ不明ながら、いずれも脚台部が取り付けくものと考えられる。12は口縁部と脚台部とが接合しないものの、同一個体と考えられる。13・14は、口縁部と頸下部にそれぞれ刺突文が施されるもので、15は、形態はこれらと同様だが刺突文が省略されている。これらは、古墳時代前期初頭頃のものと考えられる。

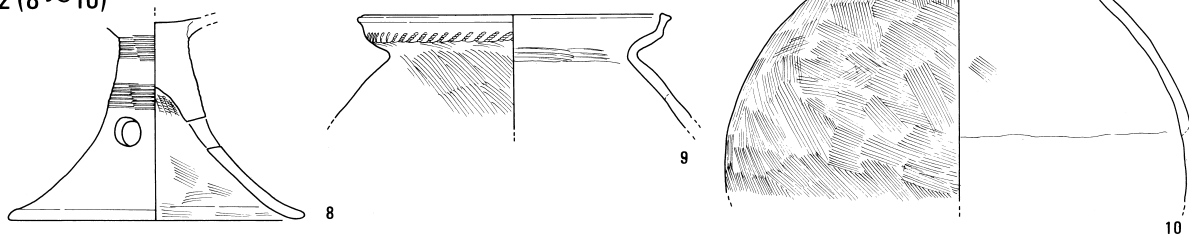
竪穴住居 S H 8 出土土器 (16～21) 16・17は高杯の脚柱部。18はS字状口縁を呈する台付甕（以下、「S字甕」と呼称）の口縁部片で、赤塚次郎氏の分類⁽¹⁾によるB類に相当する。19～21は壺。21は頸部に突帯を持ち、突帯からその下部にかけて刺突文と直線文とを組み合わせた施文が見られる。これらは、古墳時代前期前半頃に相当するものである。

落ち込み S Z 10 出土土器 (22～24) いずれも鉢である。体部はハケメで調整されており、24は下部に擬口縁を有する。24は、当初は甕として製作された

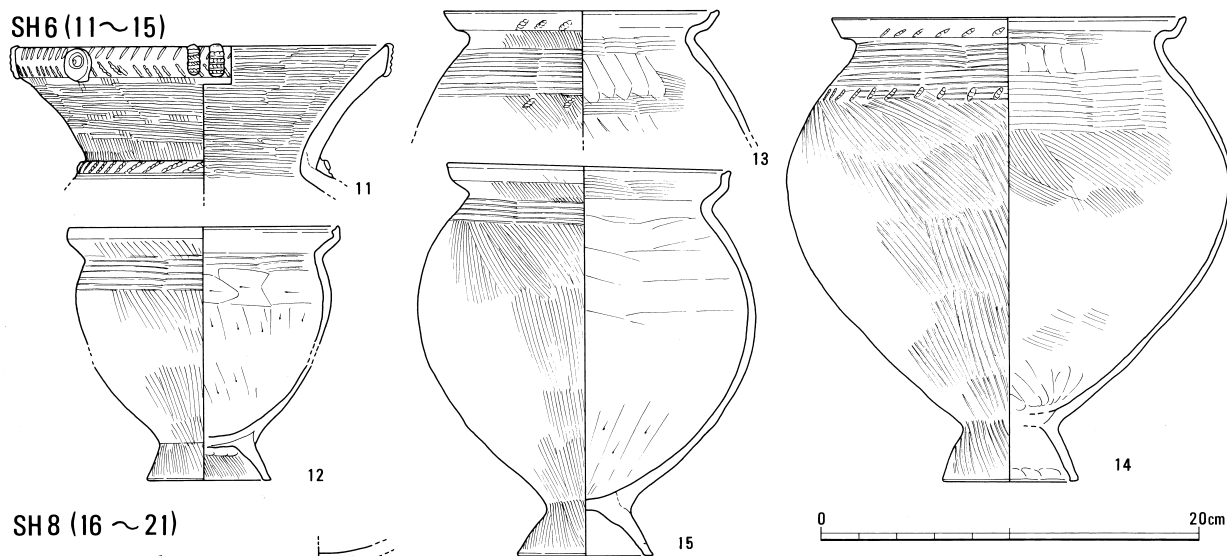
弥生土器 (1~7)



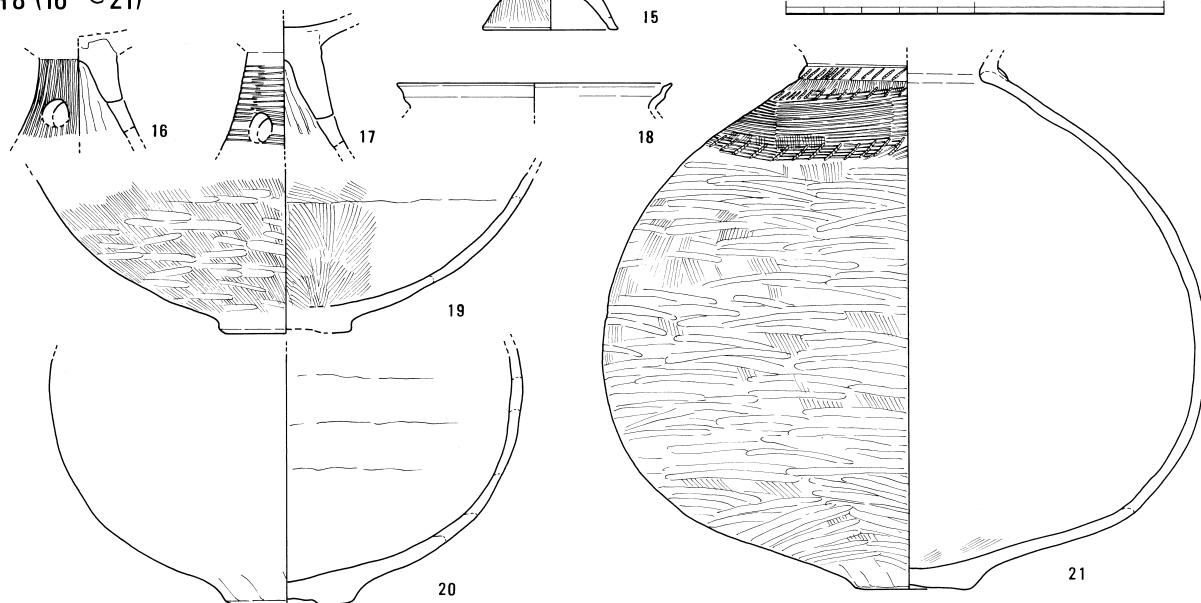
SH2 (8~10)



SH6 (11~15)

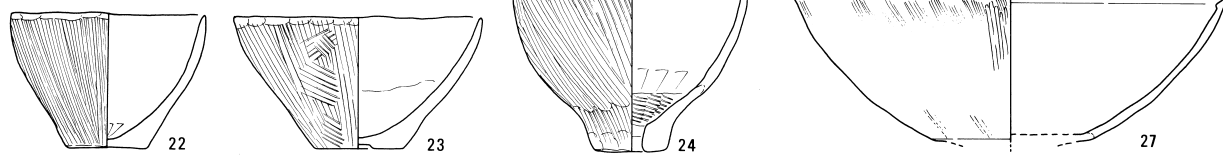


SH8 (16~21)

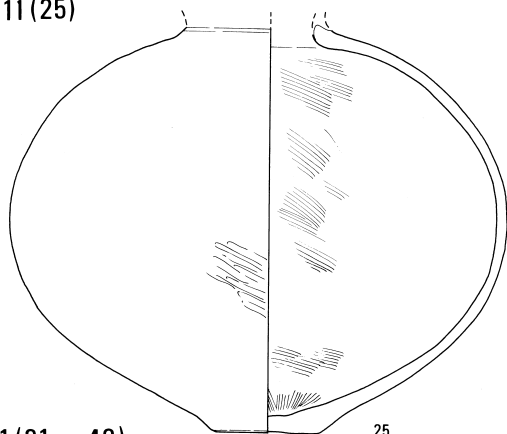


0 20cm

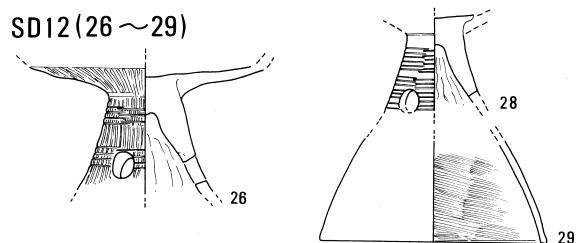
SZ10 (22~24)



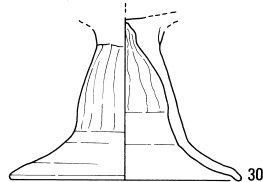
SX11 (25)



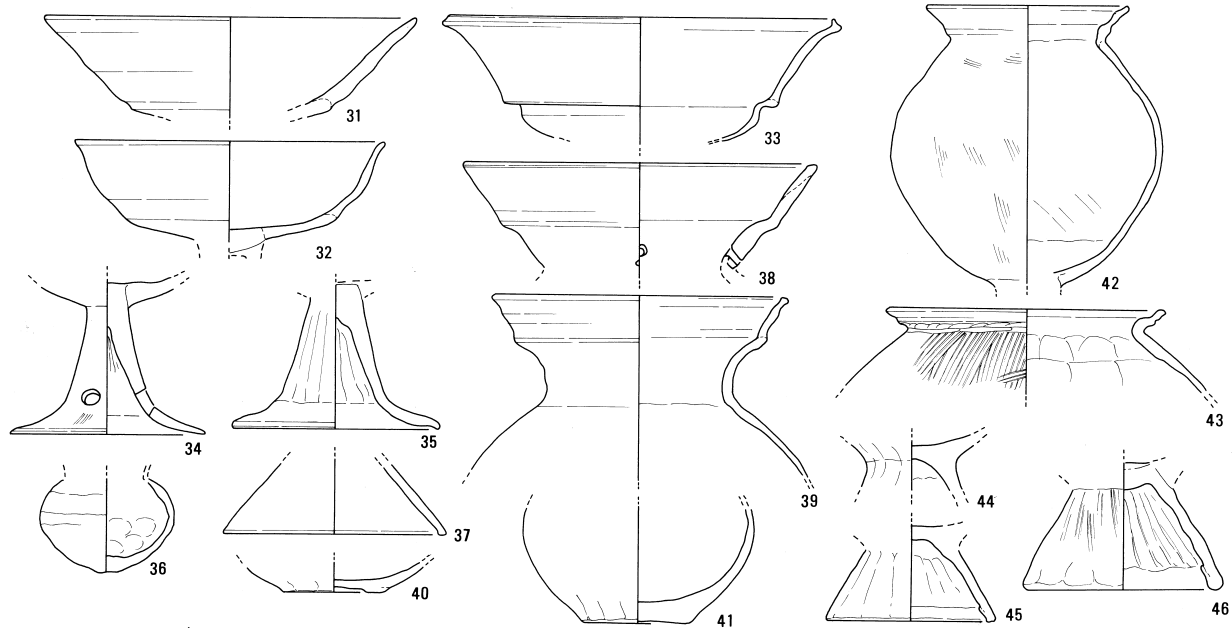
SD12 (26~29)



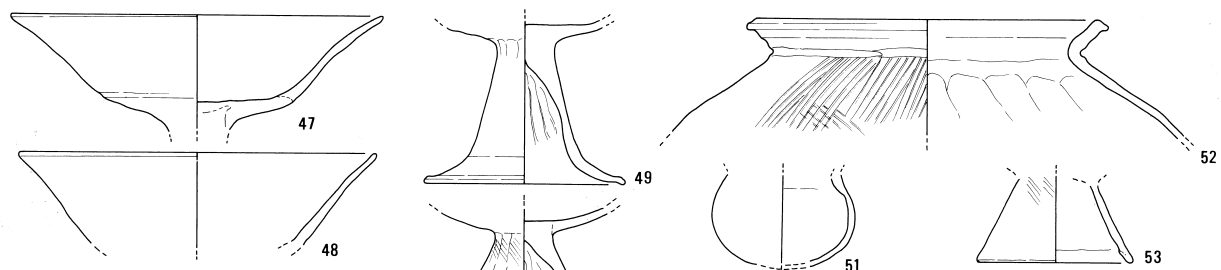
SH3 (30)



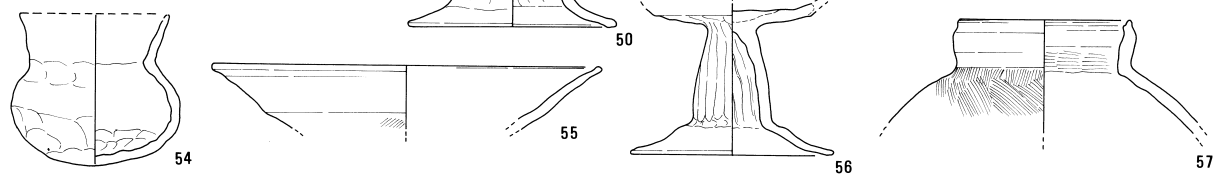
SH1 (31~46)



SH5 (47~53)



古墳前期遺構外 (54~57)



が、底部に穿たれた孔を塞いで鉢としたものである。体部のハケメは、S字甕のB類と類似した調整方法であるため、古墳時代前期前半頃のものと考えてよいであろう。

周溝 S X 11出土土器 (25) 25は壺。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭頃のものであろう。

溝 S D 12出土土器 (26～29) いずれも高杯である。27～29は同一個体と考えられるが、断定はできない。古墳時代前期初頭頃のものである。

竪穴住居 S H 1 出土土器 (31～46) 31～33は高杯の杯部。31は直線的に開くもので、前代からの伝統を受け継ぐ形態である。32は碗形高杯の祖形となるもので、杯上部はわずかに内彎する。33は碗形の杯下部に屈折して外反する杯上部が付く、やや特殊な形態のものである。34・35は高杯の脚部で、31ないしは32のような杯部が伴うと考えられる。36は小形壺、37は器台と考えられる。

38～41は壺。38・39は二重口縁壺で、頸部が丸みを帯びて開くものである。38の頸部には4方向の焼成後穿孔が見られる。このような穿孔は、堀田遺跡(松阪市)にも類例がある⁽²⁾。

42～46はS字甕。42は小形のもの。43は口縁部で、頸部には棒状工具による押し引きが見られる。44～46は脚台部。赤塚氏による分類ではD類の古い方に相当する特徴を持つ。これらの土器類は、古墳時代前期後半のものと考えられる。

竪穴住居 S H 5 出土土器 (47～53) 47・48は高杯の杯部。いずれも直線的に開く口縁部である。49・50は高杯の脚部。50の脚柱外面にはS字甕の脚台部と同様の調整手法が見られる⁽³⁾。51は小形壺。52・53はS字甕で、赤塚氏による分類ではD類の新しい方に相当する。これらは、古墳時代前期後半の末期から中期初頭頃のものと考えられる。

遺構外出土土器 (54～57) いずれも前期後半頃を

中心とした時期と考えられる。ただし、57は類例が少なく、正確な時期は不明である。

c 中世以降の遺物

58～71には、遺構出土遺物も含め、中世以降の遺物を図示した。11世紀前半頃の灰釉陶器(60・61)や13世紀代の陶器碗(山茶碗)があるが、遺構に伴う中世の遺物は無い。59はS D 13出土の陶器小皿で、18世紀頃のものと考えられる。

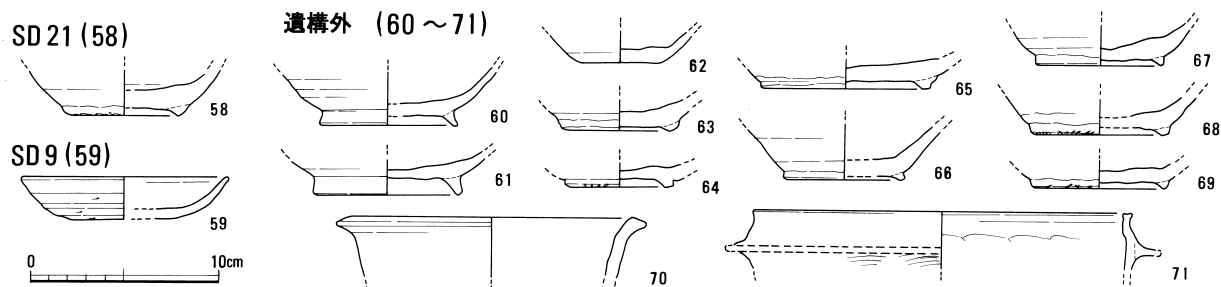
5 まとめと検討

弥生時代後期末から古墳時代前期後半頃の竪穴住居群や方形周溝墓の形成が確認された。この時期が寺門遺跡の中心時期といえる。古墳時代前期後半頃の集落跡は、近隣では地蔵僧遺跡や山城遺跡(いずれも亀山市)が知られる程度で少ない。当遺跡の内容が判明したことは、当該時期の研究深化に大きく寄与するものといえる。

出土遺物では、竪穴住居出土資料を中心に良好なものが多い。今後は、これらの資料をもとに、中ノ川流域の古墳時代土器全体を考察することが可能となろう⁽⁶⁾。

その他では、ベンガラの付着した鉢(24)が目玉できる。この遺物から、当遺跡ではベンガラを用いた工芸が行われていたものと推察できる。(伊藤) <註>

- (1)赤塚次郎「廻間式土器」(『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990年)
- (2)三重県埋蔵文化財センター『堀田 第3～5次調査』(2004年)
- (3)伊藤裕偉「伊勢における古墳時代前期後半の土器に関する覚書」(『研究紀要』第14号 三重県埋蔵文化財センター 2005年)
- (4)亀山市教育委員会『地蔵僧遺跡発掘調査報告』(1978年)
- (5)三重県埋蔵文化財センター『北瀬古遺跡・山城遺跡』(1994年)
- (6)このことについては、伊藤裕偉「古墳時代前・中期における伊勢の土器相」(『研究紀要』第15-1号 三重県埋蔵文化財センター 2006年)も参照されたい。



第三-8図 寺門遺跡出土遺物(3)(1:4)

IV 長法寺西垣内遺跡・長法寺 1 号墳 ～古墳と中世鍛冶集落～

1 調査の経過

長法寺西垣内遺跡⁽¹⁾および長法寺 1 号墳は、鈴鹿市長法寺町字西垣内に所在する遺跡である。県営圃場整備事業（合川・下之庄地区）に伴い、昭和62年9月から昭和63年1月にかけて発掘調査が実施された。最終的な調査面積は4,000㎡である。

2 調査区の立地と基本層位

長法寺西垣内遺跡は、中ノ川北岸部の低丘陵上に立地する。同一丘陵沿いの東部には桑名垣内遺跡、谷を隔てた南側の別丘陵上には橋門遺跡がある。長法寺古墳群は、長法寺西垣内遺跡と橋門遺跡が所在する低丘陵上に形成されている。遺跡の標高は、圃場整備前の状態で21.4mほどである。

地形を微細に見ると、遺跡の南半部は小規模な谷が巡っている。したがって、遺跡は低地部に突き出た半島状の様相を呈している。今回の発掘調査では、中央部を除くその大部分が調査されたことになる。

遺構は、表土下約30～40cmで検出されている。遺構検出面の高さは、南部で20.6m、北部で21.0mである。

3 検出した遺構

長法寺西垣内遺跡で検出した遺構の詳細は、第IV-1・2表に示した。以下では時期別の概要を記す。

a 長法寺 1 号墳

長法寺 1 号墳は、調査前から墳丘の一部が残っていた。調査の結果、その周囲から内径で約22mの周溝（S X 26）が確認された。出土した須恵器から、6世紀初頭頃の築造と考えられる。調査区内各所から埴輪が出土しており、いずれもこの古墳に伴うものと考えられる。なお、周溝埋土内からは中世の遺物も出土している。

b 長法寺西垣内遺跡

長法寺西垣内遺跡では、中世から近世にかけての遺構が数多く検出されている。その中心となるのは

掘立柱建物・井戸・土坑・区画溝などである。少量の中世前期（鎌倉時代前期）の遺構が見られるが、多くは中世後期（15世紀後半から16世紀初頭頃）のものである。

掘立柱建物は15棟、柱列は19条検出された。柱列としたものは多くが掘立柱建物で、検出時に構成されるピットが明確にならなかったものが多いと考えている。小規模で側柱のものが多い。

井戸は4基ある。ただし、これは残された記録から判断可能なものに限っており、あと数基ほど井戸の可能性のある遺構が見られる。

土坑は、調査区全域にわたって確認されている方形土坑が特徴的である。この遺構では、S K 9・11のように多量の鉄滓を含むものが見られる。調査区南西部では、連続して形成された方形土坑と、それに接続するかのように開削された溝（S D 37）がある。これらの遺構は、出土遺物の状況から見て鍛造にかかる遺構群と考えられる。

区画溝では、調査区北部に見られるS D 27が最も大規模である。断面形は箱堀状を基本とし、一部薬研堀状の部分が見られる。埋土内からは中世後期の土器類が出土しており、当該時期の屋敷地を画した溝かと考えられる。

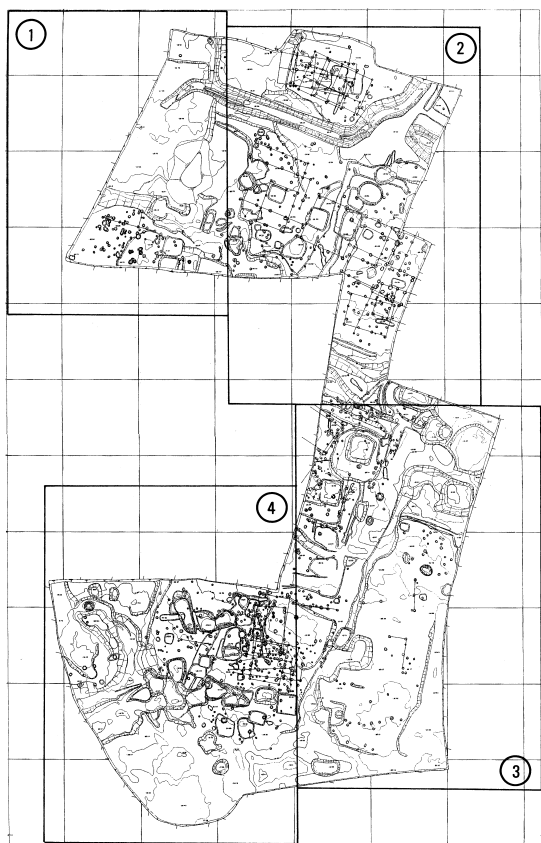
4 出土した遺物

出土遺物には、長法寺 1 号墳に伴うと考えられる古墳時代の遺物と、中世前期以降の集落および鍛冶関連の遺物が見られる。

a 長法寺 1 号墳関連遺物

残された記録から、長法寺 1 号墳関連と特定できるのは46の須恵器のみである。円筒埴輪類を中心とした他の遺物が長法寺 1 号墳周溝（S X 26）出土かどうかは、残された記録からは断定できない。

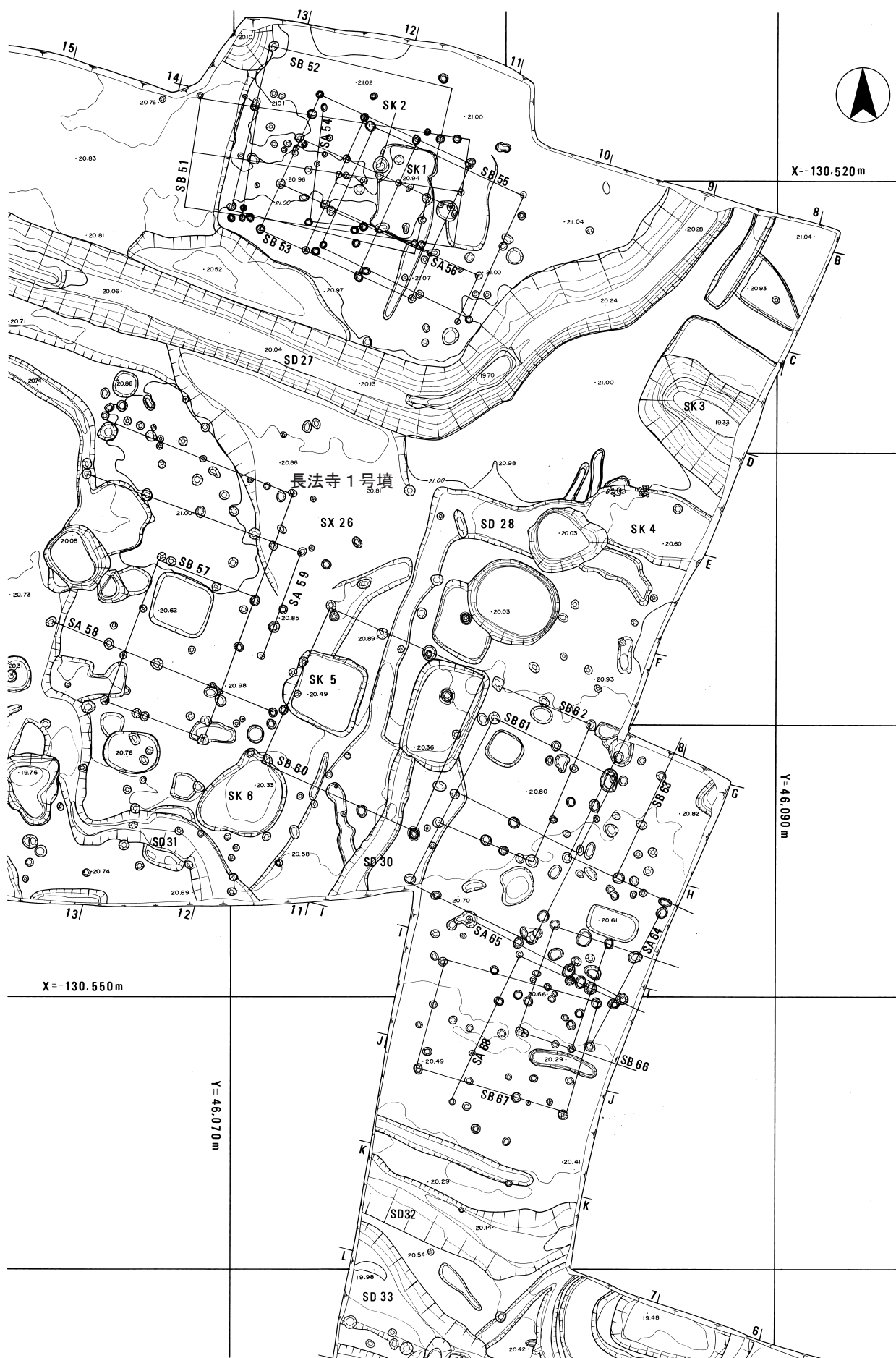
円筒埴輪（1～24） 焼成の状況から、須恵器のような硬質の焼き上がりのもの（須恵質、1～11）、やや焼成の甘い須恵質（半須恵質、12～16）、軟質で土師器類の焼成に近いもの（土師質、17～24）が



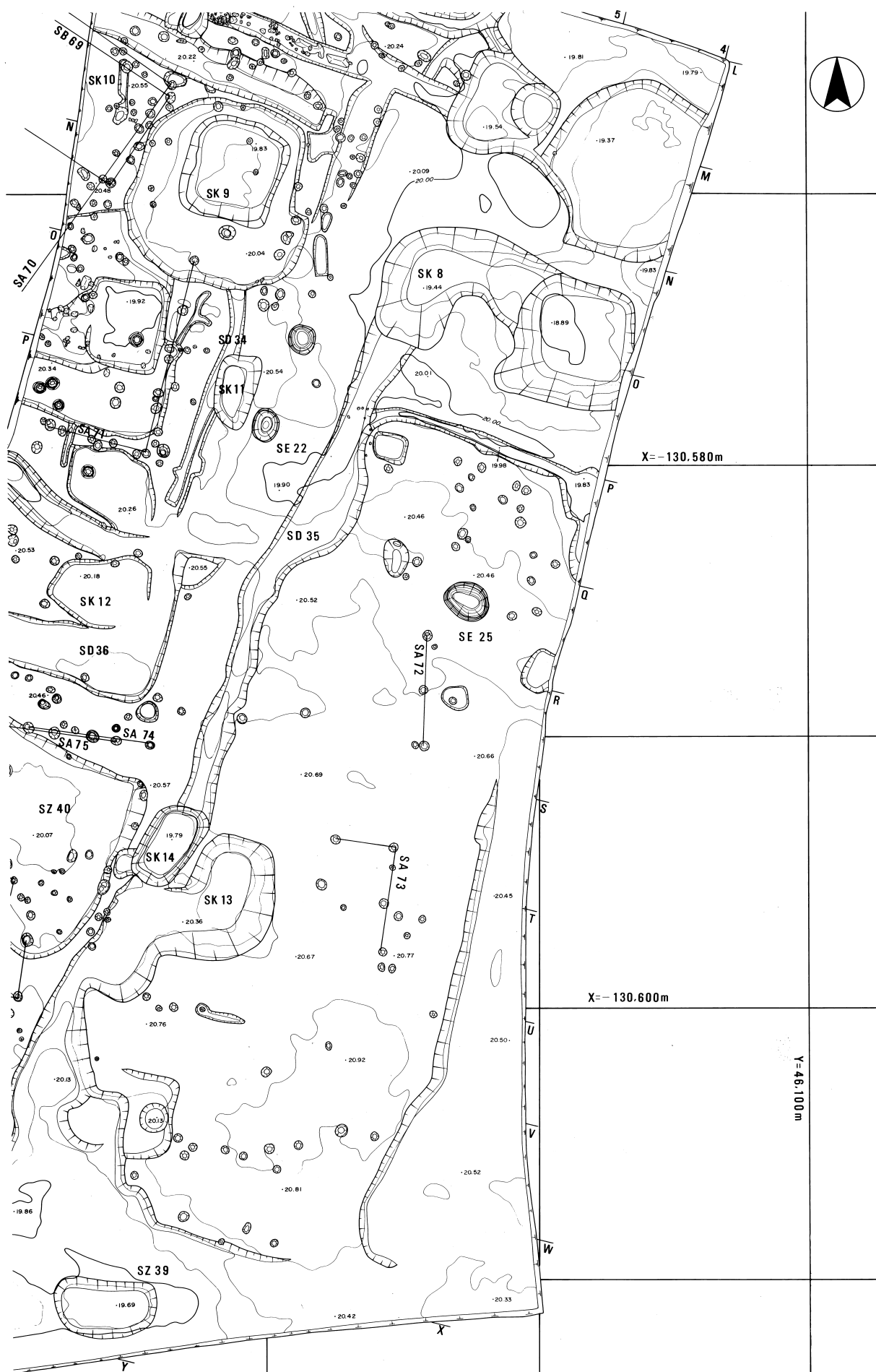
図郭配置図 (1 : 1,000)



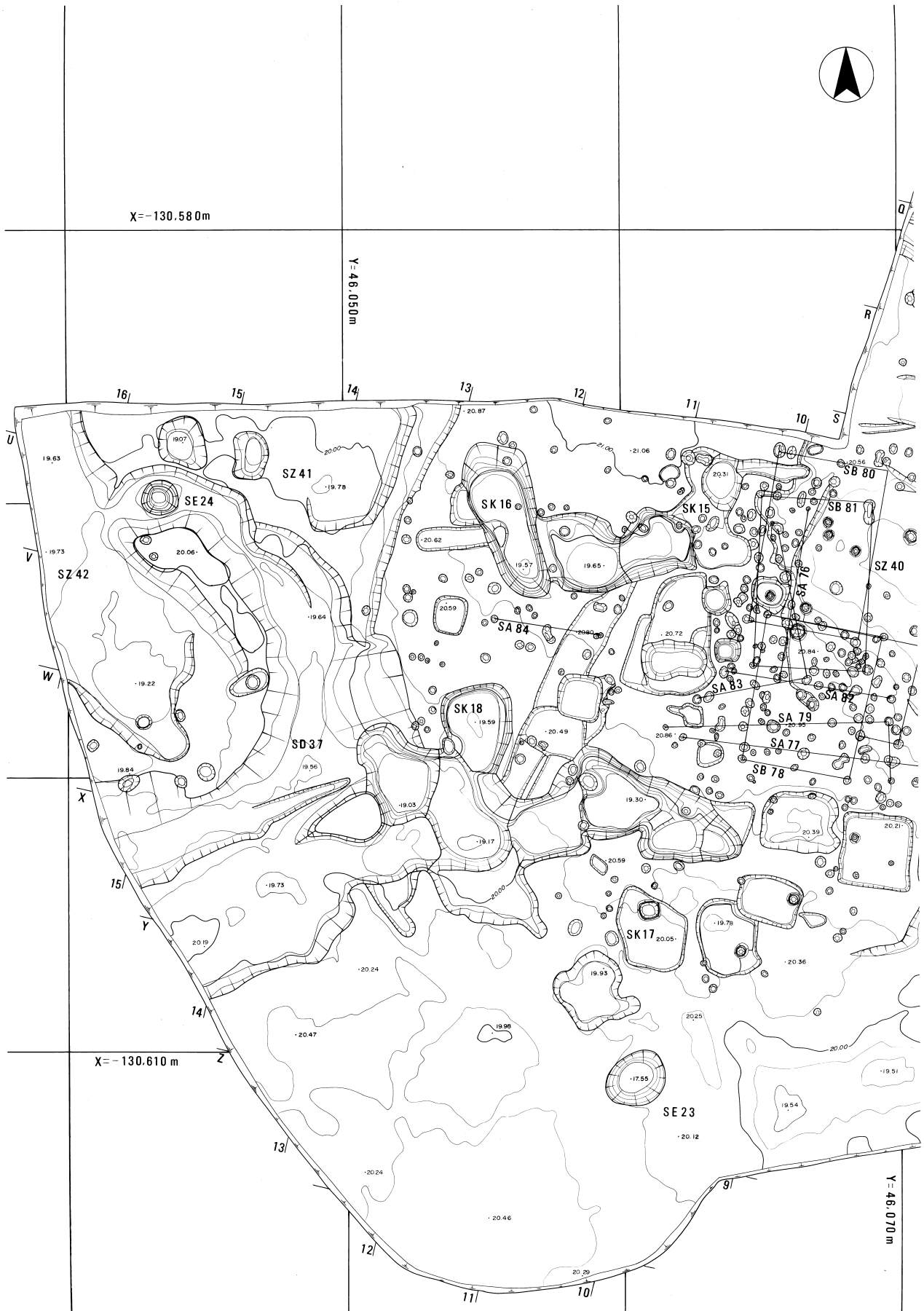
第Ⅳ－１図 長法寺西垣内遺跡 平面図（１）（１：２００）



第四-2図 長法寺西垣内遺跡 平面図(2) (1:200)



第四-3図 長法寺西垣内遺跡 平面図(3) (1:200)



第Ⅳ－１表 長法寺西垣内遺跡遺構一覧

遺構番号	性 格	時 期	グリッド	調査時遺構名	特徴・形状・計測数値など
SK 1	土坑	中世前期？	B11	SK2	山茶碗5型式以降
SK 2	土坑	中世前期？	B12	SK1	山茶碗5型式
SK 3	井戸？	中世後期	C8	SX1	
SK 4	土坑	中世後期	D7	SX1	
SK 5	方形土坑	近世	G11	SX1	棧瓦
SK 6	方形土坑	中世前期～	H12	SK1	
SK 7	土坑	近世	H14	長方形土坑	
SK 8	土坑	中世後期	N5	SX2	
SK 9	方形土坑	中世後期	N8	SX1	中北勢系羽釜、鉄滓多量、
			N9	SX1	
			M9	SX6	
SK 10	小土坑				
SK 11	土坑	中世後期	P7	SX1	鉄滓多量
SK 12	土坑	中世後期	R8	SK1・赤褐色土坑	埴輪多い、中北勢系羽釜
SK 13	方形土坑	中世後期	T6	SX1	南伊勢系羽釜、4b
SK 14	方形土坑	中世後期	T7	SK1	
SK 15	土坑	古墳～	T10	SK1	
SK 16	土坑	中世後期	T12	SK1	常滑10型式
SK 17	方形土坑	中世後期		SX15	
SK 18	方形土坑	中世後期	V12	SK1	中北勢系羽釜
SK 19		中世後期	P8	SK1	正確な位置不明
SK 20		中世後期	E9	SK1	正確な位置不明、古瀬戸
SK 21		中世Ⅰ～	B11	SK1	正確な位置不明
SE 22	井戸	中世後期	P7	SE1	
SE 23	井戸	中世Ⅳa	Z10	SE1	鉄滓
SE 24	井戸	中世Ⅳa	U15	SE1	中北勢系羽釜
SE 25	井戸	中世後期	Q5	SE1・2	鉄滓
SX 26	周溝 (長法寺1号墳)	古墳後期～	E13	周溝埋土	直径約22m、周溝幅約6m。墳丘の残骸残る。須恵器・円筒埴輪・ 形象埴輪あり。 山茶碗5型式頃の遺物流入。
			I14	SD1	
SD 27	区画溝	中世Ⅳ	D13・E17	大溝	深さ約80cm、断面箱堀・栗研堀。
SD 28	溝	中世Ⅲa	D9	SD1	
SD 29	溝	中世後期	H9	SD1	消滅。南伊勢系鍋3b～4b
SD 30	溝	中世Ⅰb	H10	SD1	山茶碗5型式
			G10	SD1	
SD 31	溝	中世～近世	H12	SD1(新)	棧瓦含む
SD 32	溝	中世	K8・9	SD1	
SD 33	溝	中世Ⅲb～Ⅳ	L8	石溝SD	常滑10型式
			L9	SD1	
SD 34	溝	中世Ⅳa	O8	SD1	中北勢系羽釜
			R6	SD1	
SD 35	溝	中世Ⅳ	P6	SD1南北溝	鉄滓、瓦
			S7	SD1	
SD 36	溝	中世Ⅳ	R8	SD1	埴輪多い
SD 37	溝	中世Ⅱ～	V13	SK1・落ち込み	落ち込み状。土取坑か？
SZ 38	落ち込み	中世Ⅱ～	H15	落ち込み	
SZ 39	落ち込み	中世Ⅲ～	W6	南落ち込み	
SZ 40	落ち込み	中世Ⅱ～Ⅳ	T8	SK1	
			T9	落ち込み	
SZ 41	落ち込み	中世Ⅲ～Ⅳ	T13	落ち込み	SD37と一連か？
			U13	落ち込み	
SZ 42	落ち込み	中世Ⅳ	T16	SX1	SD37と一連か？

第Ⅳ－２表 長法寺西垣内遺跡掘立柱建物・柱列一覧

通番遺構名	グリッド	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模(東西間・m×南北間・m)	主軸	方位(N基準)	備 考
S B 5 1	B11～13			不明	5 ? (10.1) × 2 (4.0)	東西	N 7 ° E	S K 1 が南東隅土坑になるか？
S B 5 2	B11～13			中世Ⅱb期？	3 ? (7.1) × 3 (6.2)	東西	N13 ° E	
S B 5 3	B11～12			不明	3 (6.2) × 3 (5.6)	東西	N24 ° E	
S A 5 4	B 1 2			不明	1 (2.0) 以上 × 2 (4.3)	東西	N 6 ° E	
S B 5 5	B10～12			不明	3 (6.1) × 3 (4.8)	東西	N24 ° E	
S A 5 6	B11～12			不明	3 (5.9) × 1 ? (1.8)	東西	N24 ° E	
S B 5 7	E～G 11～13			不明	4 (7.5) × 5 (9.6)	南北	N20 ° E	西側不明瞭
S A 5 8	G11～13			15世紀後半	4 (8.8)	東西	N22 ° E	
S A 5 9	E11～13			不明	4 (8.4) × 2 (4.2)	東西	N20 ° E	
S B 6 0	F 9～H10			不明	3 (6.2) × 3 (6.3)	南北	N23 ° E	
S B 6 1	G・H 8～9			不明	2 (5.0) × 4 (6.8)	南北	N26 ° E	
S B 6 2	F～H 9・10			不明	2 (3.8) × 3 (5.6)	南北	N22 ° E	
S B 6 3	G・H 7・8			不明	2 (3.9) 以上 × 2 (4.0) 以上	南北	N25 ° E	西側に庇
S A 6 4	H・I 8			不明	3 (5.7)	南北	N27 ° E	
S A 6 5	H・I 7～8			不明	4 (6.4)	東西	N27 ° E	
S B 6 6	H・I 7～8			不明	1 (2.0) 以上 × 2 (4.1)	東西	N18 ° E	
S B 6 7	I・J 8～9			不明	3 (5.8) × 2 (4.0)	東西	N15 ° E	
S A 6 8	I・J 8～9			不明	2 (4.0) 以上 × 3 (5.9)	南北	N24 ° E	
S B 6 9	M・N 9～10			不明	1 (2.0) 以上 × 2 (3.9)	東西	N35 ° E	
S A 7 0	M・N 9～10			不明	1 (2.1) 以上 × 3 (6.4) 以上	南北	N36 ° E	
S A 7 1	O・P 8～9			不明	2 (3.7) × 4 (7.4)	南北	N15 ° E	
S A 7 2	Q・R 5			15世紀後半	2 (4.0)	南北	N 2 ° E	
S A 7 3	S・T 5			不明	1 (2.2) × 2 (3.8)	南北	N 8 ° E	
S A 7 4	S 8～9			不明	2 (4.4)	東西	N 8 ° E	
S A 7 5	S 8～9			不明	2 (4.5)	東西	N 8 ° E	
S A 7 6	T・U 9～10			不明	3 (6.4)	南北	N 9 ° E	S A 82 と同一か
S A 7 7	V 8～10			不明	4 (8.9) × 1 (2.2)	東西	N 7 ° E	
S B 7 8	T～V 9・10			不明	2 (4.0) × 3 (5.4) 西庇 1 (1.4) × 2 (3.6)	南北	N11 ° E	
S A 7 9	U・V 9・10			不明	4 (8.0) × 1 (2.1)	東西	N 1 ° W	
S B 8 0	S～U 9・10			不明	2 (4.0) × 3 (6.2)	南北	N 9 ° E	
S B 8 1	S～U 9・10			不明	2 (4.0) × 3 (6.2)	南北	N 3 ° E	
S A 8 2	U 9・10			不明	3 (6.0)	東西	N 9 ° E	S A 7 6 と同一か
S A 8 3	U・V 9・10			不明	2 (4.0) × 3 (5.7)	南北	N 9 ° W	
S A 8 4	V11・12			不明	2 (3.8)	東西	N 9 ° E	

ある。いずれにも、底部に淡輪技法が見られる (11・15・24)。須恵質の外面調整は、タテハケのちC種ヨコハケが施されている。半須恵質のものでは、12・13の内外面にベンガラ⁽²⁾の塗布が見られる。外面調整は須恵質と同様である。土師質のものは、外面に継続するB種ヨコハケが見られる (20～23)。

形象埴輪 (25～44) 人物 (25～32)、家 (33)、盾 (34)、馬 (35～44) がある。いずれも土師質のもの。

25は女性の髪。26は指の部分で手に何かを持っている。27は武人の手で、籠手をはめているように見える。30・31は人物の腰の部分か。34は線刻で三角や半円形を描く。

35～44は、同一個体と考えられる馬。35は鬣と耳の部分と考えられ、鬣を下ろした表現と考えられる。36は杏葉の鈴部分。37・38は辻金具、39～43は鞍の部分にあたる。これらは、著名な石薬師東63号墳の馬形埴輪⁽³⁾と極めてよく類似している。

周溝 S X 26出土遺物 (46～48) 1号墳の周溝にあたる。46は須恵器杯蓋で、田辺昭三氏による陶邑編年⁽⁴⁾のTK47型式に併行するものであろう。

b 長法寺西垣内遺跡出土の遺物

出土遺物の傾向を記しておく。

土師器類 中世前期では、南伊勢系鍋 (63・65)のほか、中北勢系の土師器皿類 (56・57) などがある。中世後期では、南伊勢系鍋 (64・94・106・135など)、南伊勢系羽釜 (100)、中北勢系羽釜 (76・133・134・171など)、中北勢系皿類 (121・124) などがある。171は鈴鹿川流域下流部に特徴的な器形である。土師器の量は、全体に少ない⁽⁵⁾。

陶器類 尾張産を中心とした陶器碗類 (山茶碗、50・52・80・108・115など) は、藤澤良祐氏による編年の第4型式から第9型式あたりまでのものが見られる。古瀬戸製品 (72・97など) は少ない。

常滑産の甕類 (59・86・87など) や練鉢 (85・139～144) は多く、とくに中世後期の練鉢の出土が目立つ。他には、信楽産擂鉢もある (104・137・138)。

貿易陶磁器 青磁碗 (54・69・90・113・117・166など)、白磁碗皿類 (68・70・102・163・164など)、染付碗 (96) などがある。量は少ない。117の青磁碗は、良好なものは県内では少ない。90は内面見込みに馬のスタンプ文を施したもので、これも珍しい。107・

117などは、熱を受けて釉が変色している。

石製品類 この遺跡では、砥石の出土がやや多い印象を受ける (55・112・119・123・176)。いずれも小形で、仕上砥に相当するものが多い。128は滑石製石鍋で、中世前期のもの。他には石臼 (177) や一石五輪塔の空風輪 (178) などもある。

その他 鞆の羽口の良好なものが見られる (51・174・175)。また、47kgもの椀形鉄滓が出土している。

5 まとめと検討

今回の調査で、長法寺1号墳は6世紀初頭頃の築造であり、長法寺西垣内遺跡は中世前期から後期にかけての遺跡であることが確認された。

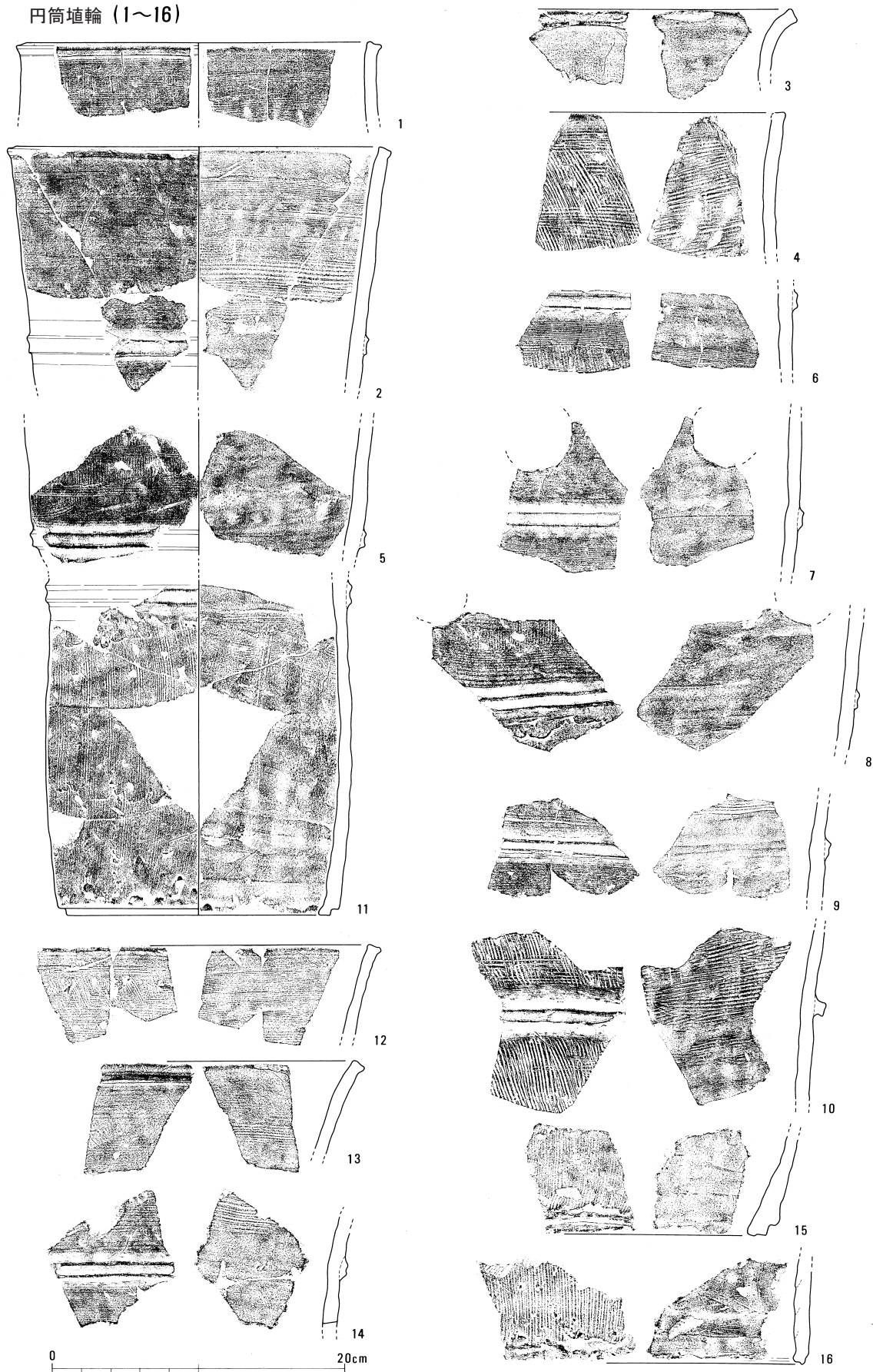
長法寺1号墳の埴輪は、すでに鈴木敏則氏が紹介している⁽⁷⁾。鈴木分類ではⅡc類・Ⅱd類、すなわち、基部と口縁部のヨコハケが省略される段階とされる。今回の観察では、須恵質・半須恵質にはC種ヨコハケが、土師質にはB種ヨコハケが見られた。ハケと焼成手法とは相互に関係がありそうである。

中世の当遺跡は、鍛冶関連遺跡と評価できる。詳細が不明な点が残念であるが、方形土坑と鍛冶とは大きく関係しそうである。35棟ほど見られた掘立柱建物や柱列には、工房が含まれていると考えられる。また、出土遺物中に常滑産練鉢が多いことも注目である。触媒となる石灰などを研磨する容器として常滑産練鉢が選択されたものと推測できる。⁽⁸⁾ (伊藤)

< 註 >

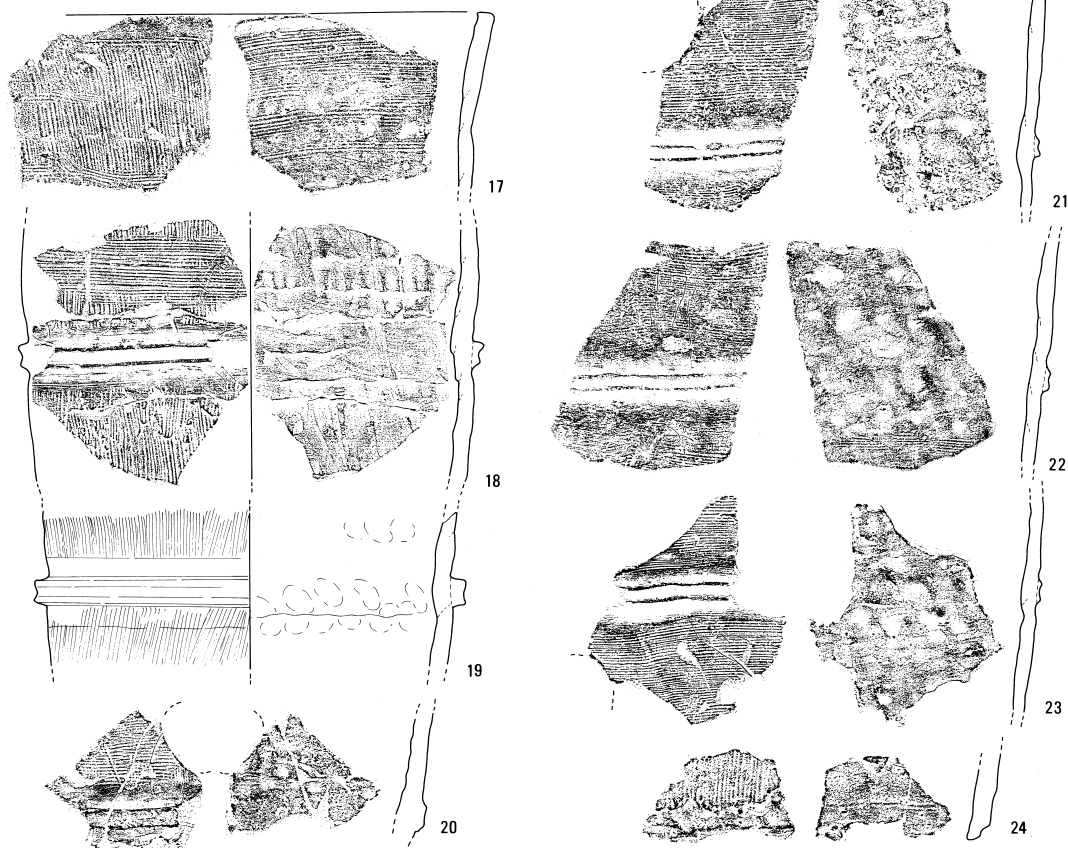
- (1) 当遺跡の名称は「西垣内遺跡」であるが、県内他市町にも同名の遺跡があるため、ここでは「長法寺西垣内遺跡」とする。
- (2) 埴輪の外面調整は、川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2 1978年)に拠る。
- (3) 三重県埋蔵文化財センター『石薬師東遺跡・石薬師東古墳群発掘調査報告』(2000年)
- (4) 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981年)
- (5) 中世の時期区分は、伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」(『関東・東海における中世土器(煮炊具)の最近における研究成果』静岡大学 2005年)の南伊勢地域の区分による。
- (6) 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年)
- (7) 鈴木敏則「伊勢の淡輪円筒埴輪」(『Miehistory』vol. 3 三重歴史文化研究会 1991年)
- (8) このような練鉢の使い方があることについては、中野晴久氏(常滑市歴史民俗資料館)から御教示頂いた。

円筒埴輪 (1~16)

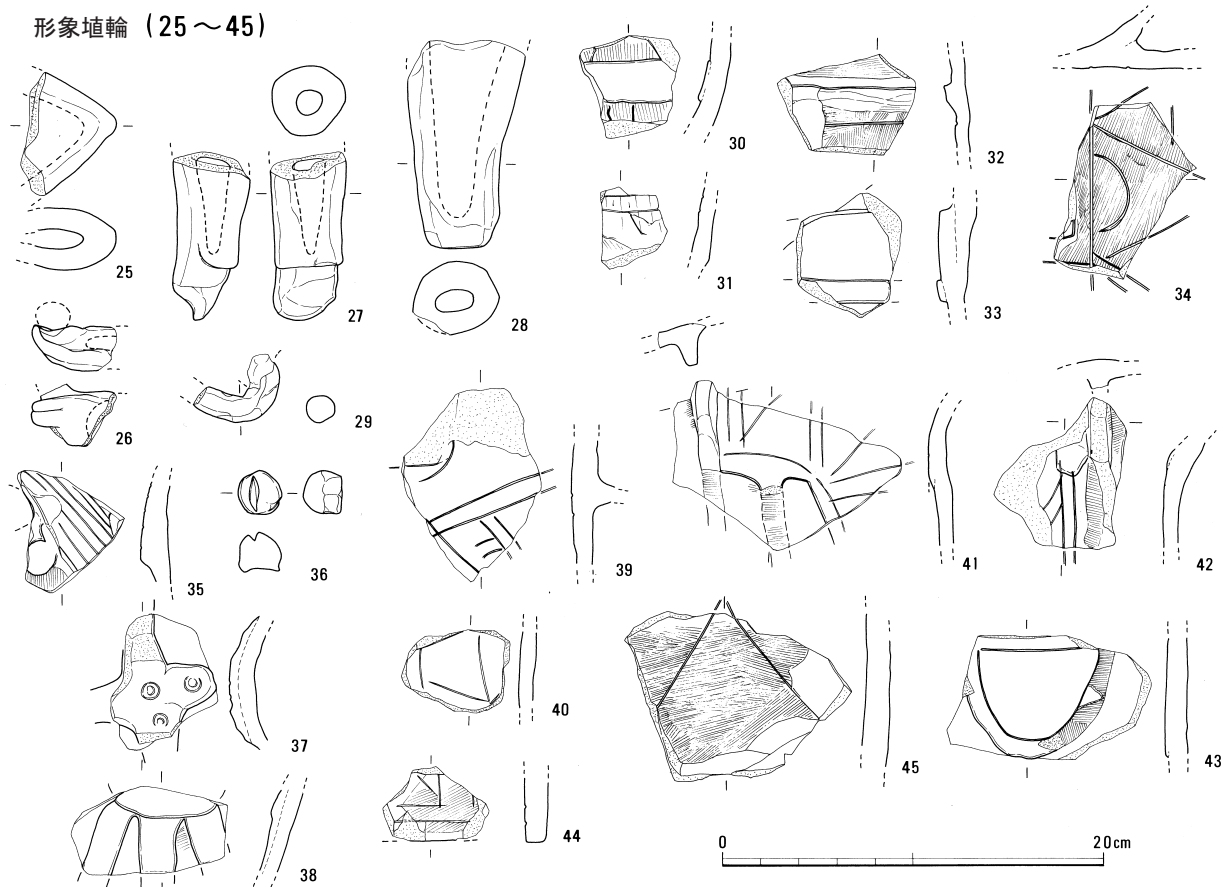


第IV-5図 長法寺1号墳出土遺物(1) (1:4)

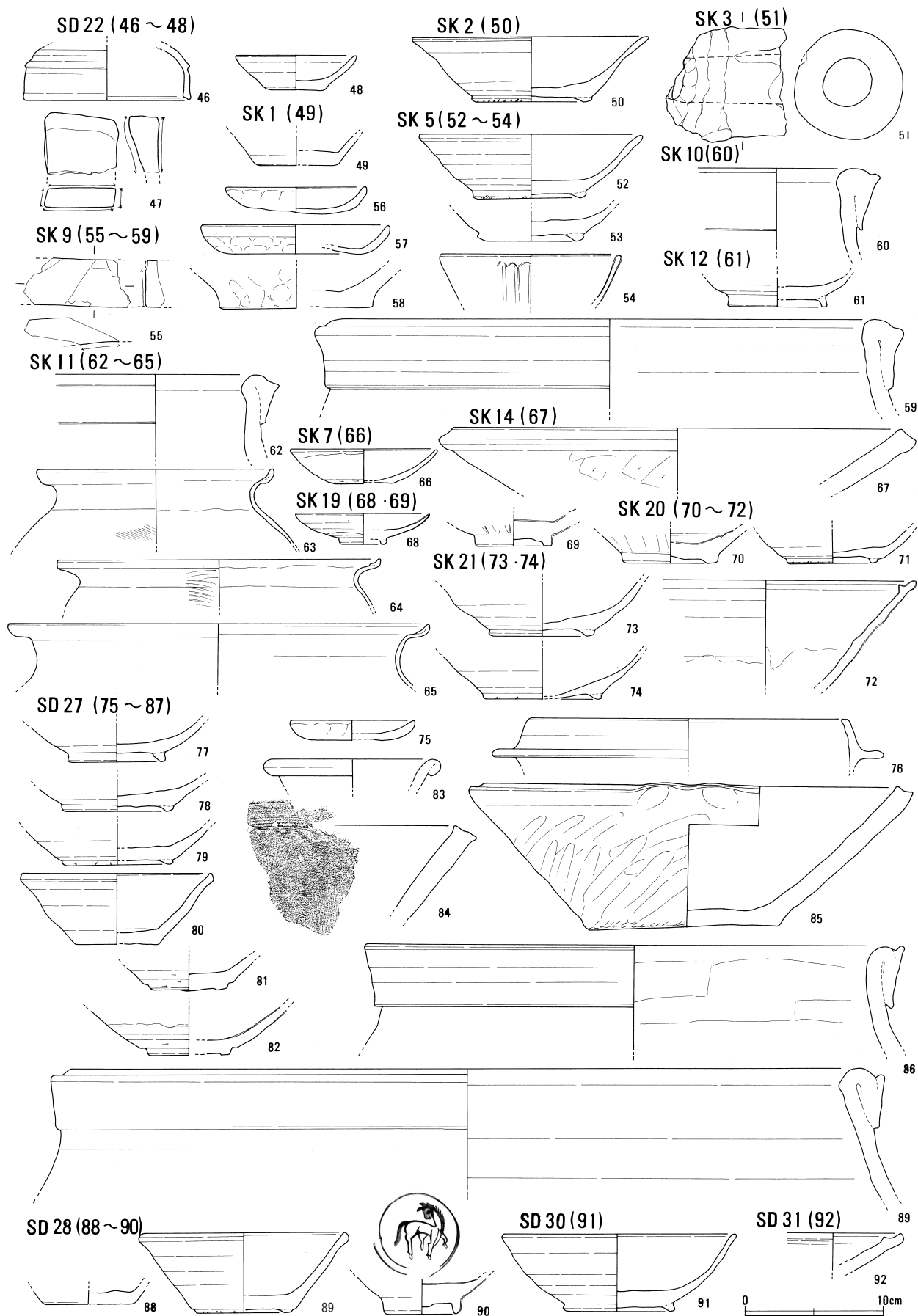
円筒埴輪 (17～24)



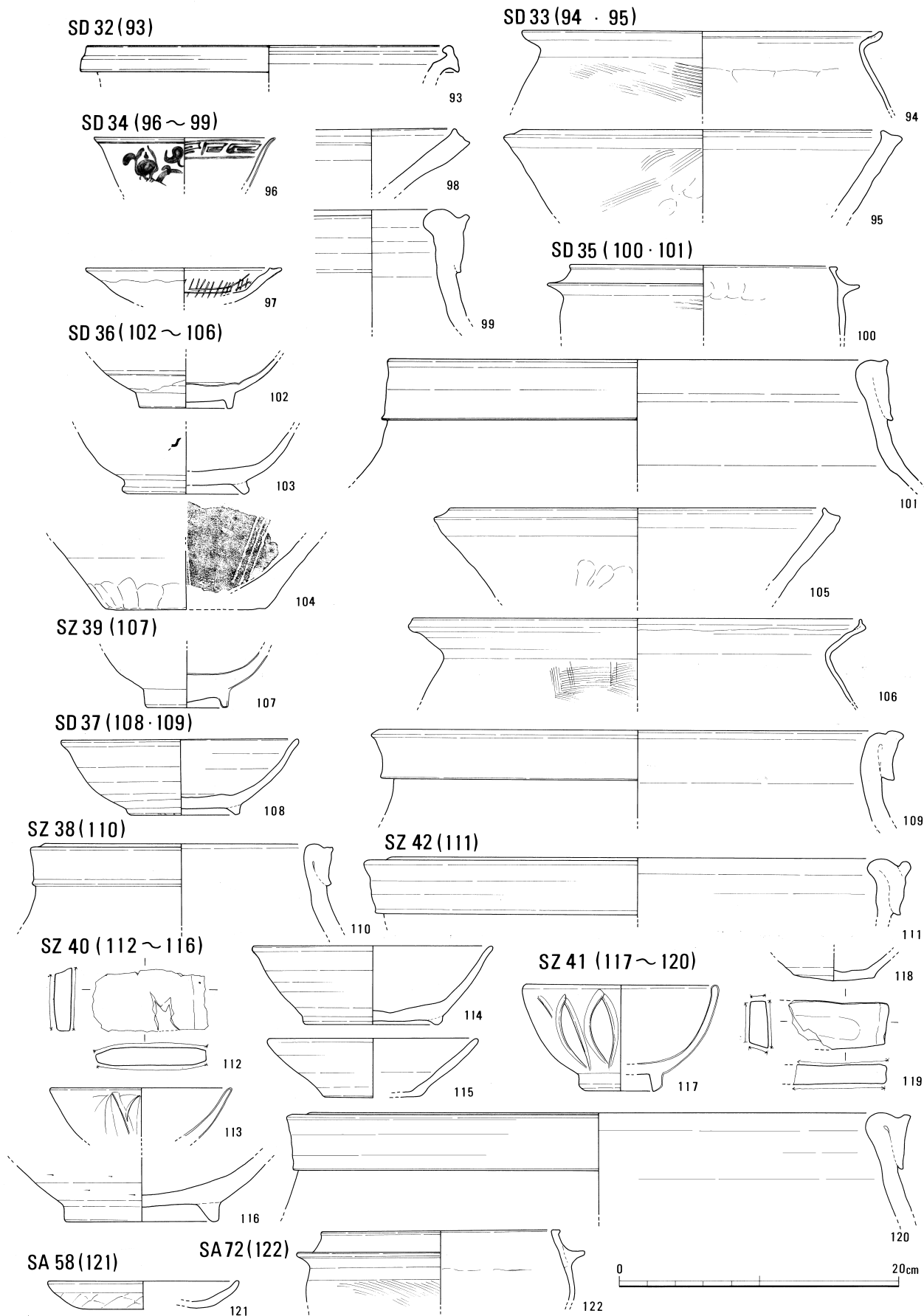
形象埴輪 (25～45)



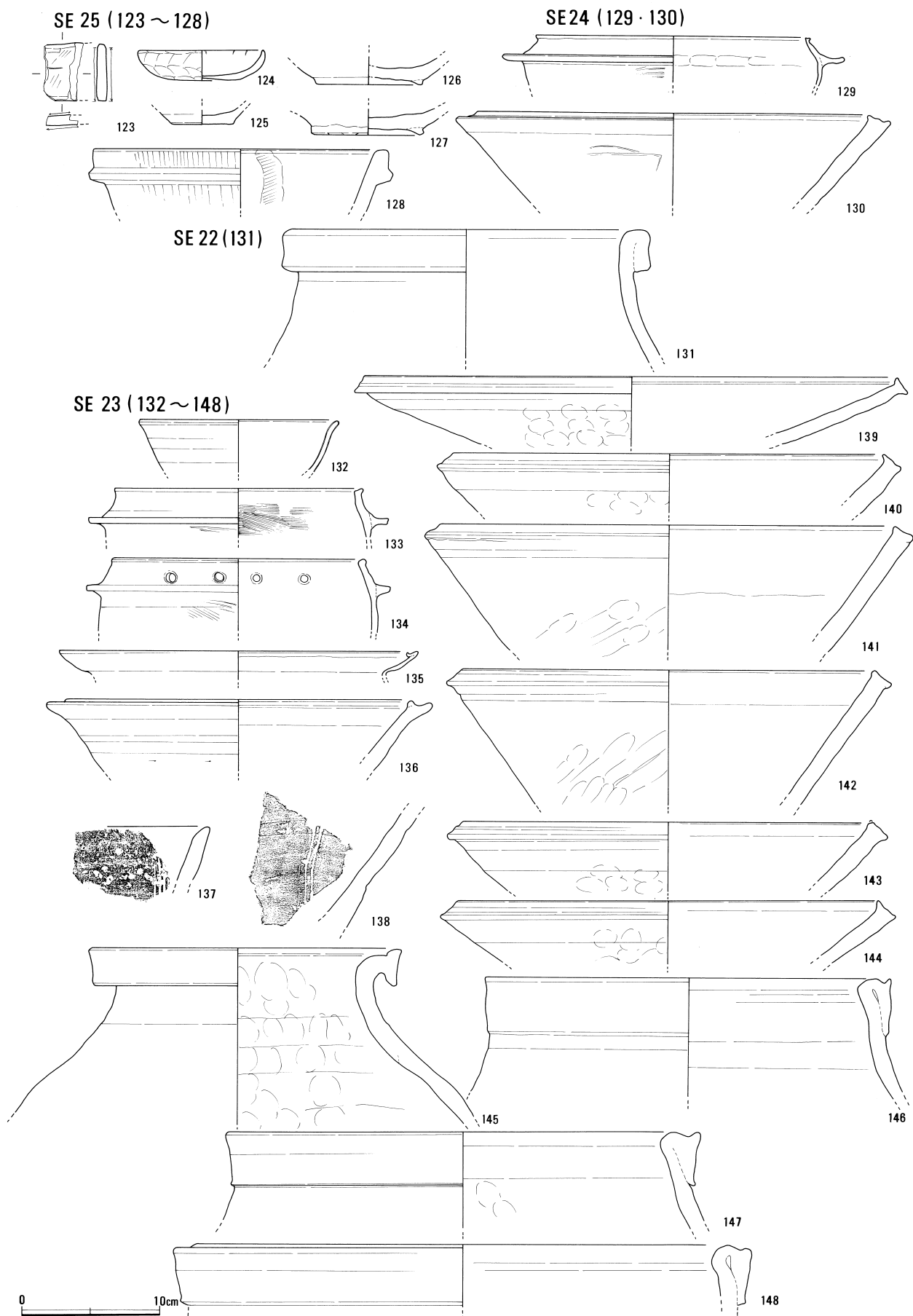
第Ⅳ-6図 長法寺1号墳出土遺物(2)(1:4)



第IV-7図 長法寺西垣内遺跡出土遺物(1)(1:4)

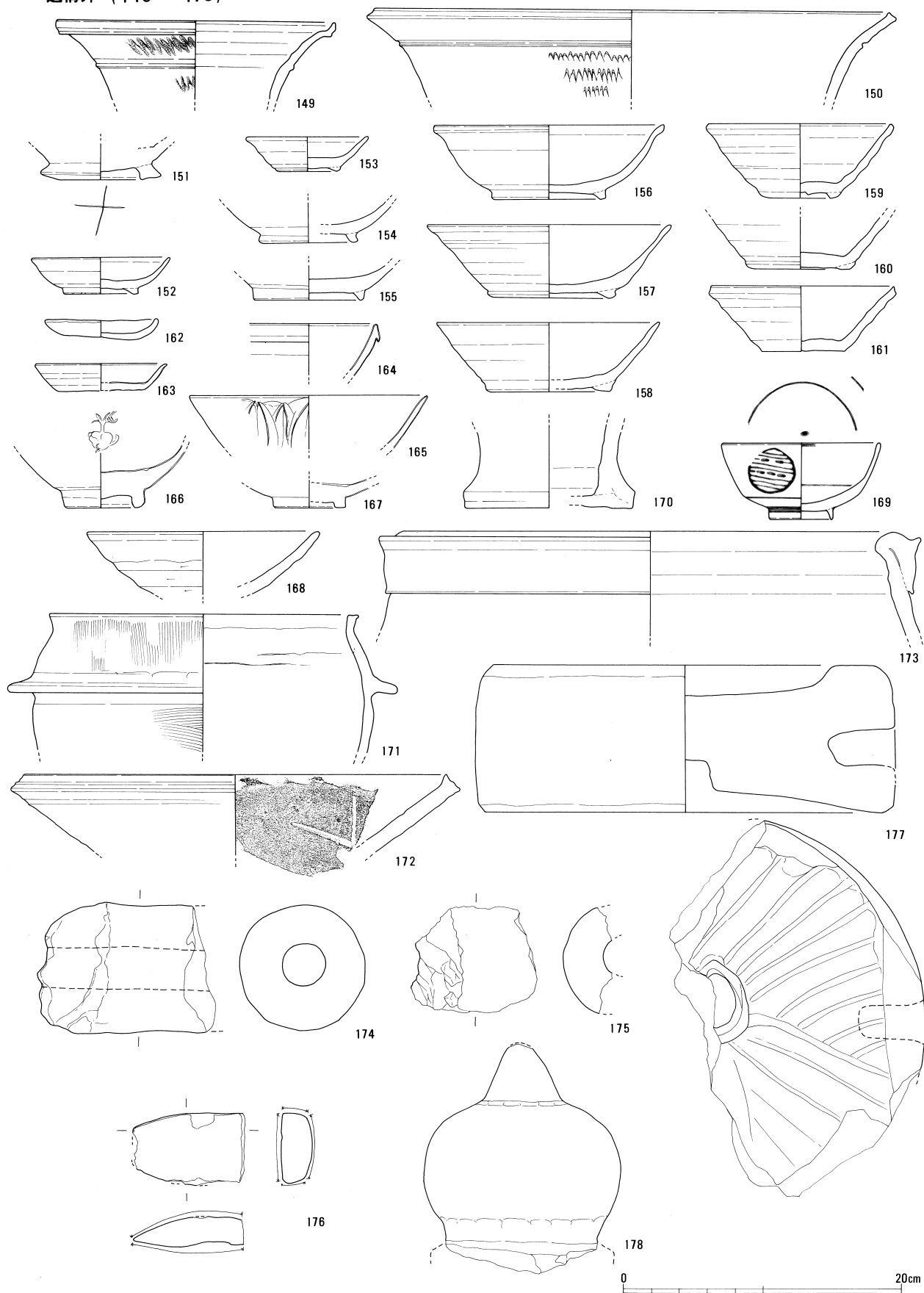


第Ⅳ－8図 長法寺西垣内遺跡出土遺物（2）（1：4）



第Ⅳ－9図 長法寺西垣内遺跡出土遺物（3）（1：4）

遺構外 (149 ~ 178)



第IV-10図 長法寺西垣内遺跡出土遺物(4)(1:4)

V 桑名垣内遺跡 ～規則的に配された古代建物群～

1 調査の経過

桑名垣内遺跡は、鈴鹿市長法寺町字桑名垣内に所在する遺跡である。県営圃場整備事業（合川・下之庄地区）に伴い、昭和62年度（第1次）・昭和63年度の2ヶ年にわたって調査がなされた。第1次調査は昭和62年11月から同年12月にかけて実施され、最終調査面積は1,000㎡である。第2次調査は昭和63年5月16日から同年6月4日にかけて実施され、最終調査面積は1,400㎡である。

発掘調査区は、大きく北部と南部に分かれており、北部をA地区、南部をB地区と呼称している。

2 調査区の立地と基本層位

桑名垣内遺跡は、中ノ川に向かって南に派生する丘陵尾根上に立地している。標高は北部で約21m、南部で約19mであり、圃場整備前の水田面からは約2.5mの比高差があった。

調査区の基本層位は、現況表土層約20cmを除去するとそのまま基盤層である黄褐色系粘質土層に達する単純なものである。基盤層は基本的に地質学上で言う洪積台地に相当し、その最上面に形成された粘土層が基盤となっている。そのため、当遺跡には基本的に遺物包含層が形成されていない。

3 検出した遺構

発掘調査の結果確認された遺構には、奈良・平安時代と中世のものがある。ただし、出土遺物には古墳時代後期の良好なものも含まれている。

以下、各地区ごとに主立った遺構の状況を見る。なお、遺構の詳細は後掲の遺構一覧表に記載したので、ここでは各地区の状況を記す。

a A地区の遺構

A地区では、古墳時代から中世にかけての遺構が確認された。

古墳時代の遺構 古墳時代の遺構は、小規模な土坑が見られるに止まる。土坑S K 51からは、後期の土

器類が出土している。また、出土遺物は微量であるが、S H 57は隅丸方形を呈する遺構であり、当該時期の竪穴住居と推測する。

掘立柱建物・柱列群 A地区では、掘立柱建物が20棟、柱列が8条確認でき、その大半が第1次調査区側にある。

A地区の掘立柱建物群は、以下のような主軸方位による区分が可能である。

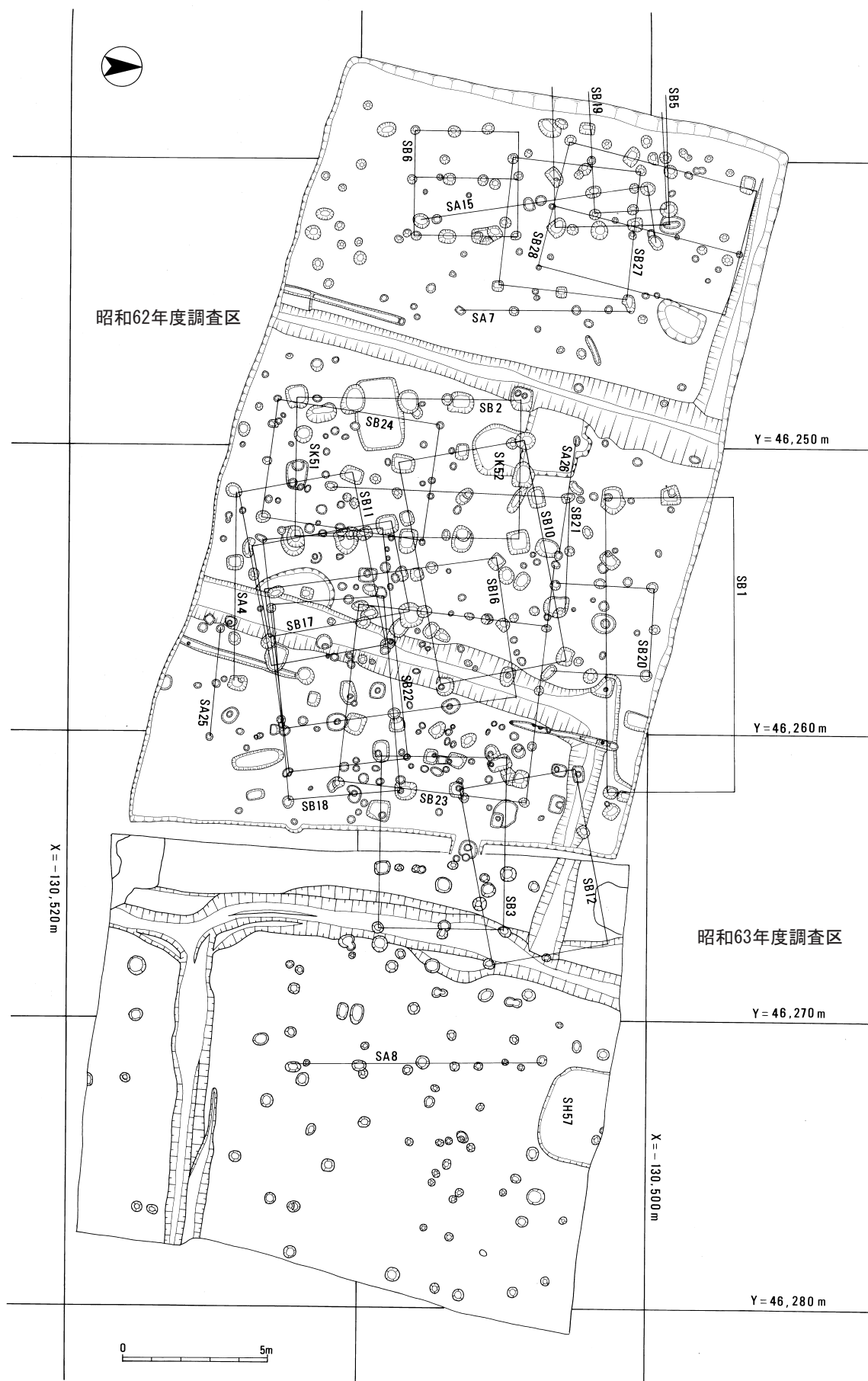
- ①真北から1・2度程度の振れ幅に収まる一群。
- ②真北から10度ほど西に振れる一群。
- ③真北から7度ほど東に振れる一群。
- ④真北から14度ほど東に振れる一群。

このうち、①群は東西・南北の長大な柱列を伴い、S B 1・2・3がそれぞれ規格的に配置される状況を呈するものである。ピットから出土した土器類を見る限り、平安時代でも前期の9世紀前半頃の建物群と考えられる。

②群は、棟方向を揃えるS B 10・12や、少し離れた位置にあるS B 13などとともに、やはり規格的な配置をするものが見られる。ただし、S B 10・12付近には上記以外にも同方向の建物が見られ、比較的長期にわたって形成されているものと考えられる。②群の建物のなかで最も新しいS B 22が中世前期初頭に相当するので、②群全体としては①群の直後から中世前期初頭にかけて形成されたと考えられる。

③群は、直径30cm程度の小規模なピットで構成される一群である。S B 23・24・27といくつかの柱列が揃うことで、規格性を有している。所属時期の明確なものは少ないが、中世前期初頭の12世紀代頃の遺構群と想定できる。

④群に相当するのはS B 28の1棟のみである。所属時期は明確ではないが、ピットの規模が30cm内外と小さいことから、中世前期以降の建物と推測できる。なお、④群とほぼ同じ方位を採る遺構に、調査区内をめぐる溝がある。溝の埋土内からは、中世前期の遺物が出土している。実際にはそれよりも新しい、耕地の開墾などに伴うものと考えられる。



第V-1図 桑名垣内遺跡A地区（西部）平面図（1：200）

b B地区の遺構

B地区では、飛鳥・奈良時代から中世にかけての遺構が検出された。

竪穴住居 飛鳥・奈良時代の遺構としては、竪穴住居がある。調査区南東部で確認したS H 55・56は、平面形が長方形を呈している。いずれの遺構からも出土遺物は少ない。

掘立柱建物・柱列 B地区でも多くの掘立柱建物や柱列が確認できるが、A地区ほど良好な規格性は見られない。所属時期も明確に把握できないものが多い。S A 42からは13世紀代に相当する土器が出土している。

4 出土した遺物

桑名垣内遺跡の出土遺物は、全体的に極めて少ない。以下、それぞれの概要を述べる。

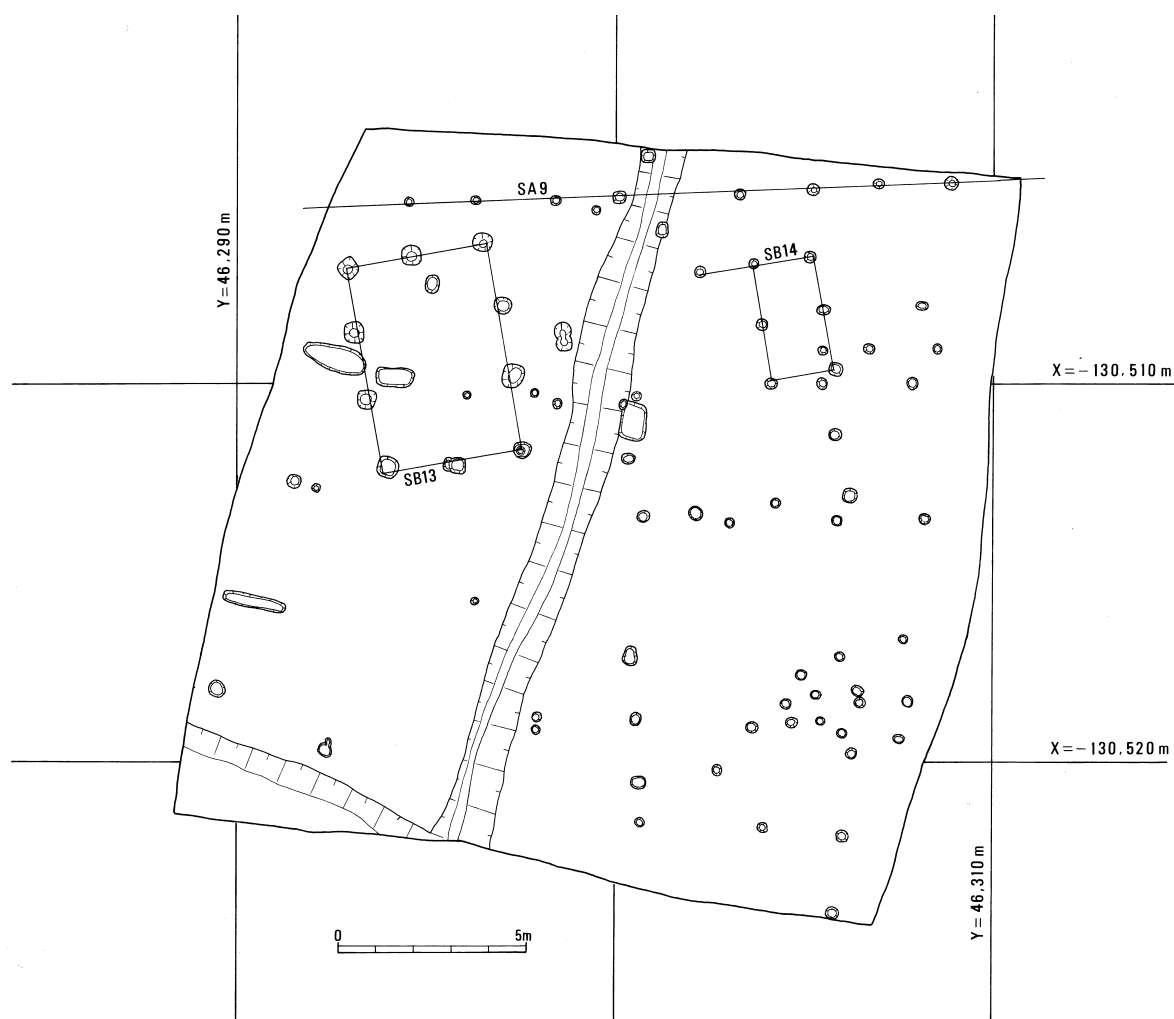
a A地区出土遺物

1～6は古墳時代後期の遺物。1～3はS K 51出

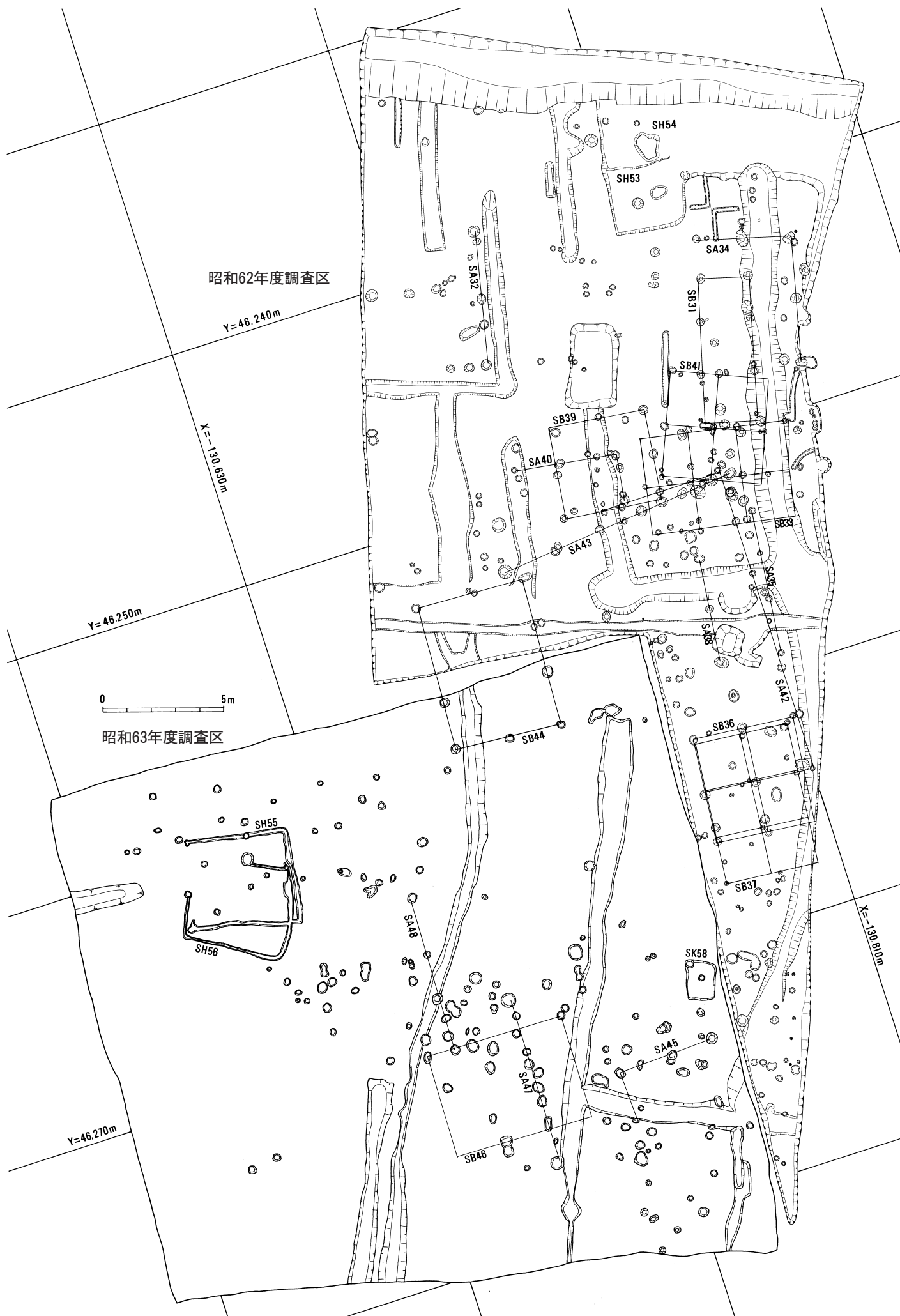
土で、6世紀中葉頃の土師器類である。4～6は遺構外出土の須恵器類で、杯類は田辺昭三氏による陶邑編年（以下、「田辺編年」⁽¹⁾）のT K 10型式併行、6の壺はT K 23型式に併行するものと考えられる。

7～11は、飛鳥～奈良時代の遺物。S K 52出土土器は、奈良時代前半頃に相当するものであろう。

12～16・19は平安時代の遺物。12はS B 2の柱穴から出土した土師器甕で、斎宮跡ではⅡ期以降に出現するものであるため、概ね9世紀頃のものと考えて大過ない⁽²⁾。13はS B 3出土の灰釉陶器碗、14はS A 7出土の灰釉陶器皿で、いずれも斎藤孝正氏による猿投窯編年（以下「斎藤編年」⁽³⁾）の黒笹90号窯式1型式に相当する。15はS B 20出土の土師器甕で、奈良時代以降の形態である。16は黒色土器碗で、内面のみ黒化されている。斎宮編年では、第Ⅱ期第3段階以降によく見られる。19は灰釉陶器の把手付瓶で、斎藤編年の黒笹90号窯式から折戸53号窯式併行期に見られる形態である。



第V-2図 桑名垣内遺跡A地区（東部）平面図（1：200） ※昭和63年度調査区

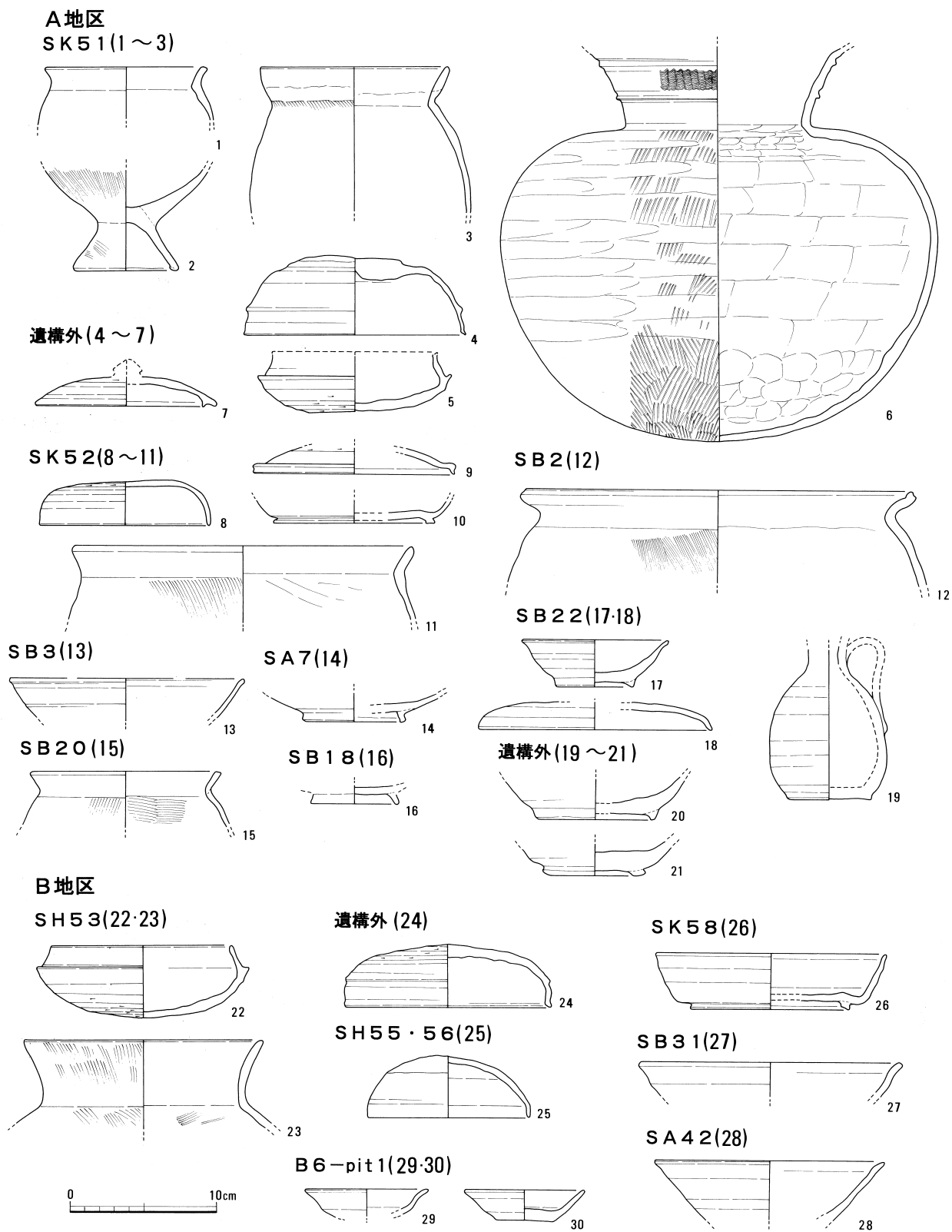


第Ⅴ－１表 桑名垣内遺跡掘立柱建物・柱列一覧

通番遺構名	地区	次数	グリット	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模（東西間・m×南北間・m）	主軸	方位 (N基準)	備 考
SB1	A	1次	D1 E1	SK2 SK2・6	須恵器片（奈良？）	平安前期？	5(10.9)×2？(4.2)	東西	N0°	
SB2	A	1次	C2 C3 C4	SK1 SK1・2 SK1	黒色土器A類	平安前期	2(5.0)×4(7.7)	南北	N0°	
			D3 E2 E3	SK3 SK1 SK1・2	土師器甕（平安前期）					
			G2 G3	SK3 SK1	灰釉陶器K14～K90					
			D4 E4 F4	SK1（重複） SK3・7 SK1	平安前期 灰釉陶器K90～					
SB3	A	1・2次	G2 G3	SK3 SK1	灰釉陶器K14～K90	平安前期	3(6.0)×2(4.1)	東西	N0°	
SA4	A	1次	D4 E4 F4	SK1（重複） SK3・7 SK1	平安前期 灰釉陶器K90～	平安前期	3(6.8)	東西	N0°	
SB5	A	1次					2(3.5)以上×3(4.2)	東西	N1°W	
SB6	A	1次	B3	SK1			2(3.6)×3(3.6)	南北	N1°W	総柱建物
SA7	A	1次					3(6.0)	南北	N1°W	
SA8	A	2次					4(8.6)×2(3.8)	南北	N1°W	掘立柱建物か？
SA9	A	2次	I2 K1	pit3 pit1			7(14.4)以上	東西	N2°W	
SB10	A	1次	D1 E2	SK1 SK4	須恵器片（奈良）	平安以降	1(2.0)以上×3(6.1)	東西	N7°E	
SB11	A	1次	D4 E4	SK1（重複） SK4（重複）	平安前期？					
SB12	A	1・2次	G1	SK2	須恵器片	平安前期？	3(5.2)×2(4.1)	東西	N10°W	製塩土器が出土したピットよりも新
SB13	A	2次	H3 I2 I3 J3	pit1 pit1・2 pit1・2・3 pit1			2(3.7)×3(5.5)	南北	N10°W	
SB14	A	2次					2(3.0)×2(3.1)	南北	N10°W	総柱建物か？
SA15	A	1次					1(2.0)×4？(8.0)	南北	N10°W	
SB16	A	1次	E2	SK3			2(5.0)×4(8.0)	南北	N7°W	
SB17	A	1次	E3 E4	SK4 SK4（重複）	平安前期？	平安以降	2(3.1)×3(5.0)	南北	N10°W	
SB18	A	1次	F2 F3 G2	SK3 SK2 SK5	黒色土器A類（平安前期） 平安前期？ 製塩土器（奈良末～）	平安前期	3(6.9)×2(3.9)	東西	N7°W	
SB19	A	1次					2(3.1)以上×2(2.6)	東西	N3°W	
SB20	A	1次	E1 F1	SK1・3 SK1	土師器甕（奈良末～）		2(3.0)×2(3.6)	南北	N1°E	
SA21	A	1次	E1	SK4	須恵器甕片（平安以降）	平安	4(8.4)×3(6.1)	南北	N4°E	
SB22	A	1次	F3	SK3	山茶碗4型式	中世Ⅰb	4(8.1)×2(4.2)	東西	N7°W	
SB23	A	1次	E1 E3	SK5 SK3		平安以降	3(6.2)×3(6.6)	南北	N7°E	
			E4	SK6	灰釉陶器K90～ 平安前期～					
SB24	A	1次				平安以降	2(4.2)×3(5.7)	南北	N8°E	
SA25	A	1次					2(3.8)	東西	N6°E	
SA26	A	1次					2(4.0)	東西	N7°E	
SB27	A	1次					2(4.4)×2(4.6)	南北	N7°E	
SB28	A	1次					3(6.8)以上×2(4.4)以上	南北	N14°E	
SB31	B	1次	D10 E11	SK2 SK1	灰釉陶器～山茶碗3型式	平安後期	3(6.0)×1(2.0)	東西	N15°E	
SA32	B	1次	C13	SK1	須恵器片		2(5.6)	東西	N12°E	
SB33	B	1次					2(3.9)×3(6.1)	東西	N9°E	
SA34	B	1次					2(5.4)×2(3.9)	東西	N12°E	
SA35	B	1次					3(6.0)	東西	N7°E	
SB36	B	1次					2(4.5)×2(4.2)	東西	N5°E	
SB37	B	1次					3(5.8)×2(3.8)	東西	N5°E	SB36の建て替え？
SA38	B	1次					2(4.4)	東西	N5°E	
SB39	B	1次					2(3.9)×2(4.2)	南北	N6°E	
SA40	B	1次					1(1.8)×2(4.3)	南北	N9°E	
SB41	B	1次					2(4.4)×2(4.0)	東西	N21°E	
SA42	B	1次	H11 F11	SK1 SK1	山茶碗5型式	中世Ⅱa	6(12.9)以上×2(5.0)	東西	N0°	
SA43	B	1次	F12 B3	SK1 pit1						
SB44	B	1・2次					3(6.2)×2(4.6)	東西	N4°E	
SA45	B	2次					1(2.0)×2(4.2)	南北	N1°W	
SB46	B	2次					2(4.3)×3(5.8)	南北	N0°	
SA47	B	2次					4(6.3)	東西	N0°	
SA48	B	2次					3(6.5)	東西	N0°	

第Ⅴ－２表 桑名垣内遺跡遺構一覧

遺構番号	性 格	時 期	地区	次数	調査時遺構名	特徴・形状・計測数値など
SK51	土坑	古墳後期	A	1次	D3－SK1	
SK52	土坑	奈良前後	A	1次	D2－SK1	
SH53	竪穴住居	古墳後期？	B	1次	C11－SB	方形 3.2m×2.8m以上 中央北寄りに焼土
SH54	竪穴住居	不明	B	1次		方形 東壁寄りに焼土。
SH55	竪穴住居	飛鳥～奈良？	B	2次	C6－SB1	方形 4.4m×4.1m 壁周溝あり SH56より古。
SH56	竪穴住居	飛鳥～奈良？	B	2次	C6－SB1	方形 3.9m×4.6m 壁周溝あり SH55より新。
SH57	竪穴住居	古墳後期？	A	2次	C2－SB1	隅丸方形 3.4m×2.1m以上
SK58	土坑	奈良	B	2次	E1－焼土	竪穴住居か？



第V-5図 桑名垣内遺跡出土遺物 (1:4)

17～21は平安時代末から鎌倉時代初頭にかけての遺構から出土した遺物。17は陶器小椀で、藤澤良祐氏による山茶碗編年（以下、「藤澤編年」⁽⁴⁾）の尾張型第4型式に相当する。18は須恵器蓋で、混入と考えられる。20・21は渥美産の陶器碗。

b B地区出土遺物

22～24は古墳時代の遺物。22・24の須恵器は、田辺編年のTK10型式に併行する。

25・26は飛鳥・奈良時代の遺物。25は須恵器蓋で7世紀中葉頃、26は須恵器杯で8世紀前半代のものであろう。

27～30は平安時代後期から鎌倉時代初頭の遺物。27はSB31出土の陶器碗で、藤澤編年の尾張型第3型式に併行するものであろう。28はSA42出土の陶器碗で、藤澤編年の第5型式に相当する。29・30は、藤澤編年の尾張型第5型式に併行する陶器小皿である。

5 調査のまとめ

桑名垣内遺跡では、古墳時代後期から中世にかけての遺構・遺物が見られた。なかでも遺跡の中心となる時期は、平安時代前半期頃である。

建物群は、主軸方位によって①～④群に区分できた（第V-6図）。このうち、主軸を真北に向ける①群は平安時代前期（9世紀中葉）頃、真北から西へ10度ほど振れる③群は平安時代中期から中世初頭（9世紀末から12世紀中葉）頃と考えられる。この2群は、いずれも掘立柱建物と掘立柱塀（柱列）が企画的に配列されたと考えられるものである。

この形態から見て、単なる地域土豪層の造作によるものとは考えにくく、中央権力が介入した何らかの役所施設と見るのが妥当のように思われる。当遺跡の性格として、遺跡の状況からは、郡衙関連施設（当地では奄芸郡衙）の可能性を考える必要がある。また、「三宅町」の名から、古代ミヤケ制との関係も想定される。桑名垣内遺跡の性格としては、大きくはこの2点から考える必要がある。

まずは奄芸郡衙の可能性を見よう。奄芸郡衙については、当遺跡の下流約4kmにある郡山遺跡群（鈴鹿市郡山町）⁽⁵⁾が考えられている。「コホリヤマ」という地名と遺跡内容から見て、郡山遺跡群（とくに末野B遺跡）⁽⁶⁾が奄芸郡衙である可能性は高いであろ

う。桑名垣内遺跡は奄芸郡の西端にあたるため、位置的に見れば奄芸郡衙と考えるのは苦しい。ただし、末野B遺跡の中心時期は奈良時代のものであり、平安時代の状況が明確ではない。そのため、当初は末野B遺跡にあった奄芸郡衙が桑名垣内遺跡に移動したという可能性も完全には否定できない。郡山遺跡群に関する報告は途上であり、正式な報告を待って再検討する必要がある。

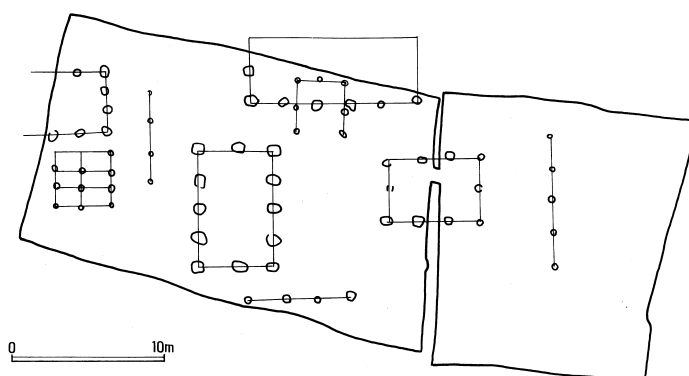
つぎに、ミヤケとの関連である。桑名垣内遺跡の所在する地は鈴鹿市三宅町であり、古代ミヤケの遺称と認識されている。ミヤケは「大化前代における天皇もしくは朝廷の直轄領」⁽⁷⁾とされ、狭義に見れば「一般的には貢納奉仕の拠点たる官衙を示す」⁽⁸⁾とされている。ミヤケが7世紀前半以前のものと限定されるのであれば、桑名垣内遺跡をミヤケとの関連で把握するのは妥当ではない。しかし、全国各地にミヤケの遺称が残っている状況からは、制度上の問題はともかく、実態としてのミヤケは7世紀後半以降も残っていたのではないだろうか。

平野邦雄氏の説明によれば、郡家や正倉も、「ミヤケ」と訓読されるという。「ミヤケ」には公的施設という意味合いが含まれているものと考えられる。桑名垣内遺跡は、実態としてのミヤケの存在を示す可能性も考えるべきであろう。

いずれにしても、桑名垣内遺跡で検出した遺構の性格は、公的施設としての側面が濃厚と考えられる。今後の検討深化が待たれる非常に重要な遺跡といえよう。（伊藤）

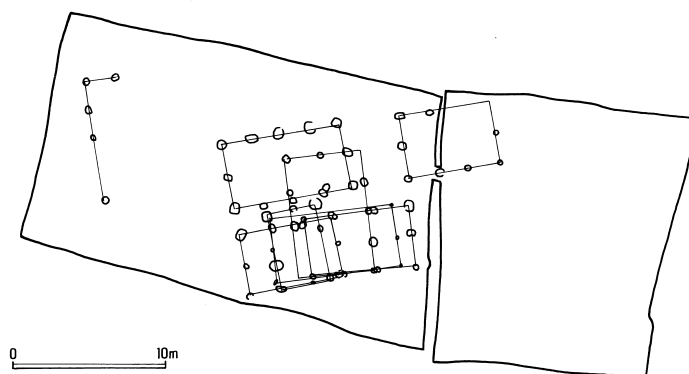
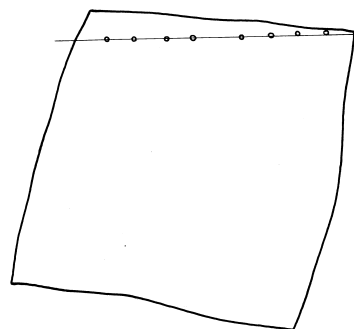
< 註 >

- (1) 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店 1981年）
- (2) 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ（2001年）
- (3) 斎藤孝正『日本の美術』409 ～越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器～（至文堂 2000年）
- (4) 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年）
- (5) 仲見秀雄ほか『鈴鹿市史』第1巻（1980年）
- (6) 鈴鹿市遺跡調査会『末野B遺跡調査概要』（1978年）、同『末野C遺跡調査概要』（1979年）、および註(5)文献による。
- (7) 『国史大辞典』（吉川弘文館）所収、「みやけ」（平野邦雄氏執筆）
- (8) 仁藤敦史「古代王権とミヤケ制」（『考古学ジャーナル』533 2005年）



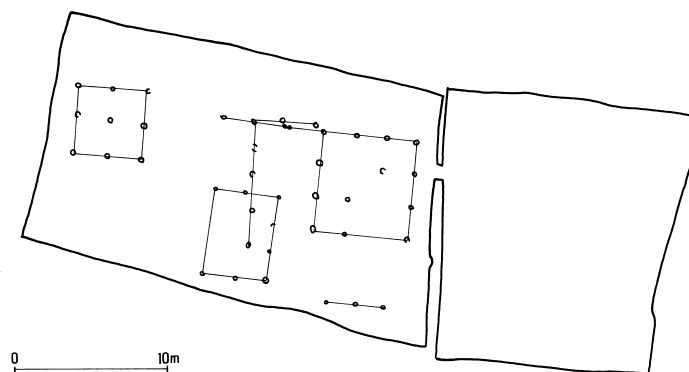
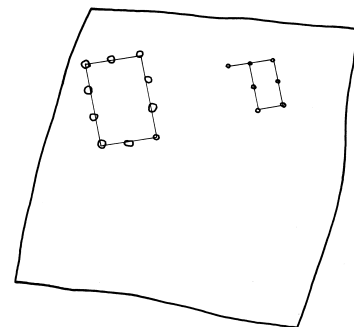
主軸N0° 前後 (①群)

平安前期



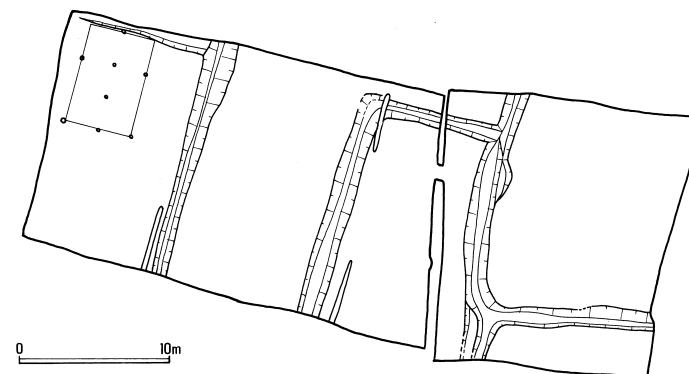
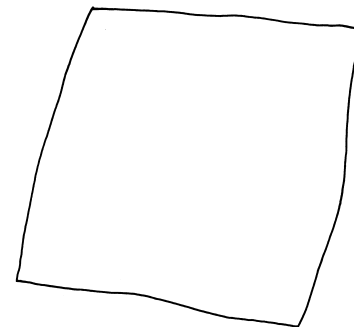
主軸N10° W前後 (②群)

平安中期～中世前期



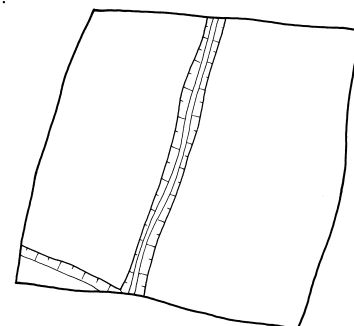
主軸N7° E前後 (③群)

中世前期



主軸N14° E前後 (④群)

中世前期?



第V-6図 桑名垣内遺跡A地区遺構変遷図 (1:500)

Ⅵ 加和良神社遺跡・加和良3号墳 ～古墳と古代・中世集落～

1 調査の経過

加和良神社遺跡および加和良3号墳は、鈴鹿市三宅町字西条に所在する。県営圃場整備事業（合川・下之庄地区）に伴い2回にわたる調査を行った。第1次調査は昭和62年12月15日から12月24日にかけて、第2次調査は昭和63年6月6日から8月3日にかけて実施された。最終的な調査面積は、第1次調査が490㎡、第2次調査が1,980㎡である。

2 調査区の立地と基本層位

加和良神社遺跡は、中ノ川北岸部に位置する低丘陵上に立地する。遺跡の西部には三宅神社が鎮座する。遺跡の西部は桑名垣内遺跡である。遺跡の東部には狭い谷が入り込み、南北2箇所の低丘陵を形成している。第1次調査区は南部丘陵、第2次調査区は北部丘陵にあたる。

第1次調査区の記録から層位の状況を見る。第1次調査区は標高17.0～17.6mで、北部ほど高い。遺構の基盤となる層は黄褐色粘質土で、地表下30～40cmほどで達する。表土と基盤層の間には灰褐色系土が堆積し、含有量の少ない遺物包含層に相当する。

3 検出した遺構

検出遺構の詳細は、第Ⅵ-1・2表に示した⁽¹⁾。以下では、回数ごとに時期別の概要を記す。

a 第1次調査区の遺構

第1次調査区の遺構には、掘立柱建物18棟、柱列6棟のほか、土坑・落ち込みがある。

縄文時代 後期の土器を伴う土坑が1基検出されている（SK25）。縄文時代に相当する遺構はこれのみで詳細は分からない。

古墳時代 後期頃と考えられる遺物が少量ながら出土している。その場所は掘立柱建物SB3・4・5付近に集中しているため、この付近にこの時期のた建物が存在する可能性もある。

奈良時代 この時期の遺構には、掘立柱建物がある。

出土遺物から見て、SB5はこの時期の建物と認識できるし、重複関係からこの建物よりも新しいSB4もこの頃の遺構とみてよいであろう。この時期の建物主軸は真北から東偏約15度内外である。

中世 平安時代末から鎌倉時代前半の中世前期に相当する時期が中心である。この時期の遺構には掘立柱建物・柱列がある。柱列としたものは、実際には掘立柱建物の一部と考えられるものが多い。SB11・13・18などは12世紀前半頃、SB10・12・SA20などは13世紀後半頃のものと考えられる。

b 第2次調査区の遺構

第2次調査区の遺構には、古墳3基、竪穴住居4棟、掘立柱建物10棟のほか、土坑・溝などがある。

古墳時代 周溝SX31は、古墳の周溝に相当すると考えられる。加和良3号墳とする。同じ時期の遺構であるSD32・33は、やや歪な形態であるが、小形の方墳の可能性もある。これらは、後述の加和良1・2号墳よりもやや先行し、6世紀前半頃に相当すると考えられる。

飛鳥・奈良時代 確実にこの時期の遺構と言えるのは竪穴住居SH35～37で、竪穴住居SH34もこの時期のものと思われる。SH34は、この時期の遺構としては珍しく排水溝を伴うものである。

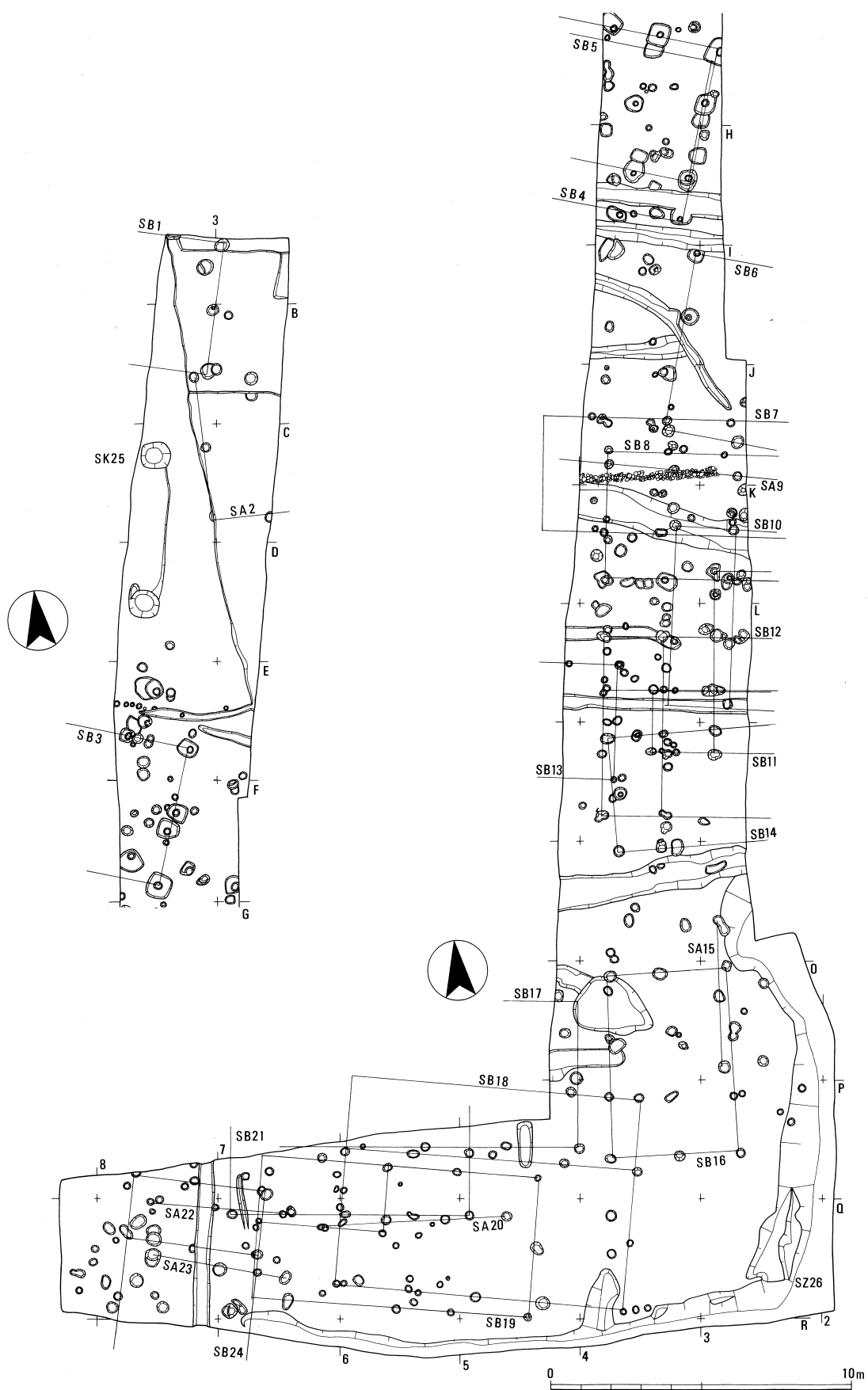
平安時代 掘立柱建物SB50は、平安時代後期頃に相当すると考えられる。他にも、SB46・47・51・52・54・55などは、形態から見てこの時期の遺構である可能性がある。

中世 中世前期初頭頃の遺構に、掘立柱建物SB49がある。SB53も同じ頃のものとして推察される。これらよりもやや新しい遺構に土坑SK38・39があり、13世紀初頭頃と考えられる。

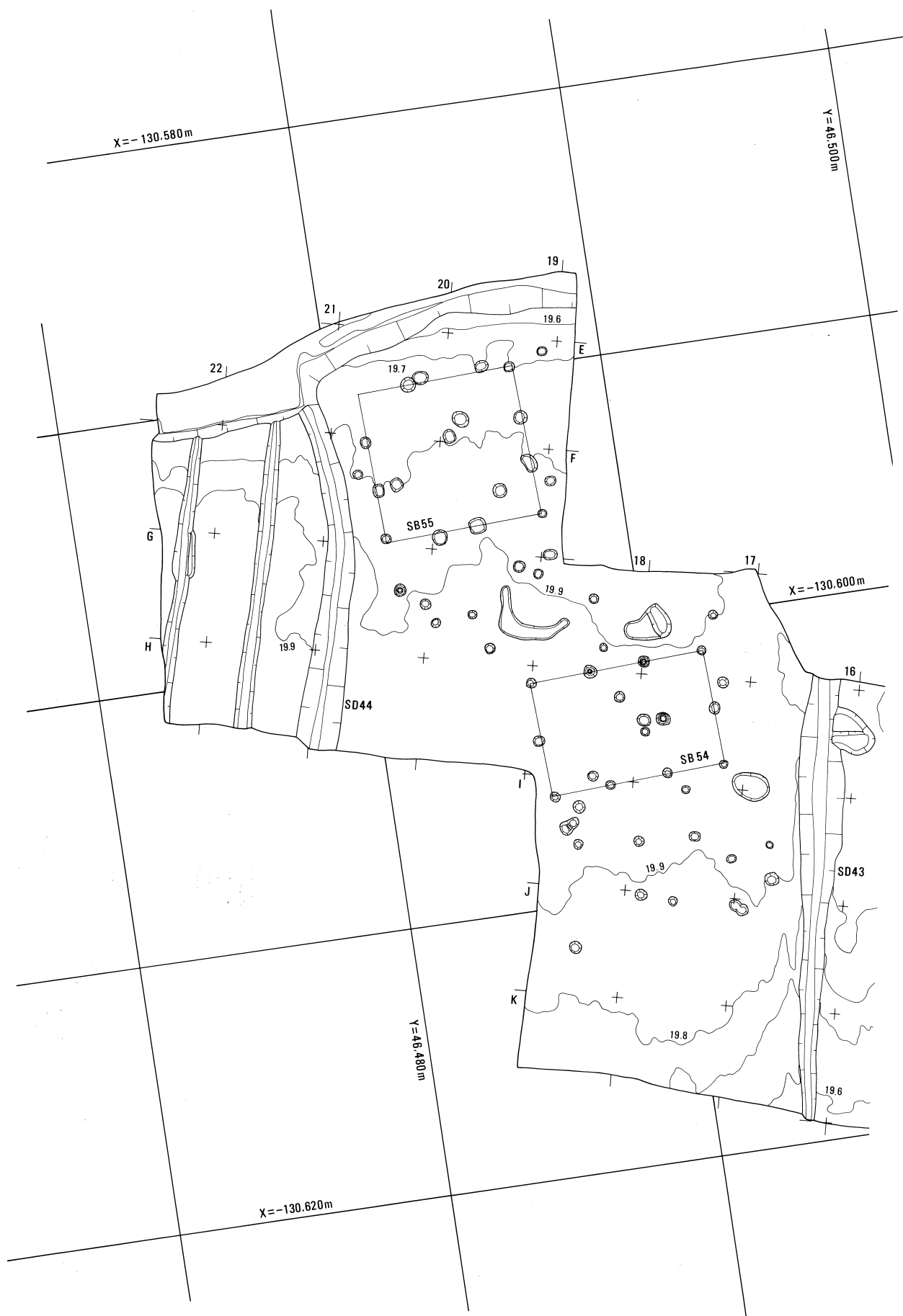
4 出土した遺物

a 第1次調査区の出土遺物

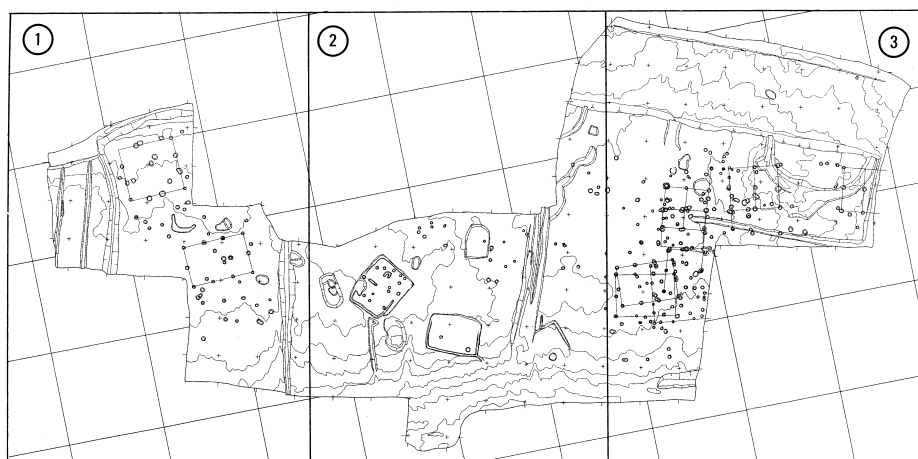
1～4は土坑SK25から出土した土器類で、縄文時代後期に相当する。小片のため詳細が不明であるが、磨消縄文と沈線が観察できる。



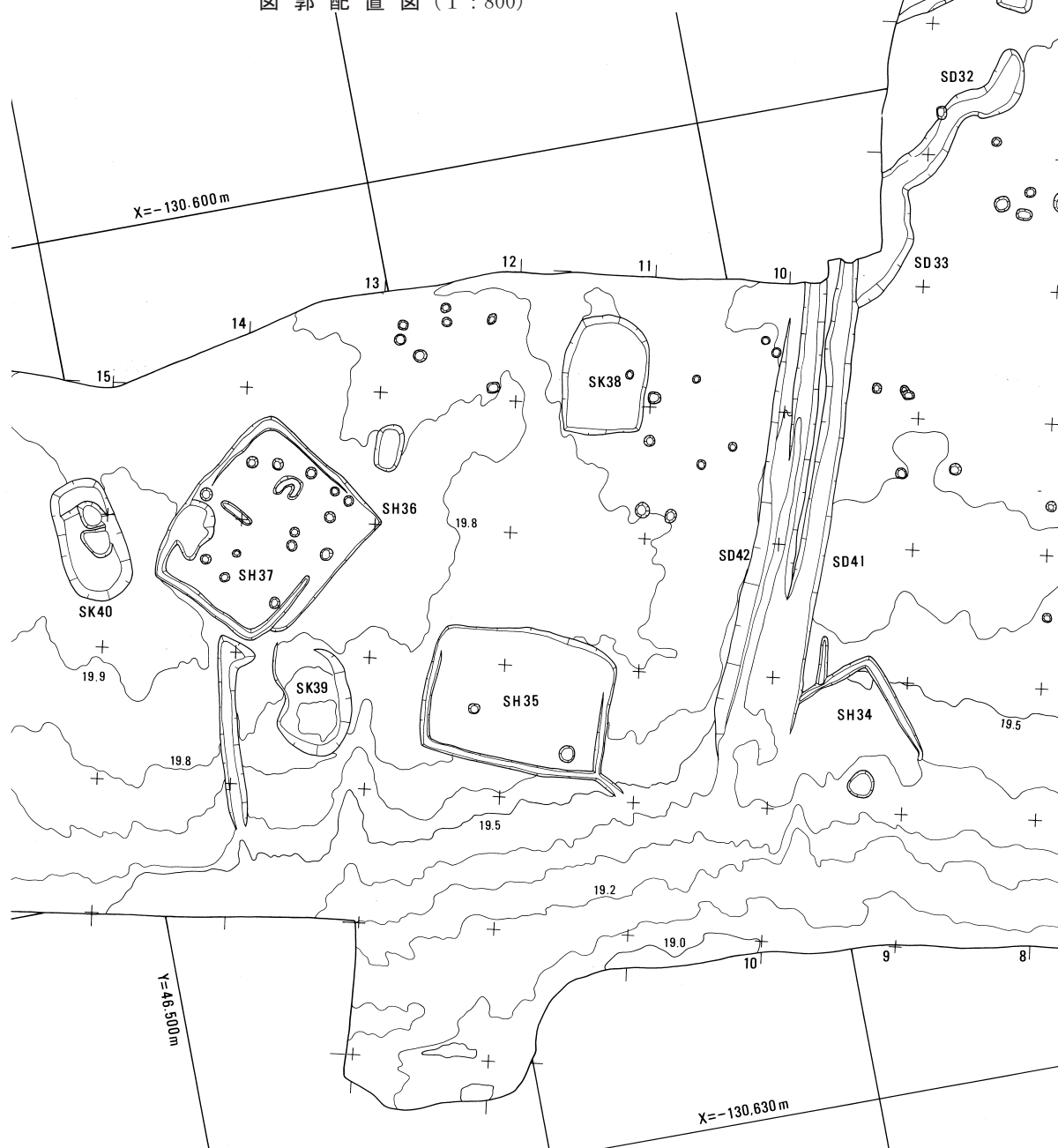
第Ⅵ-1図 加和良神社遺跡（第1次）平面図（1：200）



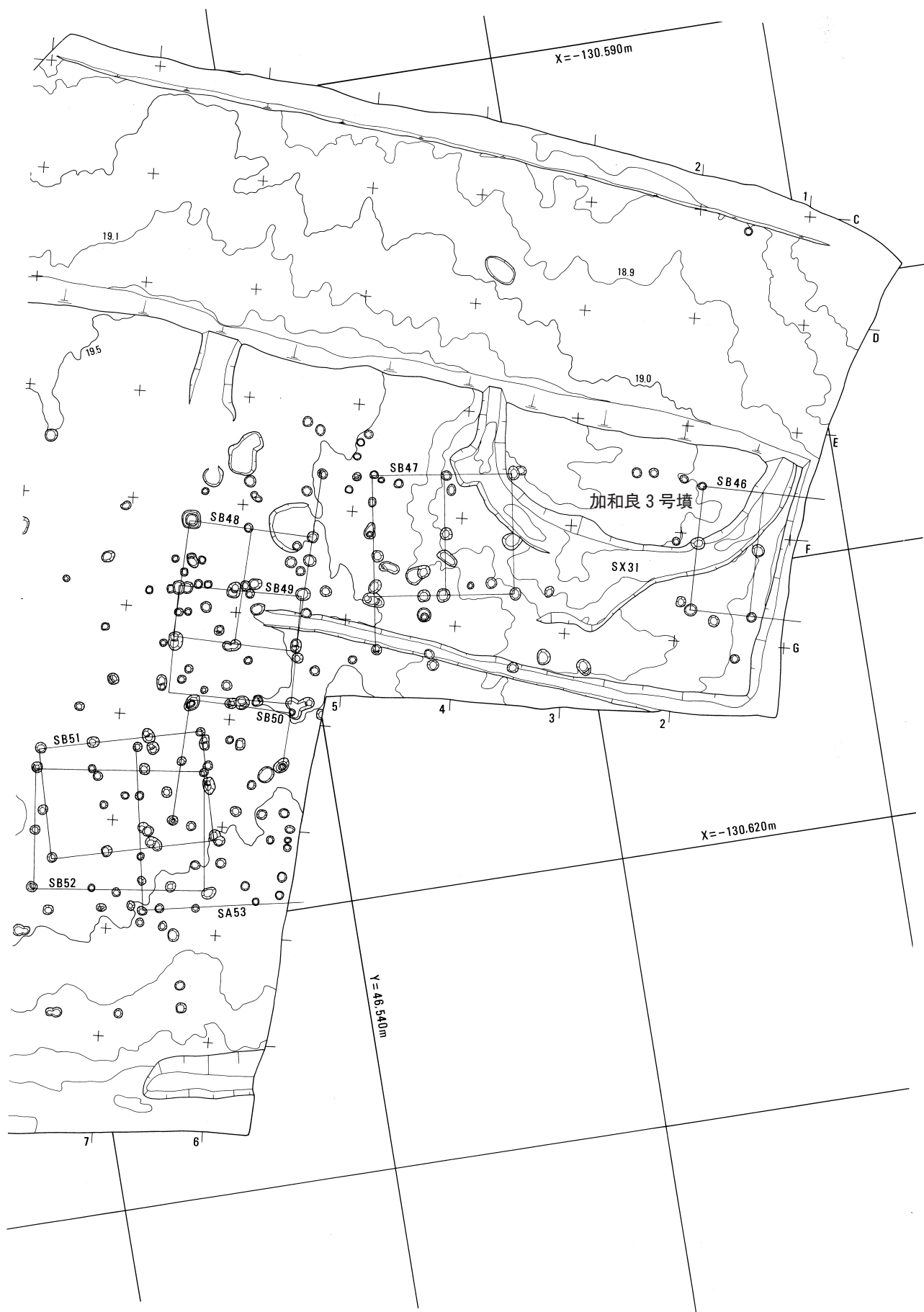
第VI-2図 加和良神社遺跡（第2次）平面図（1）（1：200）



図郭配置図 (1 : 800)



第VI-3図 加和良神社遺跡(第2次)平面図(2) (1 : 200)



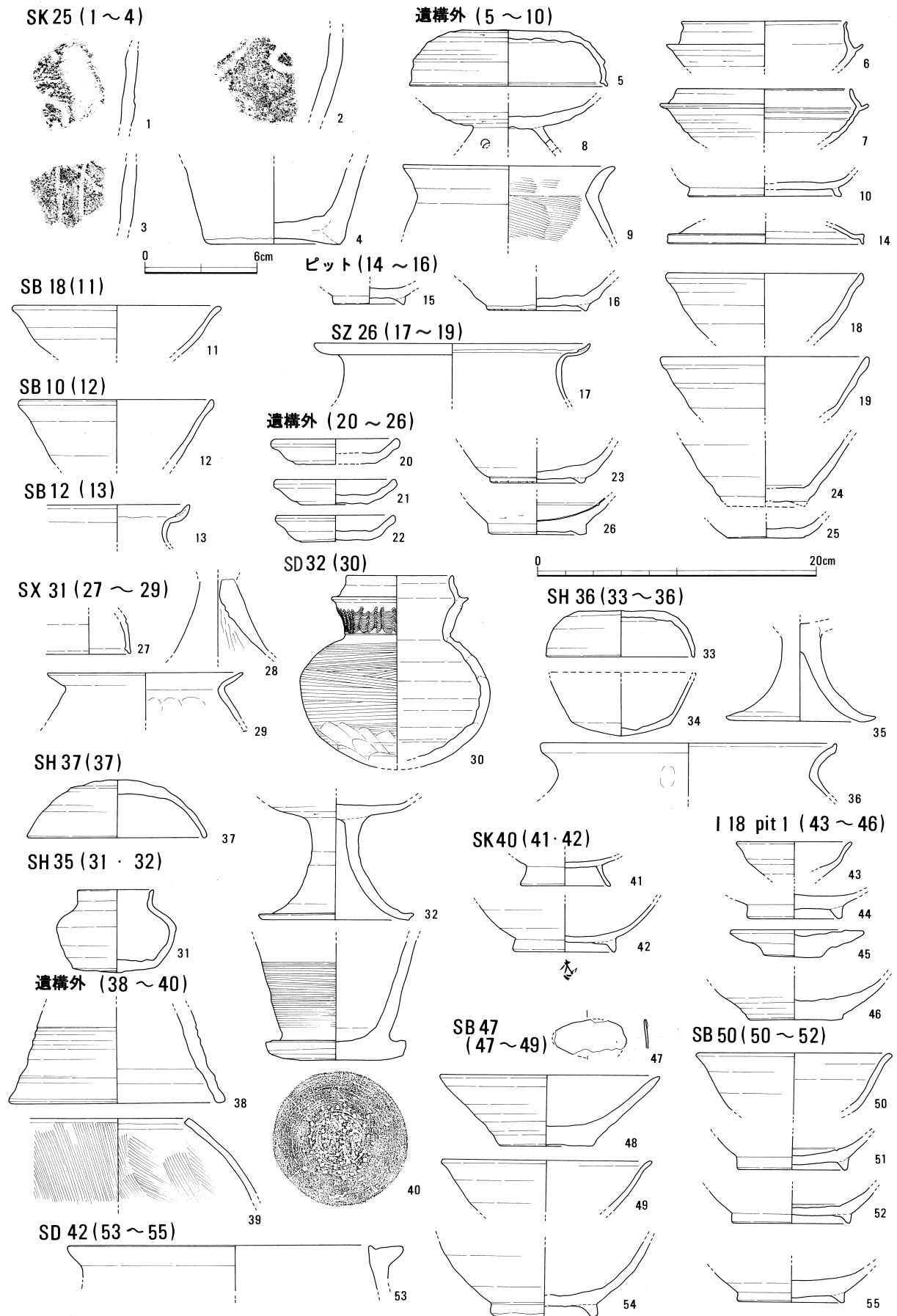
第VI-4図 加和良神社遺跡(第2次)平面図(3)(1:200)

第Ⅵ－１表 加和良神社遺跡遺構一覧

遺構番号	性 格	時 期	次数	グリッド	調査時遺構名	特徴・形状・計測数値など
SK 25	土坑	縄文後期	1次	C 4	SK 1	
SZ 26	落ち込み	1 3世紀後半～	1次	O 3	おちこみ	地境の落ち込みか？
				Q 3	おちこみ	
SX 31	古墳 (加和良3号墳)	古墳後期	2次	F 2	SK	加和良神社3号墳 一辺約1 0 mの方墳 須恵器TK 1 0型式前後 6世紀代
				F 3	SD	
SD 32	溝	古墳後期	2次	E 8	SD 1	古墳周囲の可能性あり 6世紀代
				D 8	SK 1	
SD 33	溝	古墳後期	2次	F 9	SK 1	古墳周囲の可能性あり SD 3 2と接続 6世紀代
SH 34	竪穴住居	飛鳥～奈良？	2次	J 9	SB 1	
SH 35	竪穴住居	飛鳥～奈良	2次	J 1 1	SB 1	須恵器・土師器甕あり
SH 36	竪穴住居	飛鳥～奈良？	2次	H 1 3・1 4	SB 1	SH 5 7と重複。前後関係不明。
SH 37	竪穴住居	飛鳥～奈良？	2次	I 1 3・1 4	SB 1	SH 5 6と重複。前後関係不明。
SK 38	土坑	13世紀中葉	2次	G 1 1	SK 1	
SK 39	土坑	1 3世紀前葉	2次	J 1 3	SK 1	
SK 40	土坑	1 1世紀後半	2次	H 1 5・1 1 5	SK 1	
SD 41	溝	13世紀中葉？	2次	I 9	SD 1	
SD 42	溝	1 3世紀中葉？	2次	I 1 0	SD 1	
SD 43	溝		2次	G 1 6	SD 1	
SD 44	溝	1 2世紀後半～	2次	F 2 0	SD 1	
SK 45	土坑	1 3世紀前半	2次	H 1 2	SK 1	

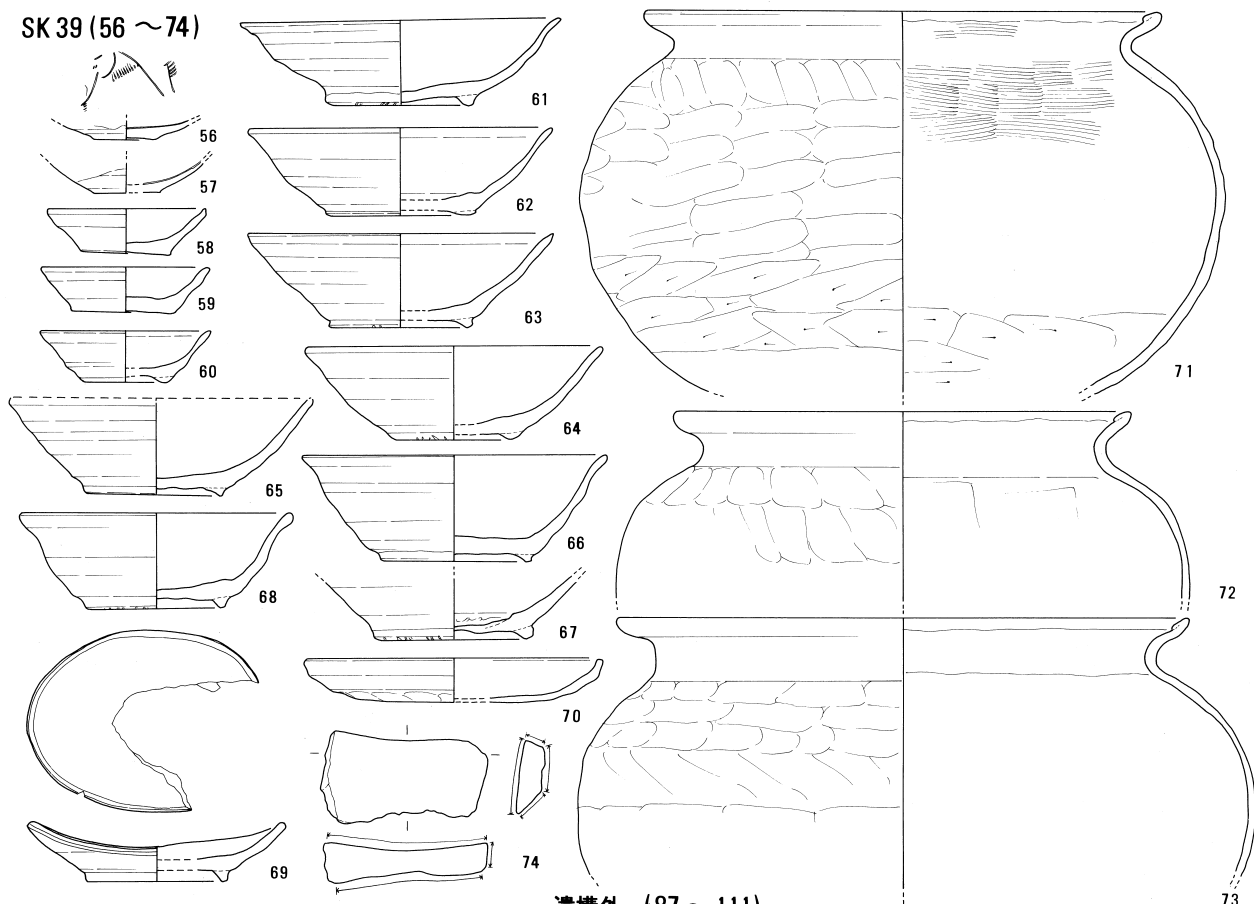
第Ⅵ－２表 加和良神社遺跡掘立柱建物・柱列一覧

遺構遺構名	次数	グリッド	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模(東西間・m×南北間・m)	主軸	方位 (N基準)	備 考
SB 1	1次					1 ? (1.8)×2 (4.4)	東西	N13 ° E	
SA 2	1次	C 4	2,			1 ? (1.8)×2 (4.8)	南北	N 0 °	
SB 3	1次	E 4	柱穴1, 3	奈良時代須恵器	奈良後期	1 (2.0)以上×2 (4.8)	東西	N16 ° E	妻柱が2本？
		F 4	柱穴1, 2, 5	5…奈良後半製塩土器					
		G 3	柱穴4, 5						
SB 4	1次	G 4	柱穴1, 2	古墳時代後期～	古墳後期？	2以上(3.4)×3 (5.9)	南北？	N14 ° E	
		G 3	柱穴6,	古墳時代後期～					
SB 5	1次	G 4	柱穴3,	須恵器片	奈良	1 (1.8)以上×2 (4.1)	東西	N14 ° E	
		H 4	柱穴1, 3	須恵器片(奈良？)					
SB 6	1次					1 (2.2)以上×3 (6.2)	南北？	N16 ° E	
SB 7	1次	J 3	1,	山茶椀片	中世Ⅱ期	2 (4.3)以上×2 ? (3.9)	東西	N 7 ° E	
SB 8	1次	K 4	2,	須恵器壺片	中世Ⅰ期	2 (3.9)以上×2 (4.3)	東西	N 6 ° E	
SA 9	1次					2 (4.4)	東西	N12 ° E	
SB 10	1次	M 4	4,	山茶椀8型式	中世Ⅱb期	1 (1.9)以上×3 (6.0)	南北？	N 7 ° E	
SB 1 1	1次	L 4	2,	山茶椀5型式	中世Ⅱa期	1 (2.0)以上×3 (6.1)	南北？	N 7 ° E	
SB 1 2	1次	M 4	5,		中世Ⅱb期	2 (4.1)以上×3 (6.0)	東西？	N 6 ° E	
		L 4	3,	南伊勢系鍋2 a					
SB 1 3	1次	M 4	1, 3	土師器小皿	中世Ⅱa期	1 (1.7)×2 (3.9)	東西	N 8 ° E	
SB 1 4	1次					2 (3.6)以上×2 (3.8)	東西	N 3 ° E	
SA 1 5	1次	P 4	1,		不明	2 (5.0)	南北	N 4 ° E	
SB 1 6	1次					2 (4.3)×3 (6.2)	南北	N 6 ° E	
SB 1 7	1次	P 5	1,	土師質土器高台	中世Ⅰ期	3 (7.2)×1 (2.2)以上	東西	N 5 ° E	
SB 1 8	1次	Q 7	2,	山茶椀5型式	中世Ⅱa期	4 (9.6)×3 (7.2)	東西	N10 ° E	
SB 1 9	1次	Q 6	1,	灰釉末～山茶椀初期	中世Ⅰ期	4 (9.1)×2 (4.8)	東西	N10 ° E	
SA 2 0	1次	Q 7	1,	南伊勢系鍋1 b	中世Ⅱb期	3 (6.1)	東西	N 2 ° E	
SB 2 1	1次					4 (8.0)×1 (2.0)以上	東西	N 6 ° E	
SA 2 2	1次					2 (4.1)	東西	N12 ° E	
SA 2 3	1次	P 8	2,			2 (4.6)	東西	N13 ° E	
SB 2 4	1次	Q 8	Z 2	古瀬戸中期？壺片	中世Ⅲ期	2 (4.5)×2 (4.2)以上	南北	N13 ° E	
SB 4 6	2次	F 1	1,			1 (2.2)以上×2 (4.6)	東西？	N13 ° E	
SB 4 7	2次	F 4	1, 6, 7			2 (5.0)×2 (4.6)	東西	N10 ° E	
		E 4	3,						
SB 4 8	2次	F 5	1, 5, 7			2 (4.5)×3 (6.8)	南北	N13 ° E	
		G 5	1, 2,						
SB 4 9	2次	G 5	2, 3,		中世Ⅰa期	2 (4.5)×2 (4.2)	東西	N12 ° E	
		F 6	1,	土師質土器椀、陶器椀					
SB 5 0	2次	G 6	2,		平安後期	2 (3.8)×2 (4.5)	南北	N16 ° E	
		H 6	1,	緑釉陶器一括					
SB 5 1	2次	H 6	2,		奈良～平安	3 (6.0)×2 (4.1)	東西	N 3 ° E	
		I 6	1, 4						
SB 5 2	2次					3 (6.2)×2 (4.5)	東西	N10 ° E	
SA 5 3	2次	H 6	1,		平安後期？	2 (4.0)×3 (6.1)	南北？	N 6 ° E	
SB 5 4	2次	G 1 7	1,		平安前期？	3 (6.4)×2 (4.3)	東西	N 2 ° W	
		H 1 7	1, 3,						
		H 1 8	1, 2,						
		I 1 8	3,						
SB 5 5	2次					3 (5.9)×3 (5.6)	東西	N 1 ° W	



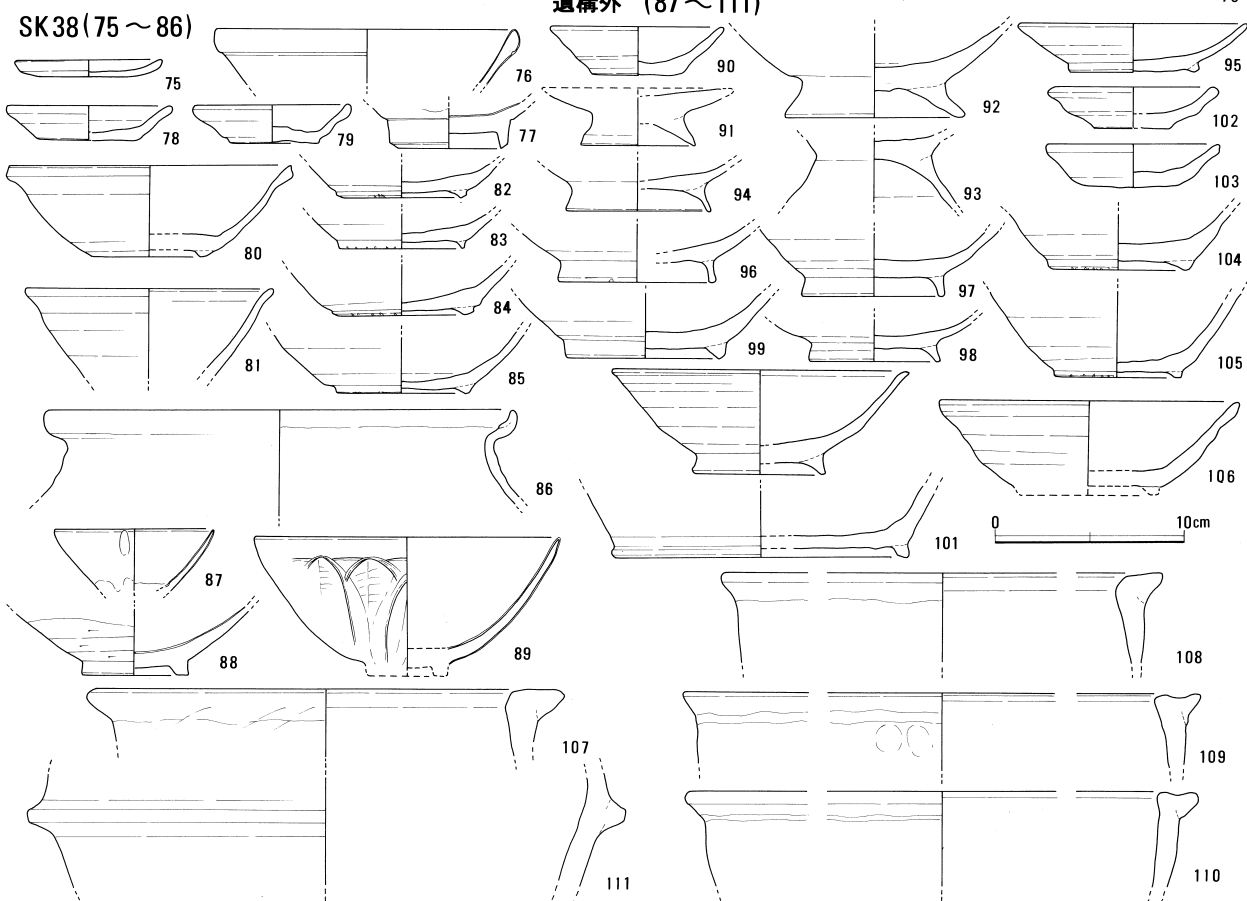
第VI-5図 加和良神社遺跡出土遺物 (1) (1~4は1:3、他は1:4)

SK 39 (56 ~ 74)



遺構外 (87 ~ 111)

SK 38 (75 ~ 86)



第VI-6図 加和良神社遺跡出土遺物(2)(1:4)

古墳時代後期頃ののものには、須恵器類がある（5～8）。奈良時代頃ののものには、須恵器や甕がある（9・10・14）。

中世では、土師器類・陶器類がある（11～13、15～26）。陶器類は13世紀中葉頃のものが中心である。

b 第2次調査区の出土遺物

27～30は、加和良3号墳およびS D 32から出土した土器類。27は田辺昭三氏による陶器編年のT K 10型式頃に併行するものと考えられるが、それ以外はやや古く、6世紀でも初頭頃のものと考えられる。

31～37は堅穴住居S H 35・36・37出土で、おおむね飛鳥・奈良時代頃。32は須恵器高杯で、堅穴住居からの出土は珍しい。38～40は遺構外および他時期の遺構に混入していたもの。38は須恵器器台で、加和良3号墳に伴っていたものか。39は天地逆で、丸底風となる甕かも知れない。40は須恵器播鉢。

41～55は平安時代後期に相当する遺物。50～52はS B 50を構成するピットから出土した緑釉陶器。土器では、ほかに灰釉陶器・土師器・土師質土器がある。53・107～110は清郷形甕で、当遺跡では比較的多く出土している。47は鉄製品で用途は不明。

56～74は土坑S K 39出土遺物。56・57のような白磁小皿も伴う。58～69の陶器碗類は、藤澤良祐氏による山茶碗編年の尾張型第5型式に相当する。69は碗を楕円形に整形し直し、硯としたもの。稀少品である。70は土師器皿で、中北勢地域の様相を持つ。71～73は南伊勢地域産の甕と鍋である。

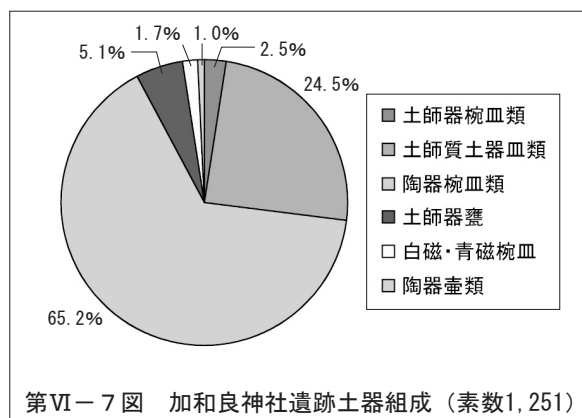
75～86は土坑S K 38出土遺物。78～85の陶器類は、藤澤山茶碗編年の尾張型第6型式に相当する。

87～111は遺構外出土遺物のうち、平安時代後期以降のものをまとめた。87～89は白磁・青磁。111は土師器羽釜と考えられるが、近隣では類例が無い。

なお、第2次調査区出土の平安時代後期以降の土器類については、第Ⅵ-3表に口縁部・底部残存度を基準とした計測をまとめた。

5 まとめと検討

当遺跡では、縄文時代後期以降の遺跡が確認された。なかでも、加和良古墳群が形成される古墳時代後期、堅穴住居から掘立柱建物へと変遷する飛鳥・奈良時代、掘立柱建物による集落が形成される平安



第Ⅵ-7図 加和良神社遺跡土器組成（素数1,251）

時代後期から中世前期の3時期が中心である。

加和良古墳群は長法寺古墳群と一連の古墳群と考えられ、両者は一体で把握する必要がある。加和良3号墳は周溝のみが確認されたが、埴輪を有していないことは大きな特徴と考えることもできる。

飛鳥・奈良時代の集落は、隣接する桑名垣内遺跡と一体で考えるべきであろう。桑名垣内遺跡も同様であるが、遺構の多さに比べてこの時期の出土遺物は極端に少ない。

平安時代後期から中世前期にかけては、緑釉陶器がまとまって出土したことや、陶器硯の存在が特筆できる。何らかの有力者の存在が想定される。また、平安時代後期には清郷形甕が煮沸用土器の主体的器種になっている状況が観察できることも興味深い。

この時期の土器組成では、陶器碗類が突出して多いことが特徴である（第Ⅵ-7図）。これは、同じ時期の北勢地域の状況に近く、南勢地域の状況とは異なる⁽⁴⁾。中ノ川流域が北勢地域の一角であることをデータ上で示せたものとする。（伊藤）

< 註 >

- (1)中世の時期区分は、伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」（『関東・東海における中世土器（煮炊具）の最近における研究成果』静岡大学 2005年）の、南伊勢地域の区分に拠る。
- (2)田辺昭三『須恵器大成』（角川書店 1981年）
- (3)藤澤良祐氏による山茶碗編年は、次の文献を主に参照した。藤澤「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年）
- (4)伊藤裕偉「第133次調査」（『史跡斎宮跡平成13年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2003年）

第Ⅵ－３表 加和良神社遺跡（第２次）出土古代末～中世土器計測集計

グリッド	遺構他	土 師 器						土師質土器(ロクロ土師器)						緑釉陶器・灰釉陶器・山茶碗										青 磁		白 磁			陶器	その他
		鍋甕 口縁	清郷 口縁	羽釜 口縁	碗 底	皿 口縁	小皿 口縁	碗 底部	皿 口縁	小皿 口縁	碗 底部	皿 口縁	小皿 口縁	緑釉碗 口縁	灰釉碗 口縁	灰釉小碗・皿 口縁	山茶碗 口縁	山皿 口縁	鉢鉢 口縁	碗 口縁	碗 口縁	小皿 口縁	蓋 口縁	青 磁 口縁	白 磁 口縁	白 磁 口縁	白 磁 口縁	白 磁 口縁		
E5	ピット*							12						1	12															
E5	包含層																													
F1	包含層*													1			1													
F2	包含層*	1							12	12	12							16												
F3	包含層*		1					12	1	4	13			1				7												
F4	ピット*		1											2																
F4	包含層*							2		12				1																
F5	ピット*	1						10		6				1	2		2	4												
F5	包含層		1							4																			1	
F5	包含層*	3						19		25				4	2			1	2	9	2									
F6	SB48							1	12					1																
F6	ピット*													1	1															
F7	包含層*																	1												
F20	SD44*																	4												
G2	ピット*														3															
G3	ピット*													1																
G3	包含層*													1																
G5	ピット*		1							4	21			1	3			3												
G5	包含層													2	4															
G6	ピット*													2																
G6	包含層															2	12		1	12										
G6	包含層		1											4	1	2											2			
G11	SK38	2					6											4	45	16	16						2			
G11	SK38*	2				1												24	124	21	2					1				3
G22	包含層*							2										4	3	3										
H5	ピット*													2																
H6	pit1													1	12															
H6	包含層*		1					10	3	11							1													
H9	包含層*																	12												
H12	SK45*																	2												
H12	包含層																			2										
H13	包含層																2	2												
H13	包含層*																1		1	7										
H14	包含層							5																						
H14	包含層*	1								12								9		6										
H18	包含層			2																										
H18	包含層*													1																
I5	ピット*													3	1															
I5	包含層		1																											
I5	包含層*							12						2	2			2												
I6	ピット*									12				1	1	2														
I6	包含層		1					11						1	1	2														
I6	包含層*									7																				
I9	SD41*													3	3															4
I10	SD42		1														2	19												
I10	SD42*		1											6				6												
I11	包含層*																4	60		5										3
I12	包含層																3	13	3	6										2
I13	包含層*																	12	12											
I13	包含層																1	2									1			
I14	包含層																	9												
I14	包含層*	1																2												
I15	SK40				6										8															
I15	SK40*																	3												
I16	包含層																	12	5	12										
I16	包含層*																4		4								1			
I17	ピット*																										1			
I18	pit1							12	4	12				8		5														
I18	pit1*							4		12				1	1															
I11	包含層																											6		
I11	包含層*																2	2	1											
I12	包含層*																		12											
I13	SK39	23				4											23	66	15	24										11
I13	SK39*	17				6	8										26	125	1		1					1				
I16	包含層*			1														21		1										
I17	ピット*													1																
その他	包含層							6		3				9		3	2	16												
合 計		51	10	3	6	11	14	28	2	117	11	162	1	12	44	67	11	19	101	589	64	141	10	2	5	8	1	11	12	
採用数値		51	10	3	6	11	14	28	117	162		12		67		19		589		141		10	2		8		11	12		

比率①	数値	10	3	6	28	117	162	12	67	19	424
古代末	比率	2.4%	0.7%	1.4%	6.6%	27.6%	38.2%	2.8%	15.8%	4.5%	

比率②	数値	51	11	14	589	141	10	2	8	11	12	849
中世	比率	6.0%	1.3%	1.6%	69.4%	16.6%	1.2%	0.2%	0.9%	1.3%	1.4%	
前期												

比率③	数値	51	11	14	28	117	162	589	141	10	2	8	11	12	1156
中世	比率	4.4%	1.0%	1.2%	2.4%	10.1%	14.0%	51.0%	12.2%	0.9%	0.2%	0.7%	1.0%	1.0%	
前期															

< 凡例 >

* 数値は、計測部位の 1/12 を 1 として集計している。

* 「遺構他」の項に「*」があるものは、実測図を記載していないものである。

* 「採用数値」には、2 箇所以上の計測部位があるもののうち、数値の高い方を採用している。

Ⅶ 加和良 1・2 号墳 ～馬具と直弧文の後期古墳～

1 調査の経過

加和良 1・2 号墳は、鈴鹿市三宅町字西条に所在する遺跡である。県営圃場整備事業（合川・下之庄地区）に伴い、昭和63年度に調査がなされた。発掘調査は昭和63年 7 月 6 日から同年 9 月 22 日にかけて実施された。最終調査面積は 600m² である。

2 調査区の立地と古墳群の状況

加和良 1・2 号墳は、加和良神社遺跡と同一低丘陵上に位置する。調査前に明瞭な墳丘が確認できたのがこの 2 基である。第Ⅶ章で見たとおり、加和良神社遺跡第 2 次調査で確認された、墳丘を喪失していた古墳を加和良 3 号墳としている。現在では 3 基の古墳群として認識しているが、墳丘を喪失した未確認古墳が他に存在している可能性は高い。

3 加和良 1 号墳

a 墳丘

加和良 1 号墳は、低丘陵の頂部に形成された古墳である。調査前の状況で直径約 16m の円墳と想定され、調査の結果、直径約 16m、墳丘高約 2 m の円墳と確認された。墳丘には葺石・円筒埴輪などの構造物は確認されなかった。

b 埋葬施設

埋葬施設は 4 基確認されたが、別にもう 1 基存在していた可能性もある。4 基はいずれも東西方向を主軸としている。

埋葬施設 1 長さ約 5.3m、幅約 1.3m の長方形の墓壇内に、長さ約 4.5m、幅約 80cm の割竹形木棺を納める。棺は、墓壇内に安置後、周囲を黄褐色系粘土で固めている。粘土の検出状況が示す棺の形態は、両小口が内側へ窪むものである。棺の幅は東側の方が広いため、東枕で埋葬されたものと考えられる。

副葬品は、棺内・墓壇内棺外・墓壇上面の 3 ヶ所に分かれる。棺内からは、刀子 5 本が見られた。こ

れらは、棺の東側に寄っている。最東部には 2 本の刀子が見られ、うち 1 本には鹿角装把部に直弧文が施されたものである。

墓壇内棺外の副葬品は、東側に集中させている。棺を固めた粘土が周囲に見られることから、棺小口の凹みに埋納されたと考えられる。棺外副葬品には、馬具 1 揃、須恵器蓋杯 7 組、須恵器高杯 1 個、須恵器提瓶 1 個、土師器ミニチュア台付甕 2 個が見られる。馬具は、賽の目状に置かれた 4 個の須恵器蓋杯の中央下から出土している。

墓壇上面の副葬品には、須恵器蓋杯がある。この蓋杯は 2 組であるが、杯蓋・一組の蓋杯・杯身という状態で 3 者が並べ置かれていた。

なお、埋葬施設 1 で用いられた蓋杯は、墓壇内の 5 組が陶器系の精緻なもの、墓壇内の 2 組と墓壇上面の 2 組が在地産のものである。

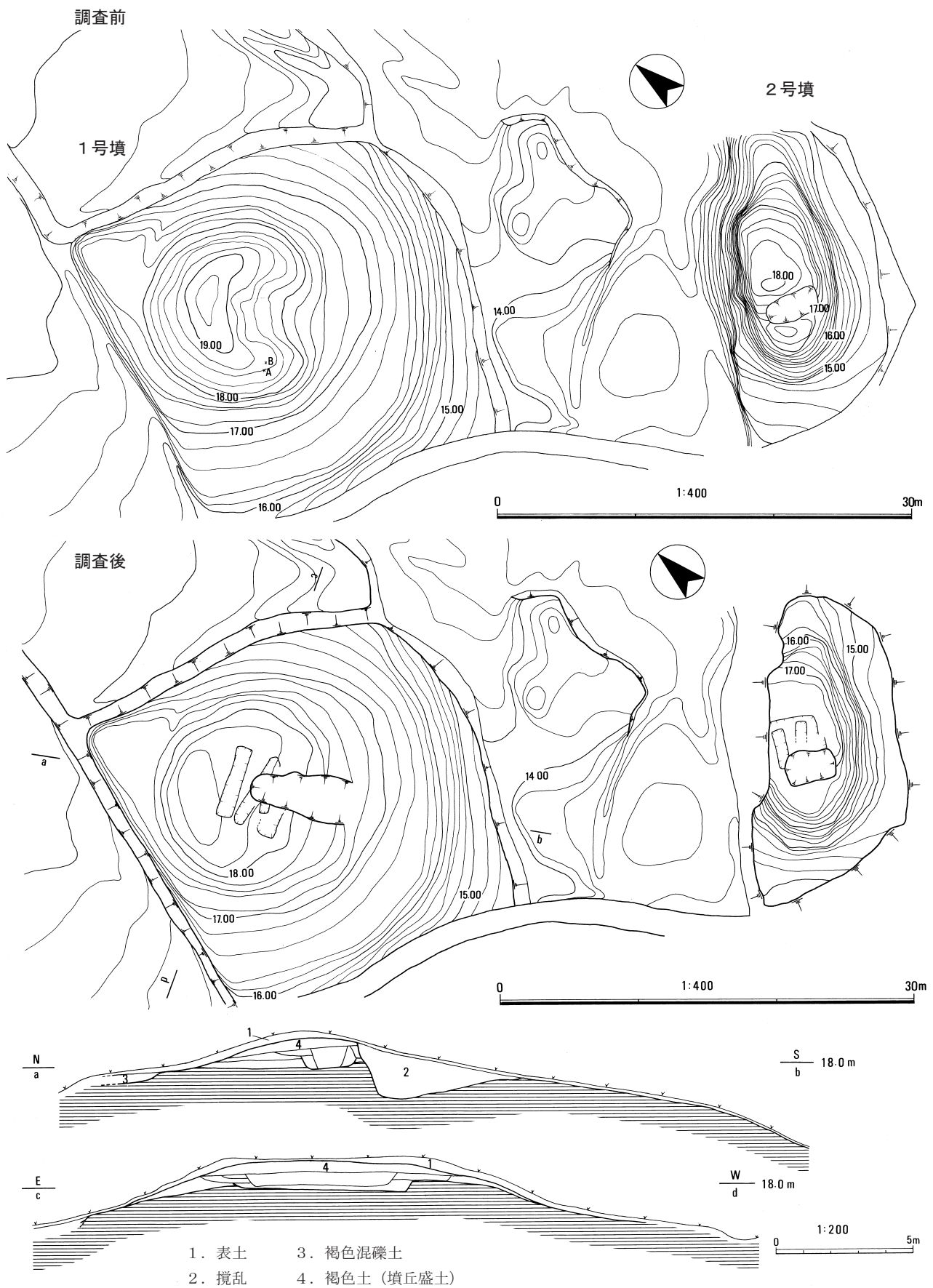
埋葬施設 2 埋葬施設 1 の南に隣接している。中央部が攪乱・破壊されていることもあり、墓壇・棺ともに明確ではないが、墓壇は長さ約 5.5m、幅約 1.3m で、棺は長さ約 4.3m、幅約 70cm と考えられる。墓壇内には粘土が見られるため、埋葬施設 1 と同様、棺の周囲を粘土で固めていたものと思われる。

副葬品は、棺外墓壇内の西部東寄りに置かれた一群の鉄鏃がある。

埋葬施設 3 埋葬施設 2 の南に隣接している。この埋葬施設も攪乱が激しく、墓壇・棺ともに明確ではないが、墓壇は長さ 2.5m 以上、幅約 1.4m で、棺は長さ 1.8m 以上、幅約 90cm と考えられる。墓壇内には粘土が見られるため、埋葬施設 1 と同様、棺の周囲を粘土で固めていたものと思われる。

副葬品には、棺内のものとして鉄刀 1 本、刀子 6 本、玉類がある。また、鉄鏃も数点出土している。玉類は、鉄刀の周囲から出土している。鉄鏃と刀子の出土位置は明確ではない。

埋葬施設 4 埋葬施設 2・3 を破壊して構築されている、長さ 1.2m 以上、幅約 70cm の小形の墓壇であ



第Ⅶ－1図 加和良1・2号墳墳丘測量図および断面図

る。墓壇内からは粘土塊が出土しているため、埋葬施設として取り扱っておく。出土遺物は無い。

埋葬施設 3 南西部の須恵器群 埋葬施設 3 の南西墓壇外から、須恵器がまとまって出土している。この須恵器は埋葬施設 3 に伴う一群である可能性もあるが、状況から見て、別の埋葬施設がこの西部に存在していた可能性の方が高いであろう。須恵器は、身と蓋がセットになった状態のものが 4 組、杯身が 5 点、杯蓋が 4 点あるため、全体として 9 組の蓋杯であった可能性が高い。

4 加和良 2 号墳

a 墳丘

加和良 2 号墳は、1 号墳と同一丘陵尾根で、それよりもやや低い位置に隣接して形成された古墳である。調査以前に大きく破壊されており、調査時には東西約 8 m、南北約 13 m の範囲が残存していたに過ぎず、墳丘規模は不明である。墳丘には葺石・円筒埴輪などの構造物は確認されなかった。

b 埋葬施設

埋葬施設は 2 基確認された。いずれも東西方向を主軸としている。この 2 基の埋葬施設は、調査段階では墓壇を共有するものと認識されている。

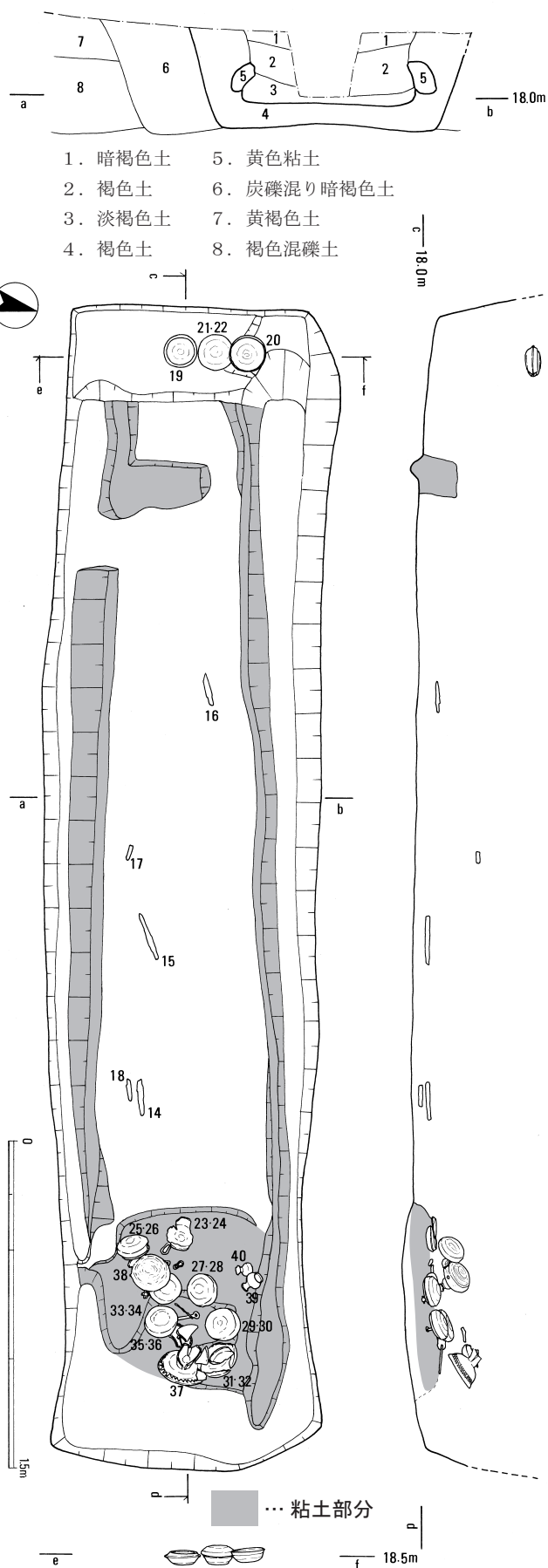
埋葬施設 1 長さ 1.2 m 以上、幅約 90 cm の棺痕跡が検出されている。棺の主軸は東西方向である。棺内の東寄りに、須恵器杯蓋が 2 点出土している。

埋葬施設 2 長さ約 2.8 m、幅約 80 cm の棺痕跡が検出されている。棺の主軸は東西方向である。棺内から、玉類が出土しているが、その他の副葬品は見られない。

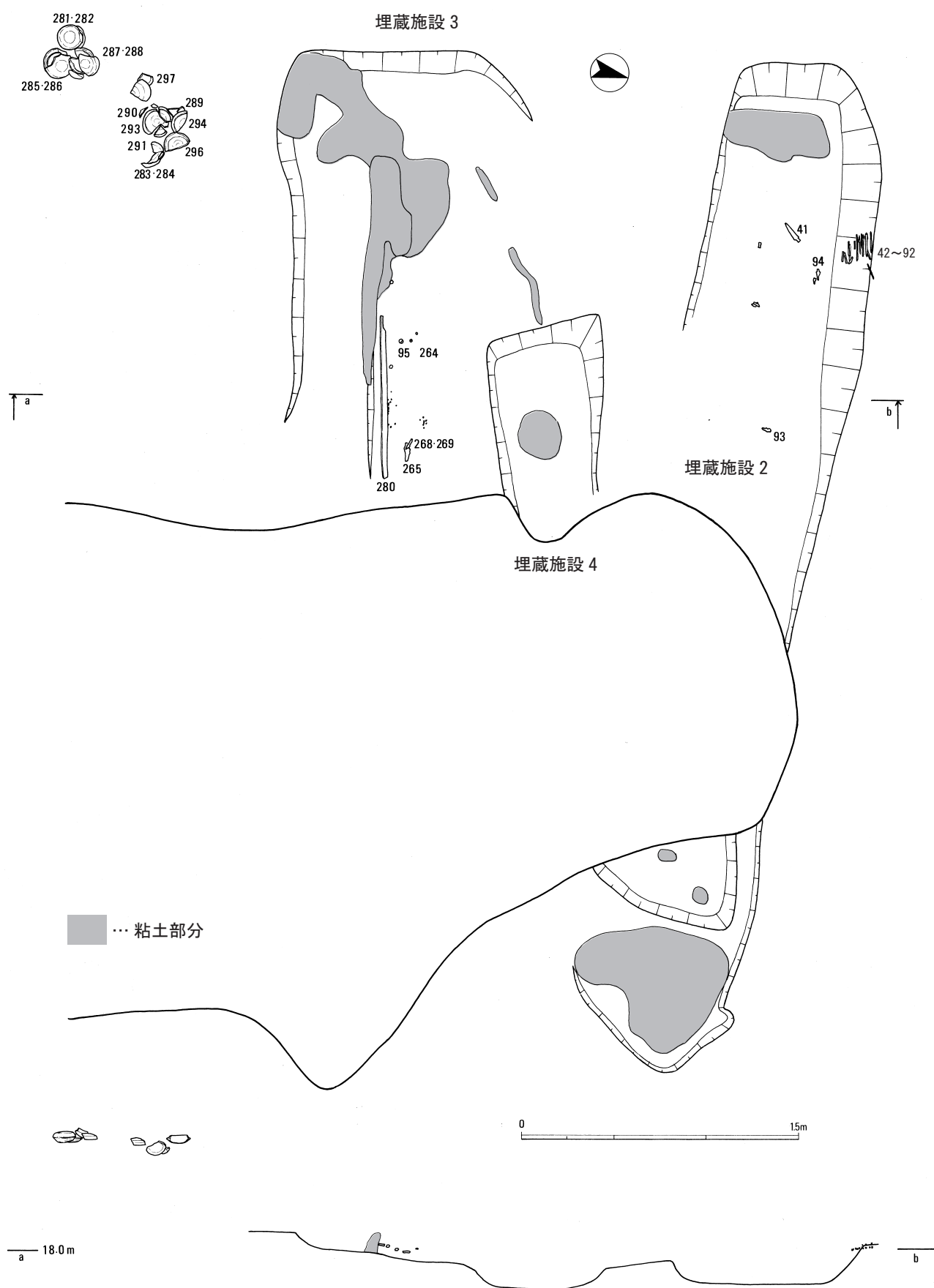
5 出土した遺物

a 1 号墳埋葬施設 1 出土遺物

馬具 (1 ~ 13) 1 ~ 13 は、墓壇内棺外から出土した馬具一式である。1 ~ 9 は「鉄製楕円形鏡板付轡」とされるもの。1 ~ 5 は左右の鏡板で、本体は一枚板で作られている。表面に金銅張りや漆の塗布は見られない。外縁部には、タガネによる点刻が裏面からなされ、表面には地金が円形浮文のように浮かび上がっている。この点刻は鏡板中央横方向にも施されている。



第Ⅶ-2図 加和良 1 号墳埋葬施設 1 実測図 (1 : 30)



第Ⅶ-3図 加和良1号墳埋葬施設2～4 平面・立面図（1：30）

2・4は1・5の鏡板の立間に開けられた上部の方形孔に接続される金具一式。立間には「の」の字状に曲げられた遊環が通り、そこに6連の兵庫鎖が連結して鉤金具に至る。2は1の鏡板に、4は5の鏡板に接続する。鉤金具の残りは悪いが、4では笠鉾3ヶ所と2個1対の環状留金具が2ヶ所見られる。3は銜。銜先環は欠損しているが、1・5の鏡板の銜留金具に直接連結されていたと考えられる。

6・7は引手。それぞれが左右に付くと考えられる。8・9は引手壺。引手と引手壺の間には遊環状のものがあつたかも知れないが、明確ではない。

10・11は鉸具、12・13は辻金具。いずれも鉤金具から繋がるベルトと一体となる部品であろう。

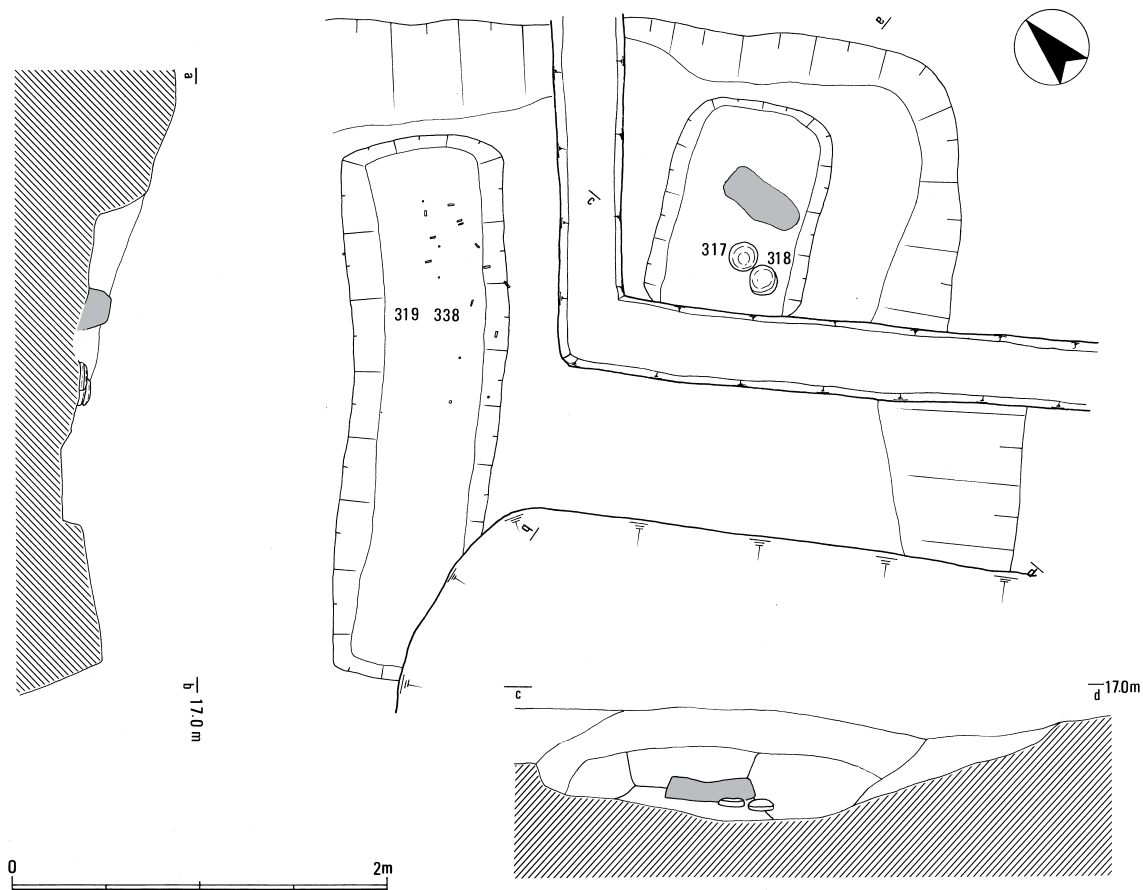
刀子類 (14~18) 刀子類は、いずれも把部を鹿角装とするものである。14は最も大形のもので、把部には直弧文があしらわれ、全体をベンガラで赤彩されている。鞘は木製と考えられ、外面にはその圧痕が残る。15・16にも鹿角製把部が確認でき、17は鞘にも鹿角が用いられている。18は茎部に繊維状のもので巻き上げた痕跡が残る。

土器類 (19~40) 須恵器・土師器がある。19~22は墓壇上面に置かれていた一群。21・22はセットで出土したもので、19・20は開けられた状態であったもの。この4点は、墓壇内棺外から出土した23~26の4点と同じ調整手法を持ち、近隣の地域窯産と考えられる。それに対し、27~36は精緻で丁寧な作りのものであり、陶邑窯産かそれと直接関係した窯から持ち込まれたものと考えられる。37は須恵器高杯、38は須恵器提瓶である。39・40は外面がベンガラで赤彩された土師器高杯。これらの土器類は、田辺昭三氏による陶邑編年（以下、「田辺編年」⁽¹⁾）のMT15型式併行か、あるいはTK10型式でも古い頃に併行するものと考えられる。

b 1号墳埋葬施設 2 出土遺物

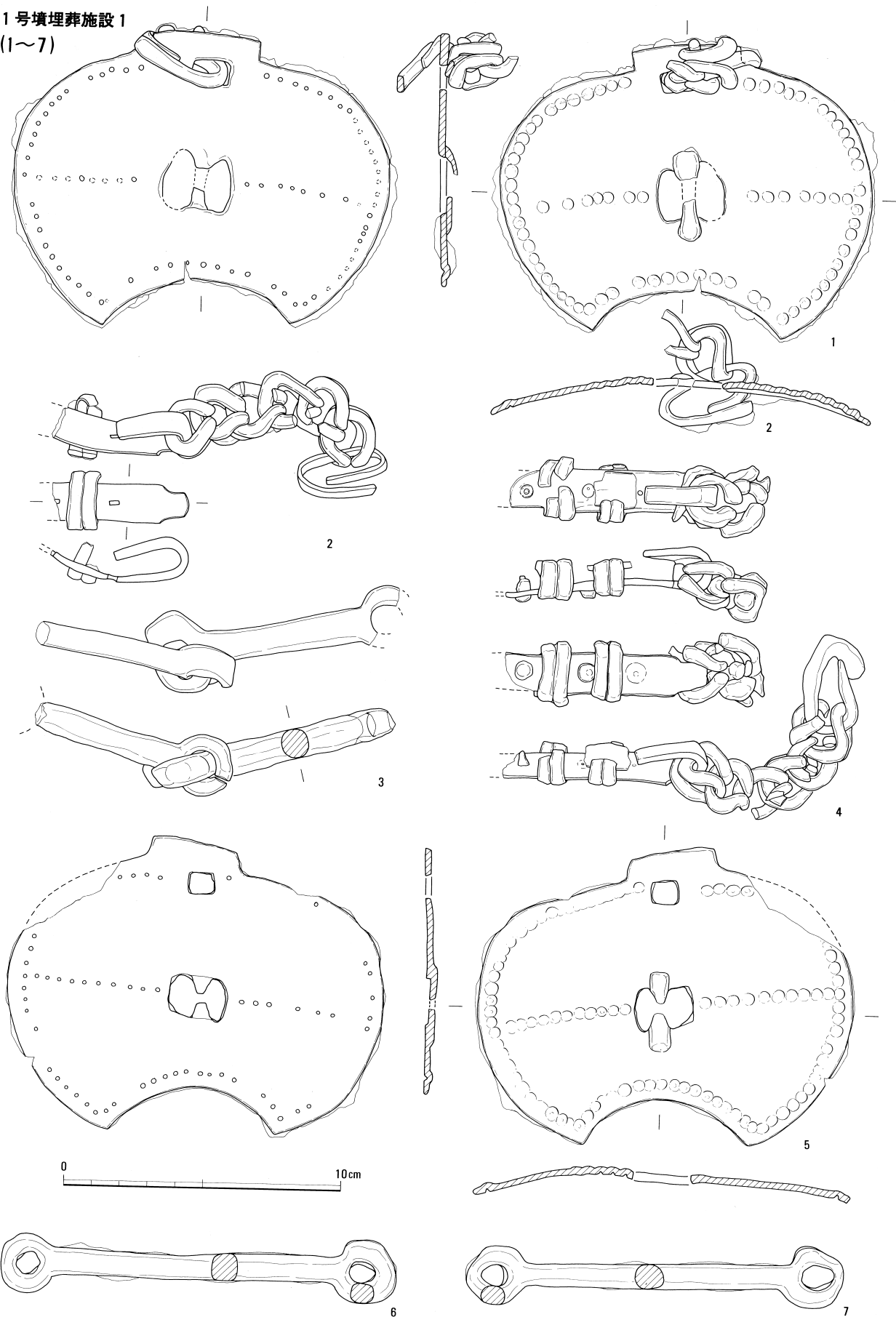
刀子 (41・42) 41は小形の刀子。把部は鹿角製である。42は刀子の一部と考えられるもの。

鉄鏃 (43~94) 52本分を図示したが、実際にはもう数本存在する可能性がある。多くは刃部が柳葉ないしは長三角形を呈する長頸鏃で、2本のみ平造のものがある。刃部は片丸造を中心に、一部鑄造りが



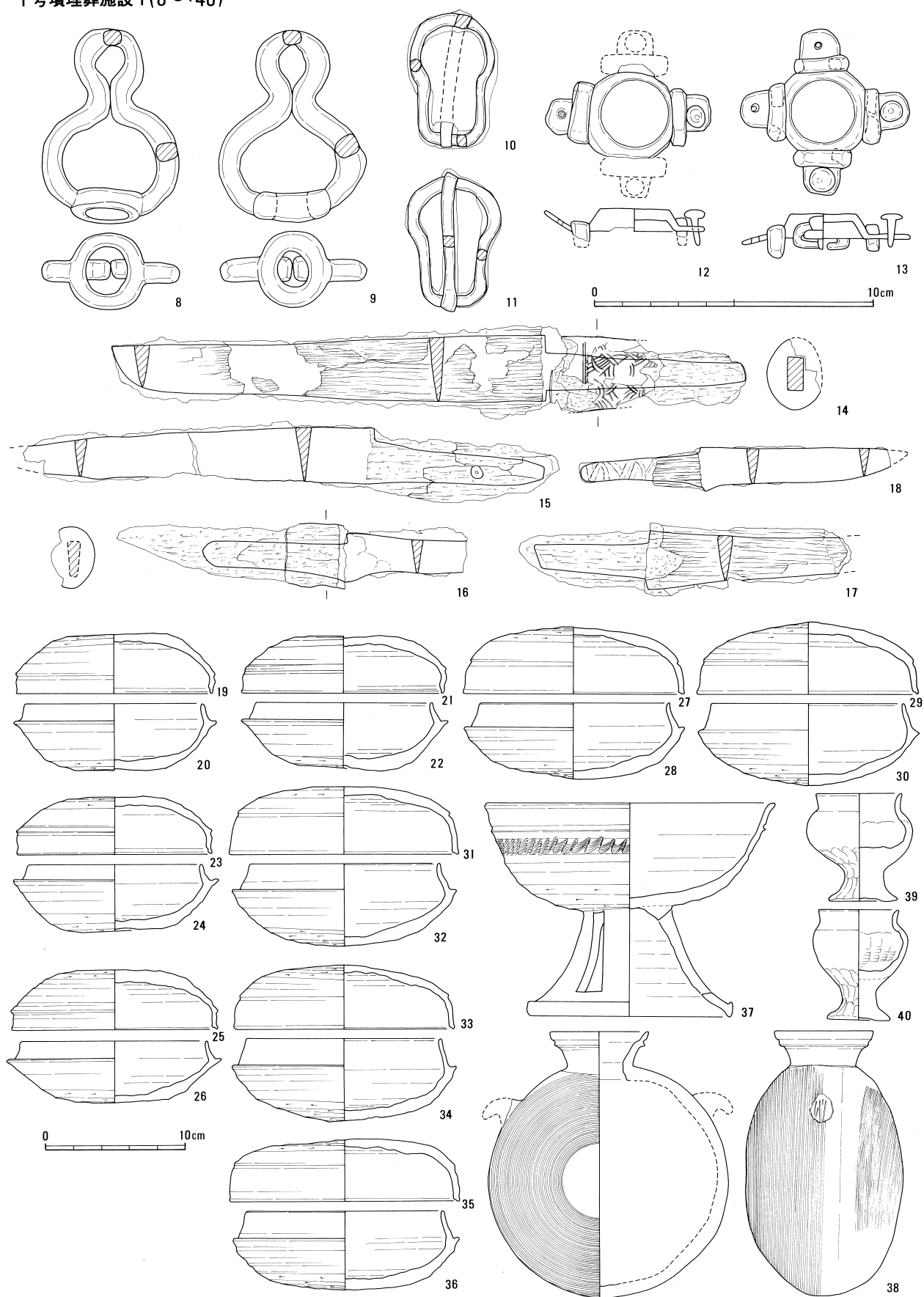
第七-4図 加和良2号墳埋葬施設1・2 実測図 (1:40)

1号墳埋葬施設1
(1~7)



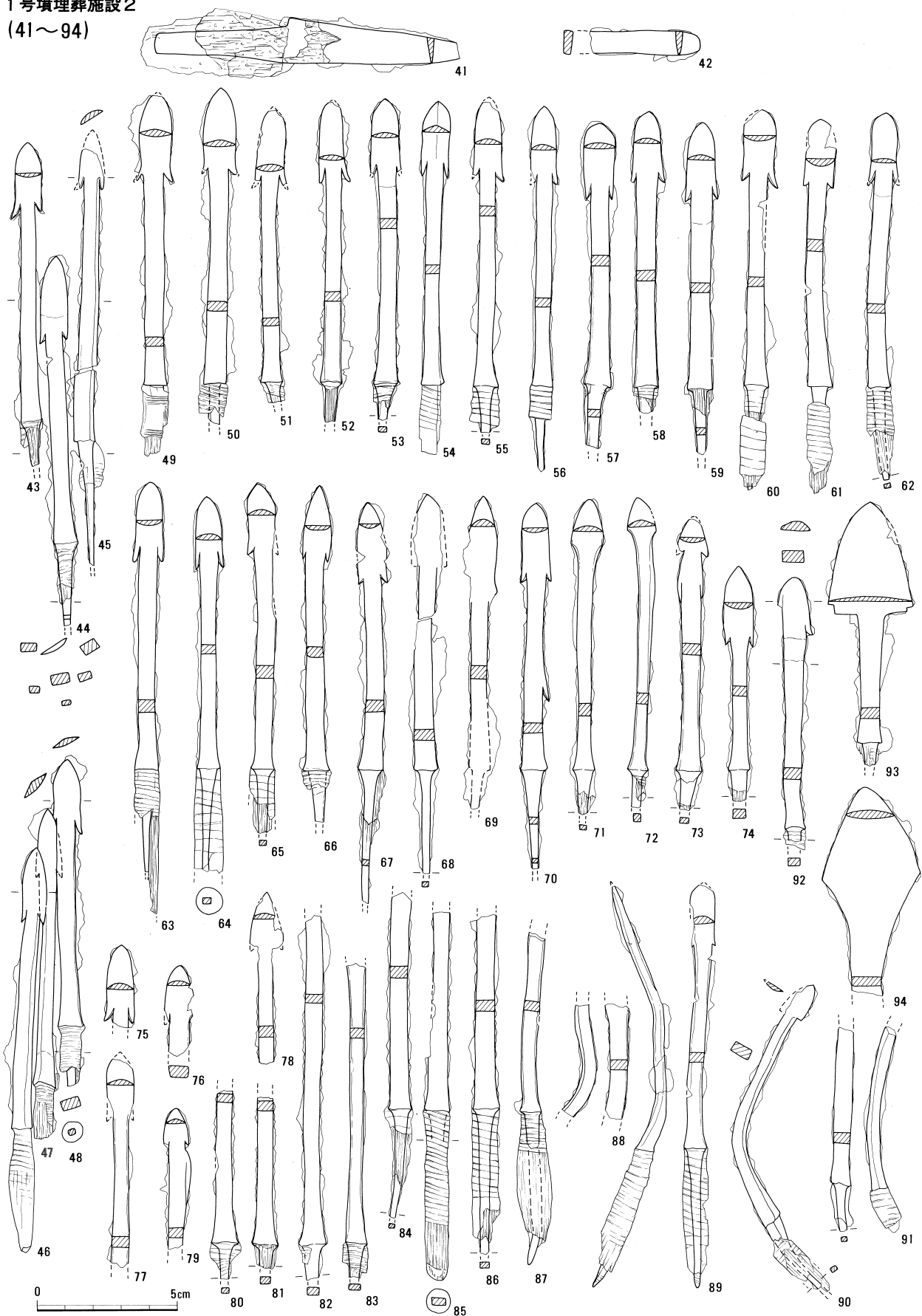
第Ⅶ-5図 加和良1号墳出土遺物(1)馬具類(1:2)

1号墳埋葬施設1(8～40)



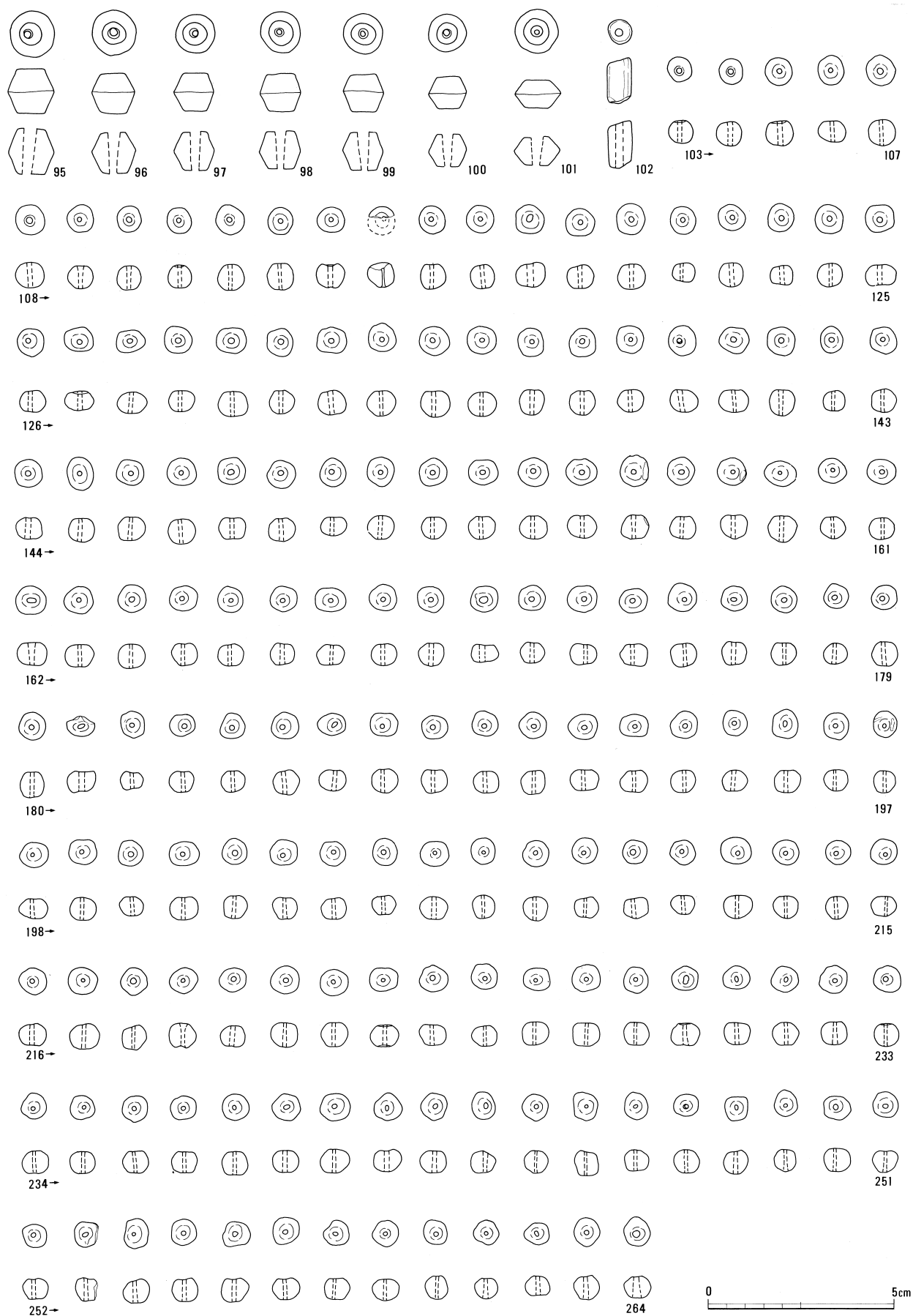
第Ⅶ-6図 加和良1号墳出土遺物(2)馬具・小刀・土器(8～17は1:2, 他は1:4)

1号墳埋葬施設2
(41~94)



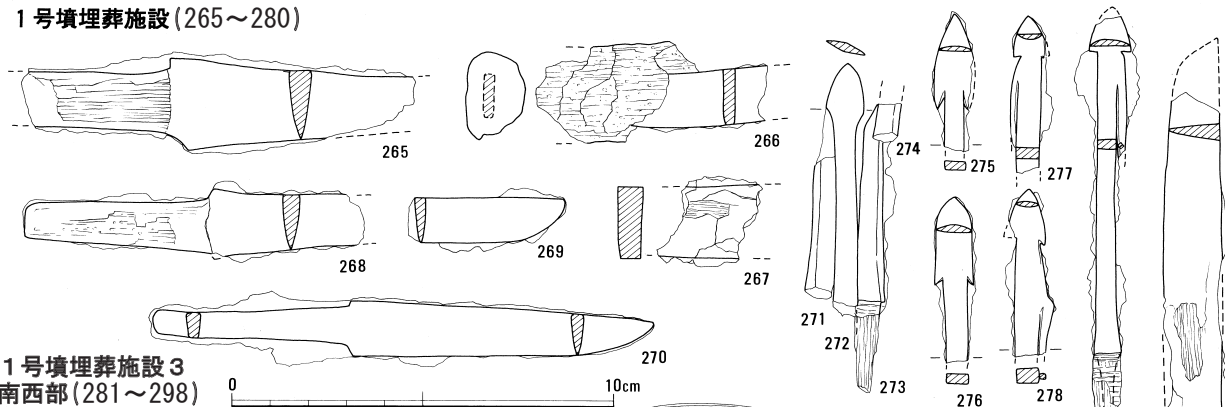
第Ⅶ-7図 加和良1号墳出土遺物(3) 鉄鎌ほか (1:2)

1号墳埋葬施設3(95~264)

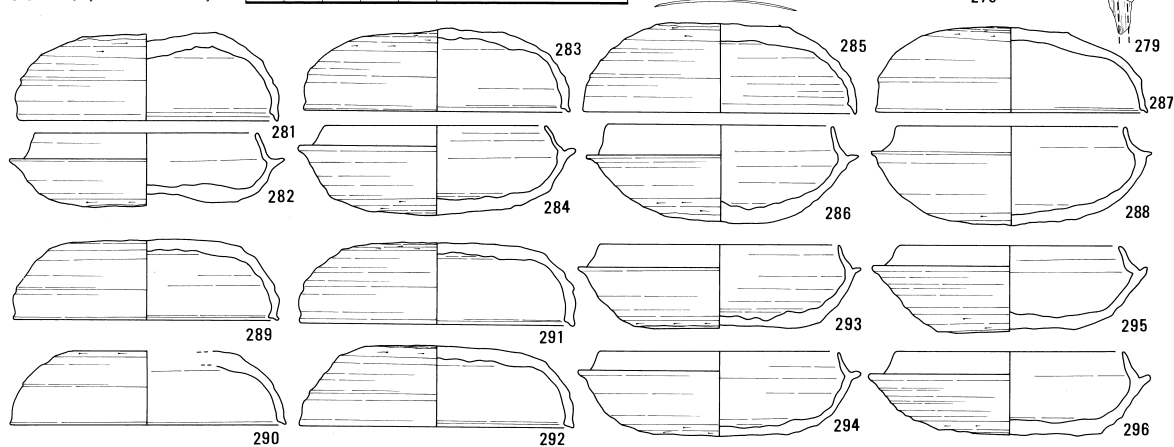


第Ⅶ-8図 加和良1号墳出土遺物(4)玉類(2:3)

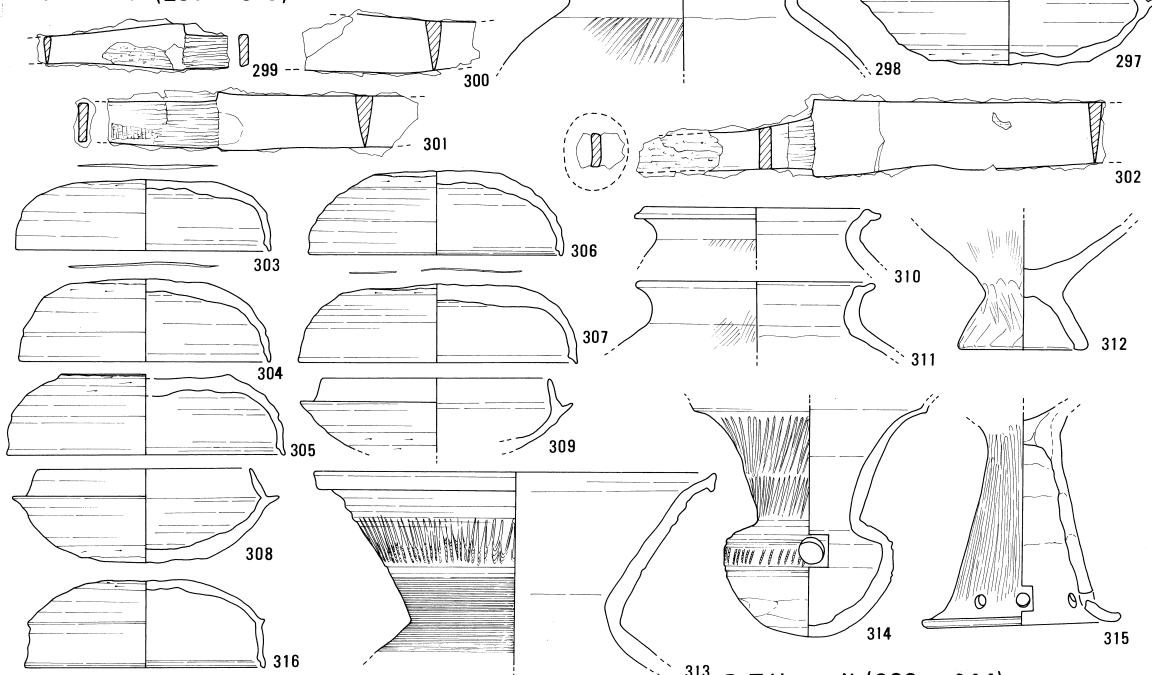
1号墳埋葬施設(265~280)



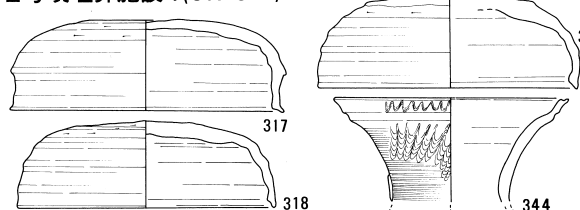
1号墳埋葬施設3
南西部(281~298)



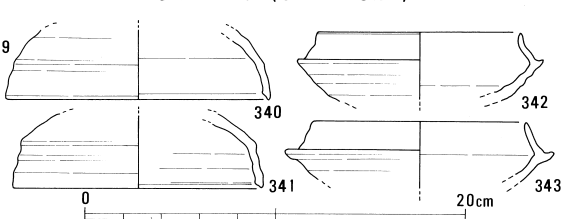
1号墳その他(299~316)



2号墳埋葬施設1(317~318)



2号墳その他(339~344)



混じる。長頸鏃には、頸部に逆刺を有するもの（70・73）もある。また、副葬段階で意図的に折り曲げたと思われるもの（88～91）も見られる。

c 1号墳埋葬施設3出土遺物

刀子類（265～270） 刀子は5点分あるが、破損したものが多く、266は把部が鹿角製である。

鉄鏃（270～279） いずれも長頸鏃で、破損した状態のものが多い。277・278・279は、頸部に逆刺を有するものである。

刀（280） 平造の直刀で、切先と茎尻を欠損する。残存長は85.2cmである。（伊藤）

算盤玉（95～101） いわゆる「切子玉」にみられる截頭角錐の稜は認めがたく、截頭円錐形の底面を合わせた形状から、これらを算盤玉としたい。ただし、截頭円錐形とは言いながらも、水晶の六方晶系結晶体の稜がかろうじて認められ、この稜線を除くための横方向の研磨痕跡が明瞭に観察できることから、研磨工程で胴部の縦方向の稜線を明瞭に残しながら、六角錐の稜線を除いた算盤玉を製作したものである。結晶体の基部から算盤玉として截頭円錐形に製作するのではなく、六方晶体へ成長した六角錐の結晶体部分を玉材として利用したものと思われ、7個体の透明度は101の1点を除き極めて高い。101のみは結晶体基部に近い、透明度の低い部分を材として使用したものとみられる。孔内と節理面の亀裂には赤色顔料が付着・浸透したものが観察できる。このことは、算盤玉が一類として有機質製繊維で連ねられていたことが推測でき、この繊維に顔料が染みて孔内に浸透・沈着したものであろう。また、98には水晶結晶化の過程で歪みを生じた、いわゆる「虹入り水晶」の特徴を観察できる。

さらに、水晶の比重を簡易計測によって算出したところ、7点中6点までが3.0gを超える数値を示した。孔内に若干の泥土が付着することを考慮しても、比重標準値2.66gからするとやや大きい値を示した。

管玉（102） 102はガラス製管玉である。極めて特徴的な失透橙色をしており、1点しか出土していない。蛍光X線分析により、発色主成分は酸化銅であることがわかった。酸化アルミニウム値が高く、ソーダ石灰ガラスと思われる。側面には気泡が横方向に

筋状に認められることから、引き伸ばし技法による管切で製作し、端部の角を取るために加熱処理をしたために、孔面は不整形になっている。孔内には赤色顔料の付着が認められることから、有機質の繊維により類として連ねられた玉孔内に、顔料が繊維を伝って染み込み沈着したものである。

土製練玉（103～264） 土製練玉は162個体ある。いずれも黒褐色で、直刀付近から出土する。側面形状は臼状に仕上げるものが多いが、数点は断面形状が方形に近い個体や、孔面に面を持たない丸玉に穿孔したような個体も認められる。（大川）

d 1号墳埋葬施設3南西部出土遺物

281～298は、埋葬施設3の墓外南西部からまとまって出土した土器類である。須恵器の蓋杯類と土師器甕がある。須恵器は粗雑な作りのもので、埋葬施設1出土土器よりもやや小振りのものが多い。田辺編年のTK10型式に併行するものであろう。298は台付甕である

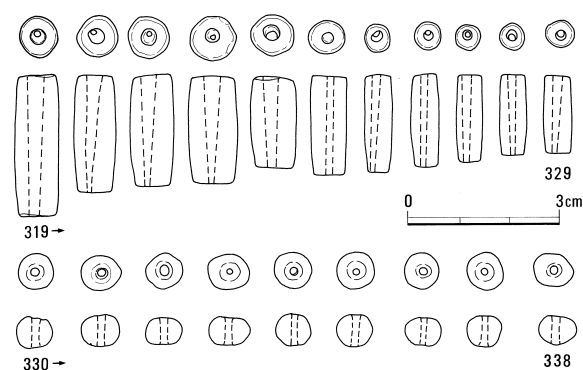
e 1号墳出土のその他の遺物

299～316は、調査中に出土したもので、どの埋葬施設に帰属するものか分からないものである。299～302は刀子。302には鹿角装の把部が付く。303～309は須恵器蓋杯。時期的には田辺編年のTK10型式からTK43型式にかけてのものがある。310～311は土師器台付甕で、概ね前述の須恵器に併行する時期のもの。313は須恵器壺・314は須恵器甕。315は弥生時代後期に相当する高杯の脚部である。315は須恵器杯蓋で、田辺編年のTK23型式に相当する。

f 2号墳埋葬施設1出土遺物

317・318は埋葬施設1出土で、ともに須恵器杯蓋。

2号墳埋葬施設2(95～264)



第Ⅶ-10図 加和良2号墳出土遺物 玉類（2：3）

田辺編年のT K 10型式からT K 43型式にかけてのものである。(伊藤)

f 2号墳埋葬施設2出土遺物

管玉 (319～329) いずれも碧玉製である。形状は、やや中膨らみのものもあるが、基本的に柱状で、側面・孔面とも丁寧に研磨されている。色調は、濃緑と灰緑のものがあ、濃緑のものには縞がみられるものもある。穿孔は片面穿孔であり、325には穿孔に失敗し対面に達しない穿孔痕跡が見られる。この管玉の孔内にも赤色顔料が認められ、有機質の繊維により一縷として有機質製繊維で連ねられていたことが推測でき、この繊維に浸透した顔料が孔内に沈着したものと考えられる。

土製練玉 (330～338) 9個体が出土している。1号墳埋葬施設3と同じく、側面の形状が臼状で孔面に面を持つもの、面を持たない丸玉状のものと、断面形状が方形に近い個体がみられる。(大川)

g 2号墳出土のその他の遺物

339～344は2号墳調査中に出土したもので、いずれも須恵器である。344は甕か。田辺編年のMT 85型式に併行する。

5 調査のまとめ

加和良1・2号墳は、発掘調査の結果、6世紀前半から後葉にかけて形成された古墳であることが判明した。とくに1号墳では4回以上の追葬が確認された。

1号墳で確認された埋葬施設のなかで、最も注目できるのは埋葬施設1である。ここからは、楕円形鏡板を伴う轡と直弧文の施された鹿角装刀子が出土している。楕円形鏡板は、三重県内では鎌切3号墳(津市)、奥小波田1号墳について3例目であり、全国でも70例ほどの出土が知られている。⁽⁴⁾中ノ川流域で馬具の出土ははじめてであり、貴重な事例といえる。ただし、本書で報告する長法寺1号墳や石薬師古墳群からは、精緻な馬具の表現が見られる埴輪が出土しているし、宮ノ前遺跡からは6世紀前葉頃の馬の下顎骨が出土している。今回報告する馬具を含め、古墳時代後期の鈴鹿川・中ノ川流域では、馬がかなり普及しており、重視されていたと考えられるのではないだろうか。

また、馬具を副葬する埋葬施設1が、武器類を一切伴わないことと、直弧文を施した鹿角装刀子を伴っていることは注目すべき要素である。埋葬施設2・3からは武具類が出土しているため、古墳全体としてはとくに違和感はないものの、被葬者単位での役割分担や性質の違いを想起させる状況である。

須恵器の状況も興味深い。加和良1号墳では、当地の徳居産と考えられるものと、陶邑(大阪府)産ないしはそれに近いものとの2種類が見られ、それぞれが使い分けされている状況が確認できた。須恵器生産地近隣でこのような現象の見られる要因については、今後注目して分析していく必要がある。

(伊藤)

< 註 >

- (1)田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981年)
- (2)蛍光X線分析は、奈良大学文化財学科保存科学研究室において実施した。このときの分析条件は以下のとおりで、簡易定量分析によるデータにもとづく。

化学組織 (wt%)

SiO ₂	二酸化ケイ素	58.98
Al ₂ O ₃	酸化アルミニウム	14.03
Fe ₂ O ₃	酸化鉄	5.60
TiO ₂	酸化チタン	1.25
CaO	酸化カルシウム	4.23
MgO	酸化マグネシウム	0.87
Na ₂ O	酸化ナトリウム	1.40
K ₂ O	酸化カリウム	2.15
PbO	酸化鉛	0.13
MnO	酸化マンガン	0.94
CuO	酸化銅	10.42
		100.00

使用機器 エネルギー分散型蛍光X線分析装置
EDAX EAGLE II-XXL(NR) EDAX INC.
分析条件 X線管球：クロム
管電圧：25kV
放射領域：100μm
測定時間：200秒

- (3)山中由紀子「三重県内出土の古墳時代馬具集成」(『三重県史研究』20 2005年)
- (4)白澤崇「鉄製楕円形鏡板付轡とその馬装」(『石ノ形古墳』静岡県袋井市教育委員会 1999年)
- (5)三重県埋蔵文化財センター『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告』(2000年)
- (6)三重県埋蔵文化財センター『河曲の遺跡』(2004年)

第七－ 1 表 加和良 1号墳出土鉄製品観察表

(埋葬施設1) 刀剣類											
No.	遺物名	登録No.	取上No.	全長(cm)	刃部(cm)		関形状	茎尻	鞘材	把材	備考
					幅	厚さ					
14	鹿角装刀子	043-10+044-10	3	22.8	2.1	0.7	両角関	隅切	木芯	鹿角	赤彩(ベンガラ)直弧文
15	鹿角装刀子	047-19	4	19.2	1.8	0.6	背:角関	一文字 中細茎	木芯	木芯・鹿角	目釘孔1
16	鹿角装刀子	047-21	1	12.5	1.2	0.5	背:角関	刃上が凹栗	鹿角	鹿角	
17	鹿角装刀子	046-18	2	12.0	1.5	0.5	両角関	刃上が凹栗	木芯	鹿角	
18	刀子	046-12	5	12.4	1.2	0.4	背:角関	栗		木芯	把:下地樹皮巻あり

(埋葬施設2) 刀剣類											
No.	遺物名	登録No.	取上No.	全長(cm)	刃部(cm)		関形状	茎尻	鞘材	把材	備考
					幅	厚さ					
41	鹿角装刀子	046-11	7	11.0	1.3	0.4	背:角関 刃:無関	栗	鹿角	木芯・鹿角	
42	刀子	051-06		3.9	0.9	0.3					関～茎片か?

(埋葬施設3) 刀剣類											
No.	遺物名	登録No.	取上No.	全長(cm)	刃部(cm)		関形状	茎尻	鞘材	把材	備考
					幅	厚さ					
265	鹿角装刀子	047-22	1	10.2	1.9	0.6	背:角関 刃:無関			木芯	
266	鹿角装刀子	044-15		6.0	1.5	0.5	一		木芯・鹿角	鹿角	
267	刀子	044-14		2.5	1.8	0.7			木芯		
268	鹿角装刀子	047-24	2	10.2	1.5	0.5	背:角関 刃:無関	一文字		鹿角	
269	刀子	052-03	2	2.7	1.2	0.3					047-24と同一個体か
270	鹿角装刀子	047-23		13.3	1.3	0.4	両角関	栗			
280	直刀	049-10		84.9	3.7	0.7	背:無 刃:斜角関		木芯	木芯	目釘孔1

(墳丘 南) 刀剣類											
No.	遺物名	登録No.	取上No.	全長(cm)	刃部(cm)		関形状	茎尻	鞘材	把材	備考
					幅	厚さ					
299	鹿角装刀子	052-04		5.0	0.9	0.7	両角関		鹿角	木芯	
300	刀子	052-05		4.5	1.4	0.3			鹿角		
301	刀子	052-06		7.7	1.5	0.4	両角関		皮革か?	木芯	
302	鹿角装刀子	052-07		11.7	1.8	0.4	両角関		鹿角か?	木芯・鹿角	

【凡例】
* 数値横の「+」は、原形はその数値よりも長いことを示す。
* 刃部寸法は中央部について測定。
* 厚さは背側を測定。
* 「鹿角」＝鹿角装

(埋葬施設2) 鐵													
No.	登録No.	取上No.	形式	全長(cm)	鐵身長(cm)	頸部長(cm)	茎長(cm)	鐵身形状	鐵身関	茎関	矢柄	備考	
43	046-10a	15	長頭三角	11.7	2.5	7.8	1.5+	片丸造	逆刺	台形	口+木	3本銕着	
44	046-10b	15	長頭三角	13.3	2.9	7.6	3.0+	片丸造	逆刺	台形	口+木		
45	046-10c	15	長頭三角	15.1	1.4+	9.4	4.5+	片丸造	逆刺	台形	口+木		
46	045-4左	5	長頭三角	14.7	2.7	7.9	4.4	片丸造	逆刺	台形	木+口	3本銕着	
47	045-4中	5	長頭三角	11.9	2.4	12.7	1.9+	片丸造	逆刺	台形	木+口		
48	045-4右	5	長頭三角	11.8	2.7	7.4	2.1+	片丸造	逆刺	台形	木+口		
49	045-05	20	長頭三角	13.1	3.1	7.7	2.6+	片丸造	逆刺	台形	木+口	片方逆刺欠損	
50	045-06	18	長頭三角	12.1	3.1	7.8	1.5	片丸造	逆刺	台形	木+口		
51	045-03	6	長頭三角	10.5	2.7	7.4	0.8+	片丸造	逆刺	台形	木+口		
52	045-01	3	長頭三角	11.5	2.9	7.7	1.4+	片丸造	逆刺	台形	木+口		
53	048-34	西	長頭三角	11.6	2.8	7.9	1.3+	片丸造	逆刺	台形	口+木		
54	046-13	21	長頭三角	12.7	2.7	8.0	2.5+	鑄造	逆刺	台形	口		鑄あり
55	050-06	ベルト東	長頭三角	11.8	2.8+	7.8	1.7+	片丸造	逆刺	台形	口+木	矢柄に赤色顔料付着	
56	045-08	16	長頭三角	13.1	2.8	7.7	3.1+	片丸造	逆刺	台形	木+口		
57	047-27	22	長頭三角	11.4	2.6	7.1	2.3+	片丸造	逆刺	台形	口+木		
58	048-37	西	長頭三角	10.7	2.5	7.6	0.9+	片丸造	逆刺	台形	口+木		
59	047-26		長頭三角	11.9	2.8	7.1	2.4+	片丸造	逆刺	台形	口+木		
60	049-08	4	長頭三角	13.7	2.8	7.6	4.0+	片丸造	逆刺	台形	口+木		
61	049-09	4	長頭三角	13.5	2.3	7.3	3.9+	片丸造	逆刺	台形	口+木	矢柄に赤色顔料付着	
62	047-20	14	長頭三角	13.2	2.5	7.9	3.4	片丸造	逆刺	台形	口+木		
63	045-07	17	長頭三角	15.5	2.8	8.0	3.7+	片丸造	逆刺	台形	木+口		
64	048-38	西	長頭三角	13.6	2.6	7.7	3.7	片丸造	逆刺	台形	口	矢柄に赤色顔料付着	
65	050-02	11	長頭三角	12.5	2.6	7.9	2.2+	片丸造	逆刺	台形	口+木		
66	046-16	23	長頭三角	12.1	2.7	7.8	1.8+	片丸造	逆刺	台形	口+木		
67	050-04	西	長頭三角	14.4	2.9	6.9	4.8	片丸造	逆刺	台形	木	鐵身関両方欠損	
68	050-05	ベルト西	長頭三角	13.7	2.6	7.3	3.7+	片丸造	角	台形	木		
69	050-07		長頭三角か?	11.3	1.6+	6.0+	1.5+	片丸造	逆刺	台形	口+木		
70	046-14	17	長頭三角	13.2	2.8	7.2	3.6+	片丸造	逆刺+片側二段逆刺	台形	木	頸部にベンガラ付着	
71	049-07		長頭三角	11.4	1.6	8.1	1.6+	片丸造	撫	台形	口+木		
72	049-05	3	長頭三角	11.2	1.2	8.7	1.4+	片丸造	撫	台形	口+木		
73	047-25		長頭三角	10.4	1.2+	7.9	1.4+	片丸造	逆刺+二段逆刺	台形	口+木		
74	046-15	19	長頭三角	8.5	2.9	4.8	1.2	片丸造	逆刺	台形	口+木		
75	048-36	4	長頭三角	3.0	2.8	0.7+		片丸造	逆刺				
76	051-08	13	長頭三角	3.3	2.1+	1.5+		片丸造	逆刺?			逆刺欠損	
77	049-03	3	長頭三角	7.5	1.5+	5.4		片丸造					
78	051-02	15	長頭三角	6.2	1.9	4.2		片丸造	角?				
79	048-28		長頭三角	5.0	1.3	3.8+		片丸造				二段目の片側逆刺不明瞭	
80	051-03		長頭	6.8		5.5+	1.3+						
81	051-04	ベルト東	長頭	6.2		5.3+	0.9+			台形	口+木+螺		
82	050-01	4	長頭	13.1		11.5+	1.2+			台形	口+木		
83	049-04	3	長頭	11.2		9.9+	1.3+			台形	口+木		
84	049-06	6	長頭	11.7		7.6+	3.9+			台形	口+木		矢柄に赤色顔料付着
85	050-03	12	長頭	13.2		7.1+	5.6			台形	口+木	矢柄に赤色顔料付着	
86	050-08		長頭三角	12.1		6.9+	5.2+			台形	口+木		
87	049-02	3	長頭	11.9		6.5	5.5			台形	口+木	折曲鐵頸部	
88	051-05	1	長頭	4.1		4.1+				台形	口+木		
89	049-01	4	長頭三角	14.5	0.8	7.4	5	片丸造	逆刺	台形	口+木	折曲鐵 矢柄に赤色顔料	
90	048-35	2+西	長頭三角	12.2	1.3	8.3	2.9	片丸造	両角	台形	口+木		
91	051-07		長頭	7.3		5.6+	1.7+			台形	口+木+螺		
92	051-01		長頭三角	9.8	2	7.1	0.5+	片丸造	逆刺?	台形	口	補修鐵か?	
93	045-02	1	三角形	9.4	4.0	4.7	0.8+	平造	二段角?	台形	木+口		
94	045-09	2	圭頭	7.6	3.3	4.3		平造	一	台形			

(埋葬施設3)													
No.	登録No.	取上No.	形式	全長(cm)	鐵身長(cm)	頸部長(cm)	茎長(cm)	鐵身形状	鐵身関	茎関	矢柄	備考	
271	048-30㉔		長頭	3.7		3.7+						6本銕着	
272	048-30㉕		長頭三角	6.7	1.3	5.3+		片丸造	撫		口+木		
273	048-30㉖		長頭	7.8		5.2+	2.5+						
274	048-30㉗		長頭	1.0		1.0+						逆刺一方欠損	
275	052-02		長頭三角	3.6	2.5	1.5+		片丸造	逆刺				
276	052-01	西	長頭三角	4.4	2.3	2.3+		片丸造	逆刺				
277	048-32		長頭三角	4.2	1.2	3.1		片丸造	角+片側二段逆刺			6本銕着	
278	048-30㉘		長頭三角	4.4	1.4	3.0+		片丸造	逆刺+片側二段逆刺				
279	048-31		長頭三角	10.5	0.9+	7.9	2.2+	片丸造	角+片側二段逆刺	台形	口+木		

【凡例】
* 数値横の「+」は、原形はその数値よりも長いことを示す。 * 「欄」＝案に觀察状の欄が施されている。
* 「口」＝横長による口巻が残存 * 「口」＝横長による口巻が残存 * 「形式」は杉山秀武氏の分類に基づく。
* 「木」＝横方向鐵條の木質が残存

(埋葬施設1) 馬具											
No.	遺物名	登録No.	取上No.	全長 (cm)	幅 (cm)	その他の計測値				備考	
						(cm)	(cm)	(cm)			
1	楕円形鏡板	041-01		14.0	11.5				鈎金具2(R44-13)を伴う		
2	兵庫鎖	044-13		8.8	2.4	鈎金具幅1.3	銚1箇所	黄金具0.4×2連×1箇所	兵庫鎖6連		
3	窗	042-03	8	13.1		環外径 2.3			2連		
4	兵庫鎖	044-12	8	16.8	2.4	鈎金具幅1.4	新銅径0.6×3箇所	黄金具0.4×2連×2箇所	兵庫鎖6連		
12	辻金具	043-04	21	5.9	3.3	黄金具幅4.0～6.0		銚頭径0.7	2爪欠損 黄金具2箇所・銚1箇所残存		
5	楕円形鏡板	042-02	8	13.8	10.9				鈎金具4(R44-12)を伴う		
13	辻金具	043-05	7	6.1	6.0	黄金具幅5.0～6.0		銚頭径0.9	黄金具4箇所・銚2箇所残存		
7	引手金具	043-10	8-1	13.6		環外径 2.3	軸0.85×1.0				
6	引手金具	043-11	8-2	14.2		環外径 2.2	軸1.0×0.95				
8	引手壺	043-06		7.0	4.9	壺幅 2.8					
9	引手壺	043-07	8	6.9	5.3	壺幅 2.8					
10	釵具	043-09	20	4.9	3.3				舌 欠失		
11	釵具	043-08	6	5.2	3.5	舌 幅0.4×長5.0					

第Ⅶ－２表 加和良１・２号墳出土玉類観察表

加和良１号墳 埋葬施設３ 土製練玉

No.	登録番号	出土位置	色調	外径mm	最大径mm	厚mm	孔径mm	重量 g	備考
103	019-09		黒	5.00	7.20	6.10	1.80	0.31	
104	019-10	鉄刀下	黒	4.80	7.20	6.40	1.10	0.33	№1
105	019-11	鉄刀下	黒	5.30	7.20	6.50	1.20	0.39	№2
106	019-12	鉄刀下	黒	5.10	7.60	6.20	1.30	0.34	№3
107	019-13	鉄刀下	黒	4.80	7.60	6.60	1.30	0.38	№4
108	019-14	鉄刀下	黒	4.90	7.80	6.70	1.40	0.39	№5
109	019-15	鉄刀下	黒	4.00	7.30	6.50	1.30	0.29	№6
110	019-16	鉄刀下	黒褐	4.20	7.10	6.10	1.30	0.28	№7
111	019-17	鉄刀下	黒褐	4.10	7.00	6.30	1.00	0.31	№8
112	019-18	鉄刀下	黒褐	4.20	7.30	6.70	1.40	0.39	№9
113	019-19	鉄刀下	黒	4.80	7.20	6.40	1.30	0.32	№10
114	019-20	鉄刀周辺	黒	5.20	7.20	6.10	1.20	0.28	
115	019-21	鉄刀周辺	黒	-	-	5.90	-	0.11	1/2個体欠損
116	019-22	鉄刀周辺	黒褐	4.20	7.00	6.80	1.40	0.37	№11
117	019-23	鉄刀周辺	黒褐	3.50	7.30	6.50	1.40	0.33	№12
118	019-24	鉄刀周辺	黒	5.20	7.70	6.10	1.80	0.35	№13
119	019-25	鉄刀周辺	黒褐	4.80	7.40	6.30	1.30	0.32	№14
120	020-26	鉄刀周辺	黒褐	4.20	7.90	6.30	1.40	0.37	№15
121	020-27	鉄刀周辺	褐灰	3.90	6.80	5.20	1.30	0.25	№16
122	020-28	鉄刀周辺	黒褐	4.80	7.50	6.00	1.30	0.31	№17
123	020-29	鉄刀周辺	褐灰	4.20	7.40	5.30	1.40	0.28	№18
124	020-30	鉄刀周辺	黒褐	4.20	7.50	6.10	1.40	0.34	№19
125	020-31	鉄刀周辺	黒褐	4.20	6.50	5.90	1.40	0.27	№20
126	020-32	鉄刀周辺	黒褐	4.80	6.80	6.20	1.40	0.27	№21
127	020-33	鉄刀周辺	黒褐	5.20	7.40	5.10	1.50	0.27	№22
128	020-34	鉄刀周辺	黒褐	6.10	7.40	5.90	1.30	0.26	№23
129	020-35	鉄刀周辺	黒	4.20	7.20	6.30	1.30	0.31	№24
130	020-36	鉄刀周辺	黒褐	4.90	7.00	6.30	1.30	0.35	№25
131	020-37	鉄刀周辺	黒褐	3.80	7.10	5.80	1.30	0.27	№26
132	020-38	鉄刀周辺	黒褐	4.80	7.80	6.40	1.30	0.35	№27
133	020-39	鉄刀周辺	黒褐	3.80	7.60	6.50	1.40	0.37	№28
134	020-40	鉄刀周辺	黒褐	4.80	7.50	6.60	1.30	0.35	№29
135	020-41	鉄刀周辺	黒	3.80	7.30	6.80	1.30	0.35	№30
136	020-42	鉄刀周辺	黒褐	4.10	7.20	6.10	1.20	0.35	№31
137	020-43	鉄刀周辺	黒褐	3.70	7.30	6.50	1.30	0.35	№32
138	020-44	鉄刀周辺	黒	4.00	6.80	5.80	1.20	0.27	№33
139	020-45	鉄刀周辺	黒褐	4.00	7.50	6.40	1.40	0.34	№34
140	020-46	鉄刀周辺	黒褐	4.20	7.10	6.10	1.40	0.31	№35
141	020-47	鉄刀周辺	黒	3.90	7.50	6.80	1.40	0.36	№36
142	020-48	鉄刀周辺	黒褐	3.80	6.50	5.40	1.20	0.25	№37
143	020-49	鉄刀周辺	黒	3.40	7.00	6.40	1.30	0.27	№38
144	021-50	鉄刀周辺	黒	3.80	7.50	6.30	1.40	0.30	№39
145	021-51	鉄刀周辺	黒褐	5.00	7.4-8.0	6.40	1.30	0.37	№40
146	021-52	鉄刀周辺	黒	4.10	7.10	6.40	1.20	0.31	№41
147	021-53	鉄刀周辺	黒	4.20	7.80	6.50	1.40	0.39	№42
148	021-54	鉄刀周辺	黒褐	4.20	7.10	5.80	1.40	0.29	№43
149	021-55	鉄刀周辺	黒褐	4.00	7.20	6.40	1.50	0.33	№44
150	021-56	鉄刀周辺	黒褐	4.40	7.30	5.00	1.20	0.29	№45
151	021-57	鉄刀周辺	黒褐	3.80	7.30	6.50	1.30	0.35	№46
152	021-58	鉄刀周辺	黒褐	3.80	7.40	6.10	1.40	0.32	№47
153	021-59	鉄刀周辺	黒褐	4.10	7.70	5.80	1.40	0.34	№48
154	021-60	鉄刀周辺	黒	3.90	7.40	6.30	1.30	0.35	№49
155	021-61	鉄刀周辺	黒褐	4.20	7.70	6.50	1.30	0.36	№50
156	021-62	鉄刀周辺	黒褐	4.30	7.80	6.10	1.30	0.37	№51
157	021-63	鉄刀周辺	黒褐	3.80	6.90	6.00	1.50	0.27	№52
158	021-64	鉄刀周辺	黒褐	3.90	6.80	6.20	1.20	0.31	№53
159	021-65	鉄刀周辺	黒	4.20	7.5-8.3	7.00	1.20	0.42	№54
160	021-66		黒褐	3.90	6.90	6.10	1.30	0.29	№55
161	021-67	鉄刀周辺	黒褐	4.10	6.80	6.00	1.40	0.30	№56
162	021-68	鉄刀周辺	黒	4.90	7.60	6.40	1.7-2.6	0.38	№57
163	021-69	鉄刀周辺	黒褐	3.70	7.30	6.00	1.40	0.34	№58
164	021-70	鉄刀周辺	黒褐	4.80	7.10	6.60	1.30	0.32	№59
165	021-71	鉄刀周辺	黒褐	3.80	7.10	6.20	1.30	0.33	№60
166	021-72	鉄刀周辺	褐灰	3.80	6.60	5.80	1.20	0.25	№61
167	021-73	鉄刀周辺	黒褐	3.80	6.80	6.10	1.30	0.26	№62
168	022-74	鉄刀周辺	褐灰	3.90	6.60	5.90	1.30	0.33	№63
169	022-75	鉄刀周辺	黒褐	3.80	7.00	6.50	1.20	0.34	№64
170	022-76	鉄刀周辺	黒	3.90	7.10	6.50	1.20	0.29	№65
171	022-77	鉄刀周辺	褐灰	3.80	7.00	5.40	1.70	0.30	№66
172	022-78	鉄刀周辺	黒褐	3.80	6.90	6.00	1.30	0.31	№67
173	022-79	鉄刀周辺	黒褐	3.70	7.30	6.30	1.40	0.34	№68
174	022-80	鉄刀周辺	褐灰	3.80	7.10	6.10	1.30	0.36	№69
175	022-81	鉄刀周辺	黒褐	3.30	7.40	6.40	1.40	0.36	№70
176	022-82	鉄刀周辺	黒褐	3.90	6.60	5.90	1.30	0.26	№71
177	022-83	鉄刀周辺	黒褐	4.00	7.00	6.00	1.40	0.29	№72
178	022-84	鉄刀周辺	黒	2.80	6.50	5.80	1.40	0.26	№73
179	022-85	鉄刀周辺	黒褐	3.60	7.00	6.10	1.20	0.32	№74
180	022-86	鉄刀周辺	黒	3.90	7.80	6.80	1.40	0.40	№75
181	022-87	鉄刀周辺	褐灰	4.00	7.50	5.60	1.50	0.23	№76
182	022-88	鉄刀周辺	黒	3.40	6.60	5.20	1.40	0.25	№77
183	022-89	鉄刀周辺	黒褐	3.00	6.7-7.5	5.70	1.30	0.29	№78
184	022-90	鉄刀周辺	黒褐	3.20	6.80	5.90	1.20	0.26	№79
185	022-91	鉄刀周辺	黒褐	3.90	7.20	6.50	1.30	0.33	№80
186	022-92	鉄刀周辺	黒褐	3.80	6.80	6.00	1.2-1.7	0.33	№81
187	022-93	鉄刀周辺	黒褐	3.30	6.80	6.50	1.40	0.33	№82
188	022-94	鉄刀周辺	黒褐	4.80	7.30	6.20	1.30	0.38	№83
189	022-95	鉄刀周辺	黒褐	3.20	6.80	6.00	1.40	0.28	№84
190	022-96	鉄刀周辺	黒褐	3.70	7.40	6.20	1.40	0.31	№85
191	022-97	鉄刀周辺	黒	3.90	6.80	6.00	1.30	0.30	№86
192	023-98	鉄刀周辺	黒褐	3.20	6.70	5.90	1.30	0.31	№87
193	023-99	鉄刀周辺	黒	3.30	7.40	5.90	1.20	0.29	№88
194	023-100	鉄刀周辺	黒褐	3.20	7.10	5.70	1.40	0.30	№89
195	023-101	鉄刀周辺	褐灰	3.90	8.00	6.20	1.60	0.38	№90
196	023-102	鉄刀周辺	黒褐	3.80	6.90	5.90	1.30	0.29	№91
197	023-103	鉄刀周辺	黒褐	2.80	7.50	6.40	1.40	0.33	№92
198	023-104	鉄刀周辺	黒	3.80	7.20	6.10	1.30	0.34	№93
199	023-105	鉄刀周辺	黒褐	3.00	7.90	6.10	1.40	0.34	№94
200	023-106	鉄刀周辺	黒	3.80	6.80	6.00	1.30	0.29	№95

No.	登録番号	出土位置	色調	外径mm	最大径mm	厚mm	孔径mm	重量g	備考
201	023-107	鉄刀周辺	黒褐	4.00	7.3-8.2	6.00	1.40	0.39	№96
202	023-108	鉄刀周辺	黒	3.50	7.30	6.60	1.40	0.32	№97
203	023-109	鉄刀周辺	黒	3.40	7.30	6.30	1.40	0.38	№98
204	023-110	鉄刀周辺	黒褐	3.60	7.10	5.90	1.30	0.28	№99
205	023-111	鉄刀周辺	黒	3.70	6.80	5.20	1.40	0.24	№100
206	023-112	鉄刀周辺	黒褐	6.00	6.8-7.7	3.20	1.40	0.32	№101
207	023-113	鉄刀周辺	黒	2.80	6.60	6.30	1.20	0.27	№102
208	023-114	鉄刀周辺	黒褐	3.60	7.40	6.10	1.40	0.36	№103
209	023-115	鉄刀周辺	黒褐	3.30	7.30	5.50	1.30	0.32	№104
210	023-116	鉄刀周辺	黒	3.30	6.80	5.90	1.30	0.28	№105
211	023-117	鉄刀周辺	黒褐	3.50	7.10	5.30	1.40	0.29	№106
212	023-118	鉄刀周辺	黒褐	3.20	7.50	6.90	1.30	0.40	№107
213	023-119	鉄刀周辺	黒	3.80	7.00	6.10	1.40	0.29	№108
214	023-120	鉄刀周辺	黒褐	3.30	7.20	6.00	1.30	0.30	№109
215	023-121	鉄刀周辺	黒	3.90	7.10	5.70	1.30	0.32	№110
216	024-122	鉄刀周辺	黒褐	3.00	7.80	6.20	1.50	0.27	№111
217	024-123	鉄刀周辺	黒褐	3.80	8.10	7.10	1.10	0.39	№112
218	024-124	鉄刀周辺	黒	3.00	7.50	6.70	1.50	0.28	№113
219	024-125	鉄刀周辺	黒	3.00	7.80	6.20	1.40	0.31	№114
220	024-126	鉄刀周辺	黒褐	2.80	6.00	5.40	1.50	0.27	№115
221	024-127	鉄刀周辺	黒褐	3.50	7.50	5.90	1.40	0.33	№116
222	024-128	鉄刀周辺	黒褐	3.10	7.20	6.40	1.30	0.35	№117
223	024-129	鉄刀周辺	黒褐	3.50	6.70	5.60	1.40	0.33	№118
224	024-130	鉄刀周辺	黒褐	3.20	7.50	5.20	1.40	0.33	№119
225	024-131	鉄刀周辺	黒褐	3.20	6.80	6.30	1.40	0.32	№120
226	024-132	鉄刀周辺	褐灰	6.40	6.9-7.8	3.30	1.30	0.34	№121
227	024-133	鉄刀周辺	黒褐	6.20	6.8-7.8	3.20	1.40	0.35	№122
228	024-134	鉄刀周辺	黒褐	3.30	7.30	6.20	1.50	0.34	№123
229	024-135	鉄刀周辺	黒褐	3.20	7.50	5.80	1.6-2.3	0.34	№124
230	024-136	鉄刀周辺	黒褐	4.80	7.50	5.90	1.4-1.8	0.31	№125
231	024-137	鉄刀周辺	黒	3.80	7.20	6.20	1.40	0.33	№126
232	024-138	鉄刀周辺	黒褐	3.30	7.40	6.10	1.40	0.33	№127
233	024-139	鉄刀周辺	黒	3.20	7.00	6.30	1.40	0.34	№128
234	024-140	鉄刀周辺	褐灰	3.40	7.30	5.90	1.30	0.32	№129
235	024-141	鉄刀周辺	黒褐	3.00	6.50	5.80	1.40	0.28	№130
236	024-142	鉄刀周辺	黒褐	3.80	7.20	6.00	1.40	0.32	№131
237	024-143	鉄刀周辺	黒褐	3.20	6.70	5.70	1.30	0.26	№132
238	024-144	鉄刀周辺	黒褐	3.50	7.80	6.30	1.40	0.38	№133
239	024-145	鉄刀周辺	褐灰	3.50	7.20	5.90	1.50	0.34	№134
240	024-146	鉄刀周辺	黒褐	4.30	7.30	6.60	1.40	0.40	№135
241	024-147	鉄刀周辺	黒褐	3.20	7.50	5.90	1.3-1.7	0.33	№136
242	025-148		黒褐	3.80	6.90	5.80	1.40	0.28	№137
243	025-149		黒褐	3.30	7.30	6.70	1.50	0.28	№138
244	025-150		黒	3.00	7.00	6.20	1.30	0.29	№139
245	025-151		黒褐	4.50	7.50	6.20	1.40	0.38	№140
246	025-152		黒褐	3.40	6.70	5.70	1.40	0.26	№141
247	025-153		黒	3.20	6.70	6.40	1.40	0.31	№142
248	025-154		黒	2.80	7.10	5.70	1.50	0.29	№143
249	025-155		黒褐	3.30	7.10	6.30	1.30	0.30	№144
250	025-156		黒	3.20	6.80	6.00	1.40	0.30	№145
251	025-157		黒褐	4.20	6.70	5.50	1.50	0.24	№146
252	025-158		黒	3.10	6.90	5.80	1.30	0.26	№147
253	025-159		褐灰	3.80	6.70	5.70	1.40	0.26	№148
254	025-160		褐灰	3.80	8.00	6.30	1.30	0.39	№149
255	025-161		褐灰	3.90	7.40	6.30	1.30	0.32	№150
256	025-162		黒褐	3.30	7.10	5.90	1.50	0.34	№151
257	025-163		黒	3.70	7.10	5.70	1.40	0.30	№152
258	025-164		黒	3.80	6.60	5.70	1.30	0.26	№153
259	025-165		黒	3.10	7.00	6.20	1.30	0.32	№154
260	025-166		黒褐	3.20	7.10	6.00	1.50	0.32	№155
261	025-167		黒	3.40	6.50	5.60	1.30	0.26	№156
262	025-168		褐灰	3.60	6.50	5.30	1.50	0.25	№157
263	025-169		黒褐	3.20	7.30	6.30	1.50	0.34	№158
264	025-170		黒褐	3.60	7.50	6.10	1.80	0.33	№159

VIII 徳居門田遺跡 ～酒井神社北麓の遺跡～

1 調査の経過

徳居門田遺跡（門田遺跡）は、鈴鹿市徳居町字門田に所在する遺跡である。県営圃場整備事業（合川・下之庄地区）に伴い、昭和63年9月26日から同年9月27日にかけて、230㎡が調査された。

2 調査区の状況

徳居門田遺跡は、中ノ川に向かって北に派生する丘尾根の北端部に位置し、標高は約12mである。圃場整備前は水田として利用されていた。

発掘調査は、対象地に梯子状の調査溝を設定して実施された。その結果、発掘調査区内での遺構は検出されなかった。

3 出土した遺物

1～3は古墳時代後期の遺物。1は須恵器杯蓋、

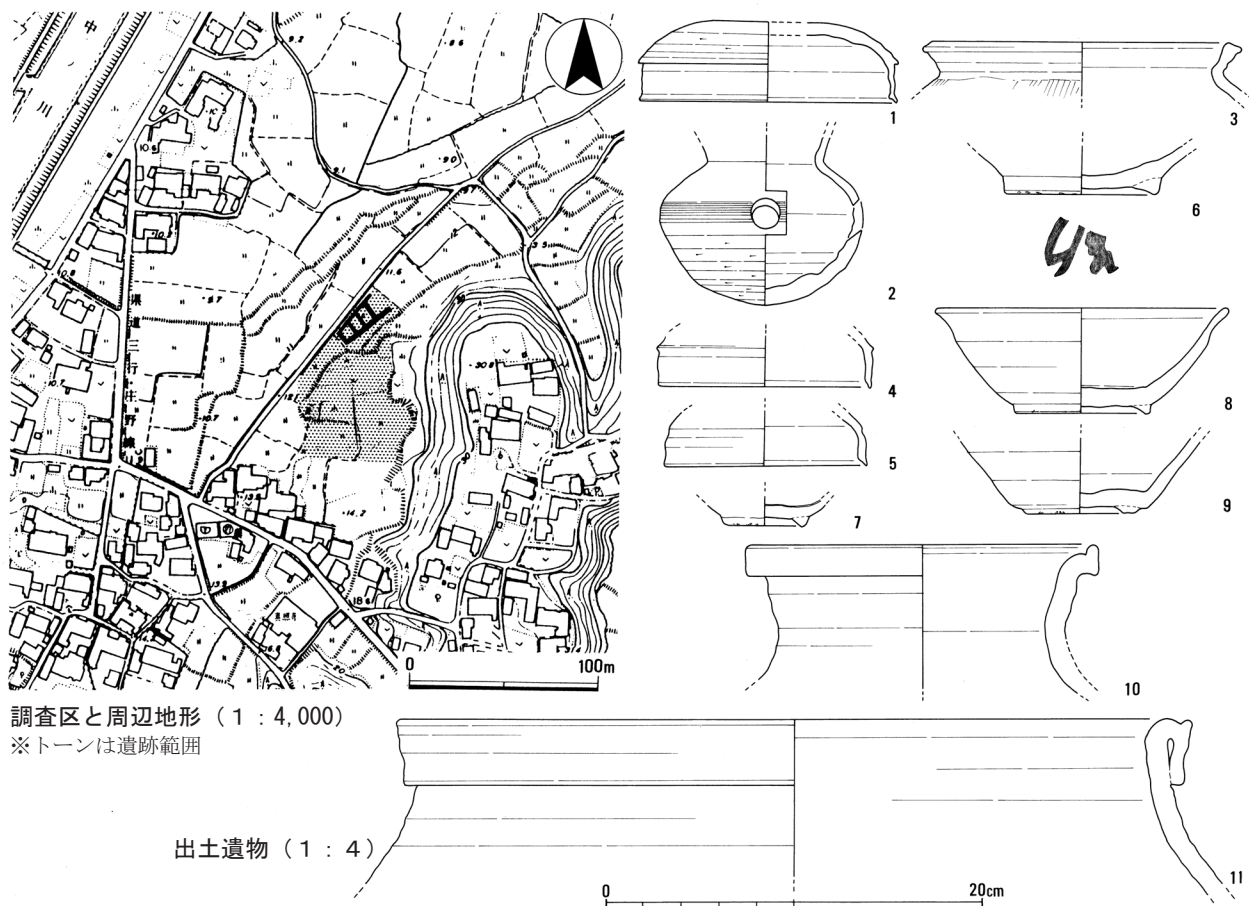
2は須恵器甕。3は土師器台付甕の口縁部。4・5は飛鳥時代頃の須恵器で、いずれも杯蓋である。

6は平安時代末期頃の灰釉陶器碗で、底部に花押状の墨書がある。内面には墨痕があり、転用碗と考えられる。7～9は陶器碗（山茶碗）類で、12世紀後葉から13世紀中葉にかけてのもの。6の内面には漆が付着しており、漆の容器として用いられたと見られる。

10・11は知多半島（常滑）産の壺甕類。10は13世紀代、11は14世紀代頃のものである。

5 調査のまとめ

徳居門田遺跡では、明確な遺構は検出されなかったが、出土遺物は古墳時代後期から中世におよぶものがあり、比較的時期幅の広い遺跡といえる。調査区の南部や、あるいは東部の丘陵上に良好な遺跡がある可能性が考えられよう。（伊藤）



第Ⅷ－1図 徳居門田遺跡関係図

IX 中ノ川中流域の遺跡動向 ～まとめに代えて～

本書では、大小合わせて6遺跡の資料を報告してきた。今後はこの資料をも用いながら、中ノ川流域全体のより詳しい状況を考察していく必要がある。そこでこの章では、今回報告した遺跡を中心に、当地の遺跡動向を総覧し、まとめに代えたい。

1 時期別の遺跡動向

今回報告した遺跡を中心に、発掘調査で確認された時代を簡単に図示したのが第IX-1図である。判断は、目立つもの・やや目立つもの・少し見られるもの・見られないもの、の4区分としたが、遺物点数などのデータの根拠には基づいていない。しかし、おおまかな動向はこれで充分把握できるものと考ええる。この図をもとに、当地の遺跡動向を見ておこう。

弥生時代以前 縄文時代後期の遺構・遺物が、加和良神社遺跡（第1次）で確認されている。加和良神社遺跡は中ノ川北岸にあたる低丘陵上である。この時期の遺跡は、このような低丘陵上で小規模な形成に止まっていると今のところは考えられる。

弥生時代では、前期の動向は明確でなく、中期には寺門遺跡で遺物が出土するものの、遺構は確認されていない。後期に至ると、その後半期に寺門遺跡で周溝墓と考えられる遺構が見られる。寺門遺跡は中ノ川北岸の低地部にあたる。弥生時代後期後半頃から河川寄り低地部での遺跡形成が本格化するという現象は、例えば河曲中部低地遺跡群⁽¹⁾や雲出島貫遺跡⁽²⁾などでも確認できる現象である。

古墳時代の集落 寺門遺跡で前期後半から中期頃の集落が確認された。また、桑名垣内遺跡で後期頃の竪穴住居がある。寺門遺跡の状況は、弥生時代後期後半頃からの継続と評価できるものであろう。

古墳時代後期の当地域は、南東部に徳居窯跡群が形成される時期にあたる。したがって、その工人集団と集落との関係は極めて重要である。しかし、今回報告した調査区内では、この時期のとくに大規模な集落跡は確認できなかった。発掘調査地以外に広がっている可能性もあるものの、古墳時代集落が大

規模に展開する状況は、当地域では見られないと考えるのが今のところ妥当であろう。そのため、徳居窯跡群を形成した集団の居住地は中ノ川中流域ではなく、別の地域と考えることができる。

古墳群 長法寺1号墳と加和良1～3号墳の合計4基を報告した。長法寺1号墳は6世紀前半頃に相当する円墳で、淡輪技法を有する円筒埴輪や、馬・人物などの形象埴輪を有している。淡輪技法の円筒埴輪は、中ノ川流域や鈴鹿川流域で集中的に観察できるもので、当地域の大きな特徴となっている⁽³⁾。

加和良1号墳からは、楕円形鏡板付轡が出土しており、極めて貴重な資料である。直弧文を施した鹿角装刀子を含め、通常古墳とは異なった副葬品が見られることも特徴である。小規模墳ながら、独特の地域社会がこの時期の当地に形成されていたことを想定させる。当地に「ミヤケ」という地名が残っていることと、何らかの関係があるのかも知れない。

飛鳥・奈良時代の集落 飛鳥時代に相当する竪穴住居は、桑名垣内遺跡や加和良神社遺跡で確認できる。これらは小規模な竪穴住居集落で、古墳時代後期から続く傾向とみてよいであろう。

平安時代の規則的配列建物群 平安時代になると、当地域の遺跡形成が急激に変化している。その代表が桑名垣内遺跡である。ここでは平安時代の規則的に配列された建物群が確認された。構成される建物群も多く、何らかの公的機関が存在していた可能性がある。先述の「ミヤケ」地名とも関係するのだろうか。今後の検討深化が必要である。

2 中世集落の動向

今回報告したなかで、最も多いのがこの時期の集落遺跡である。この時期の動向を第IX-2図から見ておく。これは、灰釉陶器・山茶碗類・古瀬戸・大窯製品といった尾張産陶器類の出土状況から第IX-1図と同じ方法で見たものである。この時期は、桑名垣内遺跡を初期のピークとし、その後は加和良神社遺跡・橋門遺跡・長法寺西垣内遺跡の順にその中

心が移行する状況が見て取れる。しかし、古瀬戸中期併行期には急激に減少し、古瀬戸後期併行は長法寺西垣内遺跡や橋門遺跡でわずかに見られる程度である。そして、瀬戸大窯期の遺物はほとんど見られなくなっている。

中ノ川流域の状況としては、古代末期頃に拠点となる遺跡から分化するかたちで集落地が広がっていることが明確に確認できた。

なお、中世集落の多くは12～13世紀代に集中し、14世紀代や16世紀代の状況はよく分からない。これは中ノ川流域に限ったことではなく、旧伊勢国内の他地域でも見られる基本的なあり方である。これが何を意味するのかは今のところ不明とせざるを得ないが、当地域を含めた伊勢地域全体の問題として今

後も検討を加える必要がある。

以上、簡単ではあるが、中ノ川中流域の遺跡動向を見てきた。中ノ川流域のようにまとまった調査資料のある地域はそれほど多くない。当地域を考古学的に検討することは、他の地域のモデルケースともなる重要な作業であると考え。今後、より詳細な検討を加えていくべきであろう。（伊藤）

< 註 >

- (1)三重県埋蔵文化財センター『河曲の遺跡』(2004年)
- (2)三重県埋蔵文化財センター『嶋拔』Ⅲ (2001年) ほか
- (3)鈴木敏則「伊勢の淡輪円筒埴輪」(『Miehistory』vol. 3 三重歴史文化研究会 1991年)

	縄文						弥生			古墳			飛鳥	奈良		平安			中世				近世
	草創	早	前	中	後	晩	前	中	後	前	中	後		前	後	前	中	後	I	II	III	IV	
寺 門																							
長法寺西垣内																							
桑名垣内																							
加和良神社																							
橋 門																							
敷 伝																							
徳居門田																							
長法寺古墳群																							
加和良古墳群																							

第Ⅸ-1図 中ノ川中流域の遺跡変遷

	古瀬戸										前期		中期		後	大窯
	灰釉陶器・山茶碗	K14	K90	O53	H72	百	3	4	5	6	7	8	9	10		
寺 門																
長法寺西垣内																
桑名垣内																
加和良神社																
橋 門																
敷 伝																
徳居門田																

第Ⅸ-2図 中ノ川中流域における古代・中世遺跡の変遷



北部竪穴住居跡群（南から）



竪穴住居SH1付近（西から）



中央部SK9付近（北から）



北部SB60付近（西から）



第1次調査 A地区（東から）



第1次調査 A地区中央部分（東から）



第1次調査区（北から）



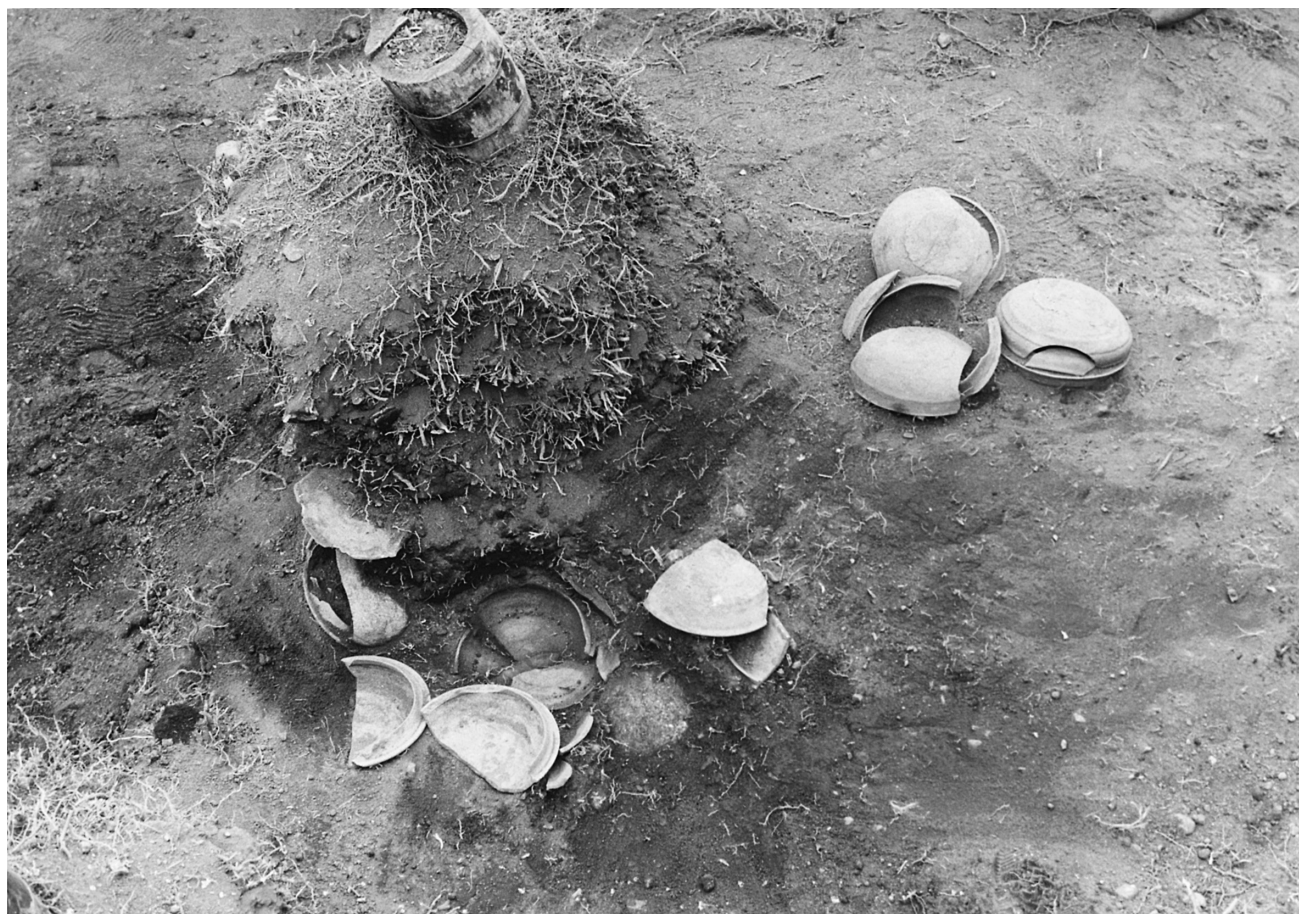
第2次調査区（西から）



埋葬施設全景（東から）



埋葬施設1 馬具と須恵器（東から）



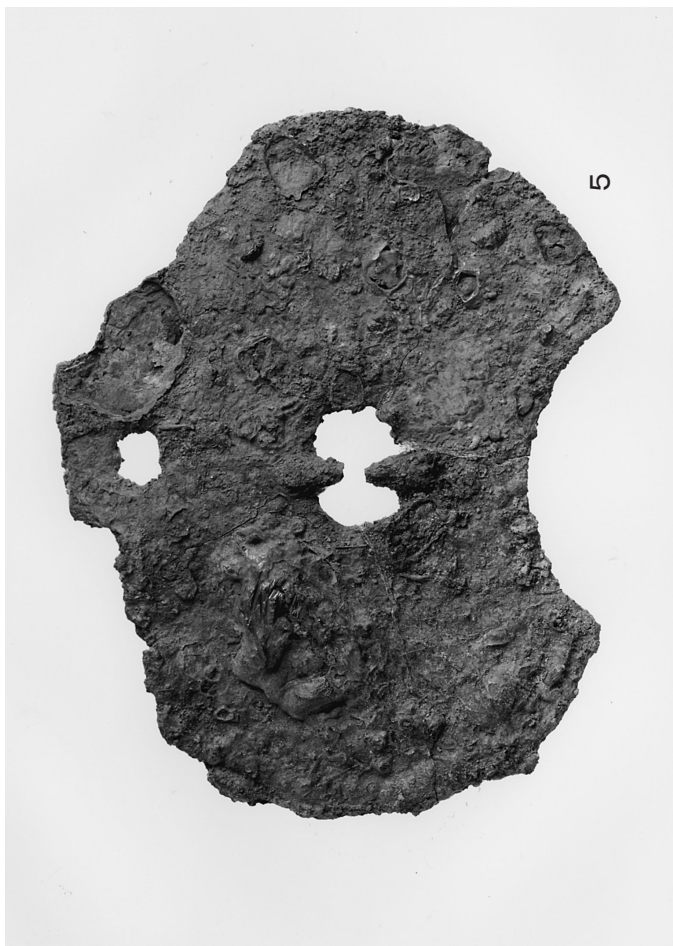
1号墳墳丘南西部出土の須恵器（北から）



2号墳埋葬施設（西から）



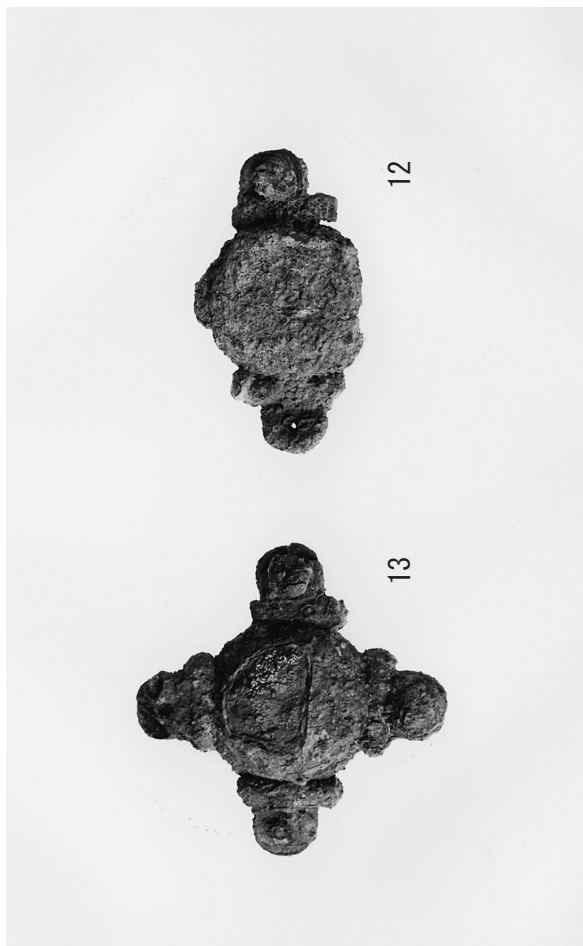
楕円形鏡板



楕円形鏡板



小刀（把部直弧文）



辻金具